宮城県文化財調査報告書第198集

山王遺跡伊勢地区の調査

――県道『泉―塩釜線』関連調査報告書Ⅴ――

平成16年3月

宮城県教育委員会
宮城県土木部

序　　文

新たな世紀を迎え、ゆとりや豊かさを目指すことが重要になってきたなかで、地域住民の間では身近な地域の個性豊かな風土や歴史的な文化財の保存・活用の取り組みへの気運が高まっています。

しかし、一方では道路建設や宅地造成など都市化の波が地方にも押し寄せ、大規模なほ場整備などの各種開発事業も年を追うごとに激化しており、文化財は年々破壊され、消滅の危機にさらされることが多くなってきております。なかでも土地との結びつきの強い埋蔵文化財は、各種の開発により常に破壊される恐れがあることから、当教育委員会では開発部局等に遺跡の所在を周知徹底するとともに、開発との関わりが生じた場合には貴重な文化財を積極的に保護することに努めてきております。

本書は、宮城県土木部との保存協議に基づき、主要地方道泉塩釜線の道路改良工事に先立って実施した多賀城市山王遺跡伊勢地区の発掘調査報告書です。山王遺跡は特別史跡多賀城跡の南西に広がる遺跡であり、調査の結果、平安時代の国府周辺の様子がより明らかになってきました。こうした成果が広く県民の皆様や各地の研究者に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡の保存に理解を示され、発掘調査に際しては多大なるご協力をいただいた関係機関の方々、さらに実際の調査にあたられた皆様に対し、厚く御礼申し上げる次第です。

平成16年３月

宮城県教育委員会
教育長　白　石　　晃

例　　言

1．本書は、主要地方道泉塩釜線道路改良工事に伴い行った平成14・15年度の山王遺跡伊勢地区の発掘調査報告書である。

2．調査は宮城県教育委員会が主体となり、宮城県教育庁文化財保護課が担当した。

3．本書の第１図は国土交通省国土地理院発行の「仙台東北部」「塩竈」（縮尺１/25000）を、第２図は多賀城市都市計画図（縮尺１/5000）を複製して使用した。

4．遺構平面図に付した距離の数値は、本遺跡八幡地区内の測量原点（０・０）からの距離を表している。例えばW810、N135という数値は、原点から西に810m、北に135mの距離であることを示している。測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標系第Ｘ系のＸ＝－188,880.000、Ｙ＝13,230.000である。

5．使用した遺構略号は以下の通りである。

堀・柱列跡：SA　　掘立柱建物跡：SB　　井戸跡：SE　　墓跡：SX

河川・溝跡：SD　　土壙：SK　　小溝状遺構・湿地：SF

6．本遺跡八幡・町地区では平成４年から遺構番号を通し番号としている。そこで本書では遺構の種別に関わらず調査・整理の際に付した通し番号（１～199）に、今までの遺構番号に続く3700の数値を加えて記した。例えば、調査・整理時のSE１は本書ではSE3701、SD100はSD3800となる。また、調査区も調査・整理時には東から０～３区としたが、本書では東から１～４区とした。

7．土色の記述については『新版標準土色帖』（小原・竹原1973）を参照した。

8．本書で使用した「灰白色火山灰」（山田・庄司1980）は、10世紀前葉頃に降下したとみられているものである（白鳥1980、井上・山田1990）。

9．本書における土師器の記述については、必要に応じて、製作に際しロクロを使用したものを「ロクロ調整」、使用しないものを「非ロクロ調整」と表記した。

10．出土した木製品の樹種同定は（株）古代の森研究舎に委託し、その成果は付章に掲載した。

11．発掘調査及び整理・報告書の作成に際して、以下の方々と関係機関から指導、助言を賜った（五十音順、敬称略）。

高桑　登・高桑広美（山形県埋蔵文化財センター）、千葉孝弥（多賀城市埋蔵文化財調査センター）、本田泰貴（東北陶磁文化館）、東北歴史博物館、宮城県多賀城跡調査研究所

12．本書は調査を担当した調査員の協議のうえ、吉野　武と田中政幸が執筆し、吉野が編集した。

13．発掘調査の記録や整理資料、出土遺物は宮城県教育委員会が保管している。

目　　次

第Ⅰ章　調査の経緯と遺跡の概要 …… 1
　1．調査の経緯 …… 1
　2．遺跡の概要 …… 1
第Ⅱ章　調査の成果 …… 4
　1．調査の方法と経過 …… 4
　2．地形と層序 …… 4
　3．発見した遺構と遺物 …… 6
　　1区　A．古代 …… 6
　　B．近世 …… 11
　　2区　A．古代 …… 14
　　B．近世 …… 24
　　3・4区　A．古代 …… 32
　　B．近世 …… 44
第Ⅲ章　考察 …… 52
　A．古代 …… 52
　B．近世 …… 62

付章　多賀城市山王遺跡出土木製品・漆器の樹種同定 …… 71

調　査　要　項

遺 跡 名：山王遺跡（宮城県遺跡登録番号　18013）

遺跡記号：ＦＩ

所 在 地：宮城県多賀城市南宮字伊勢

調査要因：主要地方道泉塩釜線道路改良工事

発掘面積：約5900㎡

調査期間：平成12年４月10日～４月18日（確認調査）

　　平成14年５月７日～７月25日、平成15年８月４日～11月６日

調査担当：宮城県教育庁文化財保護課

　　平成12年度　古川一明、山田晃弘

　　平成14年度　岩見和泰、吉野　武、西村　力

　　平成15年度　吉野　武、西村　力、田中政幸

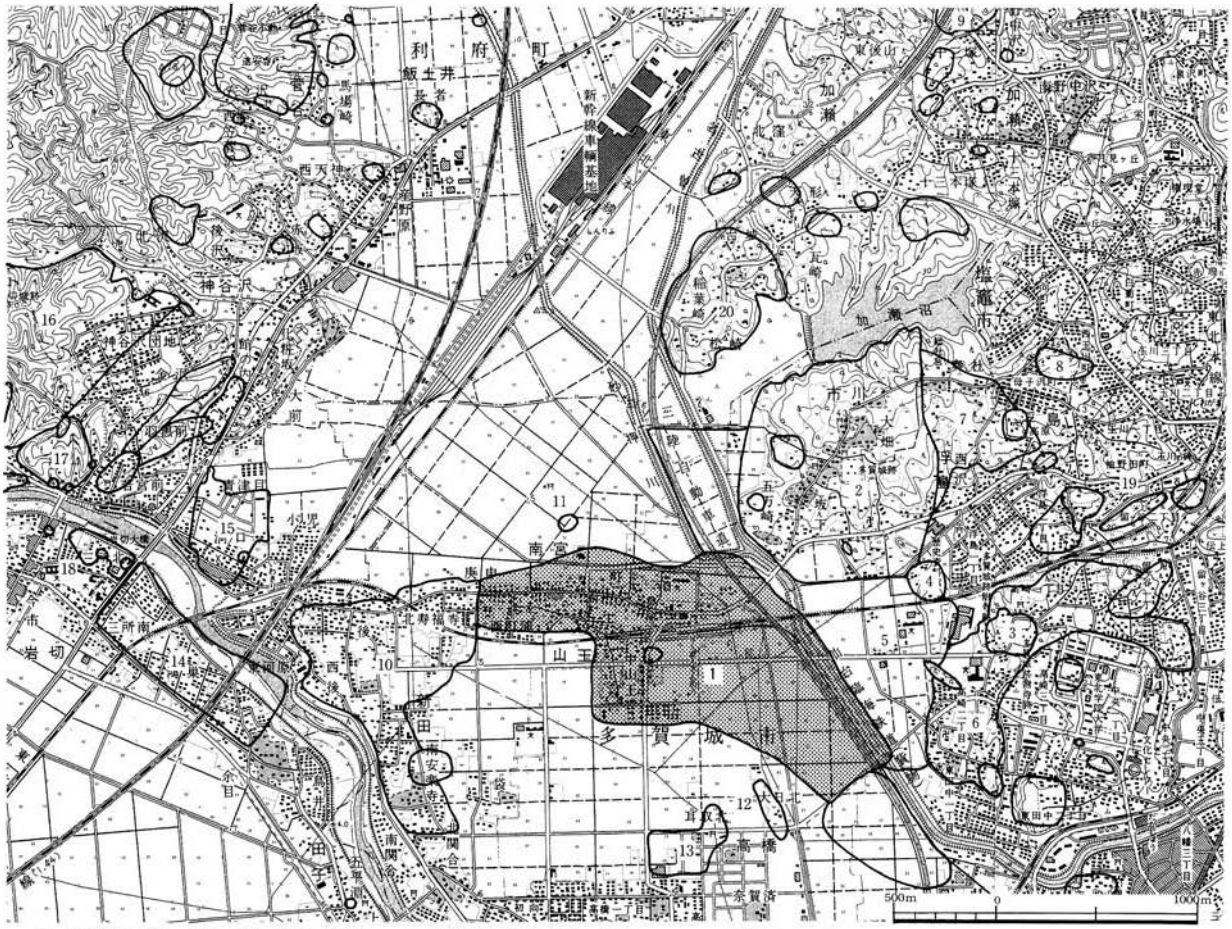
第Ⅰ章　調査の経緯と遺跡の概要

1．調査の経緯

本書は、主要地方道泉塩釜線の道路改良工事に伴って平成14・15年度に実施した山王遺跡伊勢地区の発掘調査報告書である。この道路は仙塩道路の仮称「多賀城インター」にアクセスするものとして建設決定されたが、そのルートは山王遺跡、及び東の市川橋遺跡を東西に横断するものであった。そのため、宮城県教育委員会では平成４年度から山王遺跡と市川橋遺跡の発掘調査を実施しており、平成14・15年度は山王遺跡伊勢地区の調査を行うことになった。同地区は平成８年度に実施した町・伊勢地区から西に連なる場所である。（以下、本文中の町地区とは平成８年度調査区のことを示す。）

2．遺跡の概要

位置と地理的環境：山王遺跡は多賀城市南宮・山王に所在する弥生時代から近世までの長期間、断続的に営まれた遺跡であり、一般的には特別史跡「多賀城跡」や隣接する市川橋遺跡とともに奈良・



1　**山王遺跡**（弥生、古墳、奈良・平安、近世）
2　特別史跡多賀城跡（奈良・平安）
3　特別史跡多賀城廃寺跡（奈良・平安）
4　（特別史跡）館前遺跡（古代・中世）
5　市川橋遺跡（旧石器～弥生、古墳、奈良・平安、中世）
6　高崎遺跡（奈良・平安、中世）
7　西沢遺跡（古代、中世）
8　母子沢遺跡（平安）
9　郷楽遺跡（縄文～中世）
10　新田遺跡（縄文、古墳、奈良・平安、中世）
11　内館館跡（中世）
12　大日北遺跡（古代）
13　大日南遺跡（平安、中世）
14　鴻ノ巣遺跡（弥生～中世）
15　洞ノ口遺跡（奈良・平安、中世、近世）
16　国史跡岩切城跡（鎌倉～室町）
17　東光寺遺跡（中世、近世）
18　今市遺跡（平安、中世）
19　野田遺跡（古代、中世）
20　加瀬遺跡群（縄文、古代）

第１図　山王遺跡と周辺の遺跡

平安時代の遺跡として知られている。

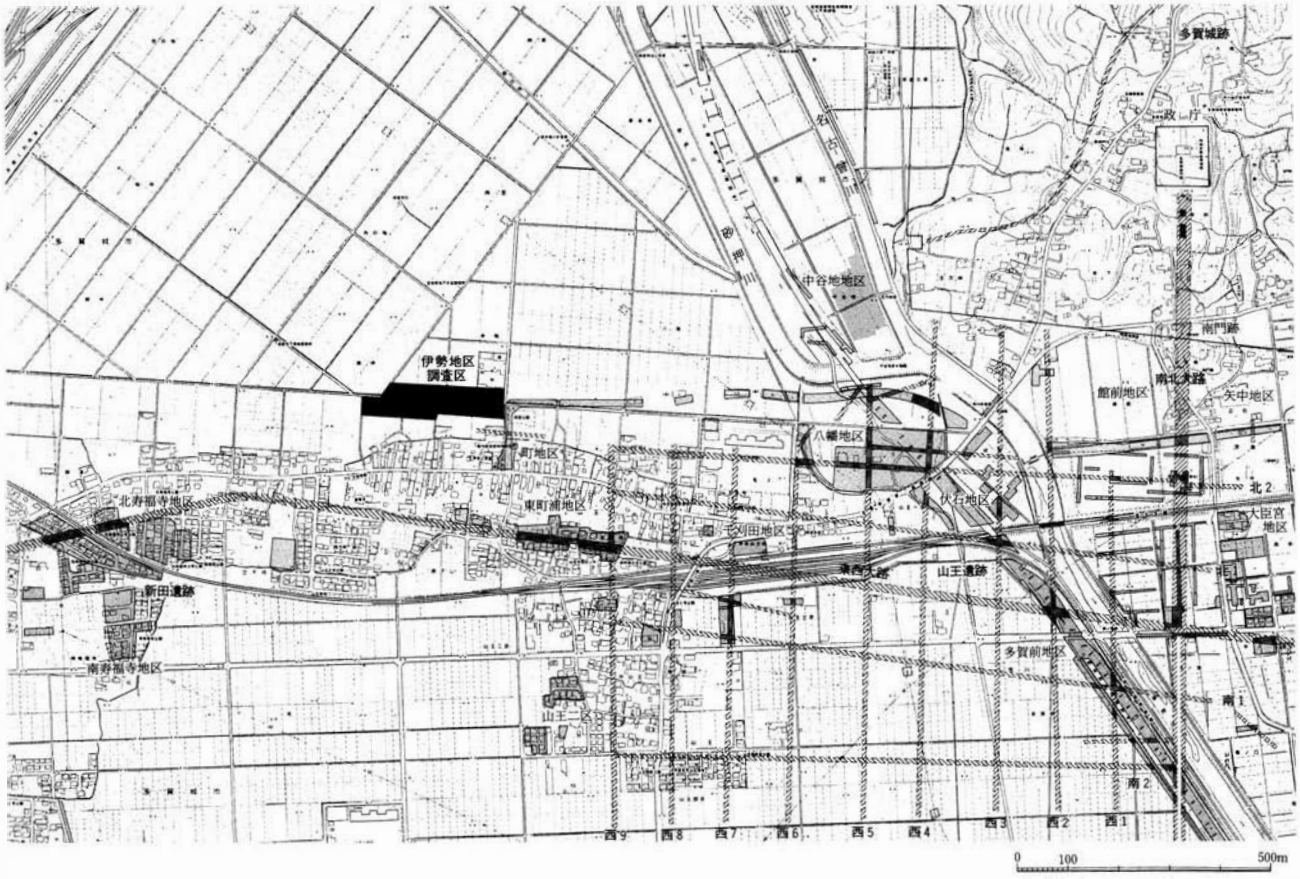
地形的には七北田川や砂押川の形成した東西に長い自然堤防上に立地し、現在の多賀城市新田や南宮・山王の集落の広がりと重複しながら、東半部は砂押川に沿って南へ大きく張り出している（第1図）。その範囲は東西約2㎞、南北1㎞に及ぶ広大なものである。遺跡の周辺一帯は、標高4mほどの水田が広がる変化の乏しい景観を呈している。しかし、近年の調査の結果、旧河川跡やそれらによって形成された自然堤防、泥炭層が厚く堆積する後背湿地などが複雑に入り組んで分布することがわかり、この地域が複雑な微地形の変遷を経てきていることが明らかになっている。

歴史的環境：本遺跡の周辺には奈良・平安時代の陸奥国府多賀城跡をはじめとする多数の遺跡がある。本遺跡を含む近年の調査の進展に伴い、弥生時代から近世までの周辺の様子も次第に明らかになりつつある（村田・八島ほか1998、古川・佐久間ほか2001など）。以下では、本調査と関係の深い奈良・平安時代以降の様子について記すことにする。

〈奈良・平安時代〉 8～10世紀前半頃、本遺跡北東の丘陵上には陸奥国府多賀城が置かれていた。その南前面に広がる本遺跡や市川橋遺跡などの沖積地には、都城や大宰府と同様の南北・東西道路によるほぼ方格の地割が施工されていたことが近年の調査で明らかになっている（第2図）。方格地割は、多賀城の政庁と外郭南門を結ぶ城内道路の南延長線にあたる南北大路と多賀城外郭南辺に平行する東西大路を基準として造られている。また、南北大路から西側の様子については東西大路沿いが国司など上級官人の舘、大路から離れた区画が下級官人など多賀城を支えた人々の居住域や作業域、地割の外側が耕作域や墓域というように、地割内外の場の使い方もわかりつつある。このように奈良時代から平安時代にかけての本遺跡周辺には、多賀城を中心とした古代都市ともいうべき空間が広がっていた。それは国府多賀城の整備・充実と連動するものであり、律令制的支配の拡大・整備が背景となっている。したがって、10世紀中頃に多賀城が衰退すると本遺跡周辺も次第に荒廃して、盛衰をともにしたとみられている。（なお、方格地割の西端は西9道路までが現在確認されているが、町地区の調査の結果、西に広がる可能性が指摘されている。）

〈中世〉 本遺跡の西に隣接する新田遺跡寿福寺地区では大溝を巡らした広大な屋敷群と、その外側に営まれた屋敷群が見つかっている（千葉1990）。それらは12世紀後半から16世紀まで連綿と使用されていたとみられ、居住者はこの地域が留守氏の支配した「高用名」に含まれることから、留守氏に関わる武士と考えられている。そうした屋敷跡は本遺跡まで連続的に連なる様子が古地図などから伺われ、本遺跡八幡地区や伏石地区の調査でも屋敷跡が発見されている（佐藤ほか1997）。また、今回の調査区の約150m北には内舘跡がある。内舘は、戦国時代末期に伊達政宗の叔父にあたる政景の入嗣によって隠居した留守氏17代、顕宗の隠居後の舘とみられている。また『留守家文書』によると、顕宗には南宮周辺に設けられた隠居分所領があることから、戦国時代末期の本遺跡周辺は内舘に隠居した顕宗を中心に動いていたと考えられている（多賀城市史編纂委員会1996）。

なお、多賀城廃絶後の12世紀半ば以降、文献上に多賀国府の名がみられるようになる。その中枢部分の比定地としては本遺跡の約2㎞西にある洞の口遺跡付近が有力視されており、周辺には新田・今市・鴻ノ巣・東光寺遺跡、岩切城跡など中世の遺跡が密集して認められる。しかし、これらの遺跡の



第2図　調査区の位置と周辺の道路遺構

調査を通じて国府の中枢であることを示す確証はまだ得られていない。

〈近世〉16世紀末、本遺跡が所在する山王・南宮村一帯は伊達家の組頭成田氏の采邑となった。塩竈街道沿いには成田氏配下の足軽達の屋敷をはじめとする住宅が建ち並び、現在に通じる町並みが形成されていったとみられる。西町浦地区ではそうした屋敷地のひとつ、賀川家の宅地が調査されている（多賀城市史編纂委員会1991）。賀川家はかつて酒造業を営んだ記録があり、調査で出土した木簡からもそれが裏付けられた。また、今回の調査区に隣接する町地区の調査でも18世紀後半から19世紀頃の屋敷地の様子が明らかになっている（村田・八島ほか1998）。その内部は南北に敷地割りされ、街道に面した南の敷地が建物群と井戸で構成された居住域となっている。一方、北の敷地は井戸や池や溝、土壙が疎らにつくられていたのみである。なお、井戸跡の大部分は素掘りであった。以上のほか、本遺跡の八幡地区では墓跡がみつかっている（佐藤ほか1997）。

第Ⅱ章　調査の成果

1．調査の方法と経過

調査対象地は、平成８年度に実施した町・伊勢地区の西の隣接地である。この場所は平成12年度に確認調査を行っており、その際に遺構・遺物を検出した平成８年度調査区西端から長さ270m分を調査対象とした。また、これまでは道路幅のうち２車線部分を調査していたが、確認調査の結果、遺構・遺物が少ないことが予想されたため、今回は4車線幅約40m分を調査することにした。ただし、対象地内には用水路と市道が東西方向に走っており、用水路は遺構面より深く掘削されているため対象外とした。市道部分についても水道と都市ガスの本管が埋設されているため調査は最小限に留めることにした。調査対象面積は約5900㎡である。

平成14年度は５月７日から市道・用水路の南側の調査を開始した。調査区は生活排水施設や道路などを考慮して細分し、東から１～４区（例言６参照）とした。調査の結果、２区西側から３区東側にかけて掘立柱建物跡や井戸跡が多数発見されたが、全体的に遺構・遺物は少なく、調査は７月25日には終了した。平成15年度は８月４日から市道・用水路の北側の調査を始めた。遺構分布の様相は前年度とほぼ同様であり、一切の調査が終了したのは11月６日である。

調査にあたり、遺構の検出は古代の遺構面であるⅣ・Ⅴ層（後述層序参照）上面で行い、検出した遺構は平・断面図による実測図と写真撮影により記録した。測量には山王遺跡八幡地区内の日本測地系に基づく国土座標第Ⅹ系のＸ＝－188,880.000、Ｙ＝13,230.000を原点（0・0）とし、原点と東西・南北軸を基準にして３mの方眼を組んで行った（例言４参照）。平面図は遺構の種類・密度等を考慮して縮尺１/20、１/100、１/200のものを併用した。断面図は縮尺１/20で適宜作成した。写真撮影には６×７または35㎜サイズのカラーリバーサルとモノクロフィルムを使用した。

2．地形と層序

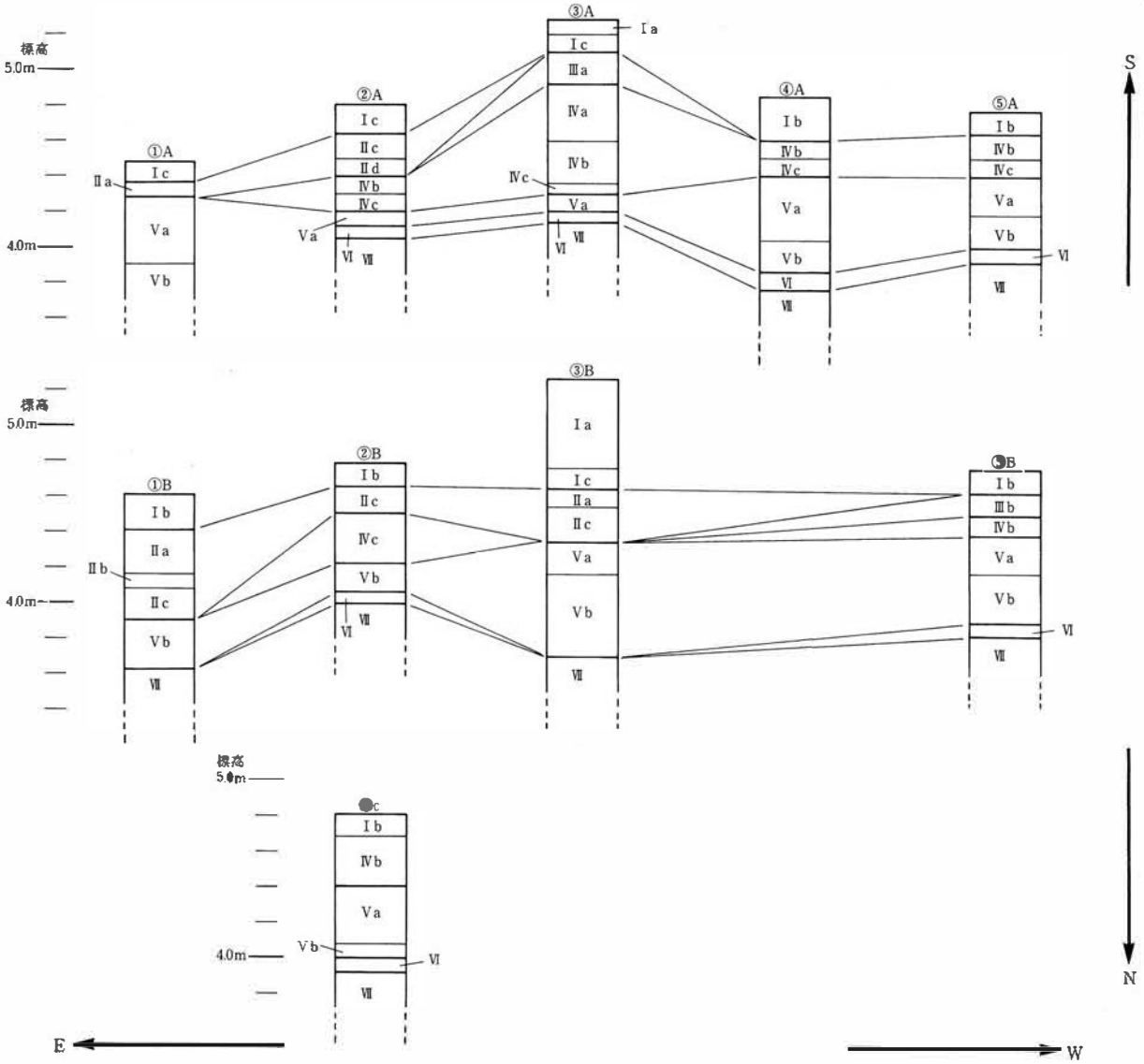
調査区は、遺跡が立地する東西に長い自然堤防の北縁部にあたる。標高は4.5mほどで、南の堤防上から北の低地へ緩やかにくだる地形となっている。また、２区西側から３区東端にかけての東西幅約50mの地点は自然堤防から北に張り出した舌状の微高地となっている。

調査区内の層序は上記の地形をほぼ反映して堆積しており、Ⅰ～Ⅶ層に大別された。第３図は調査区内の各地点における堆積状況を模式的に示したものである。以下、各層の特徴について述べる。

Ⅰ層は現代の表土で、場所によって盛土（ａ）、水田耕作土（ｂ）、その他（ｃ）がある。

Ⅱ層はａ・ｄ：暗緑灰色（５Ｙ７/４）粘土、ｂ：灰色（10Ｙ３/１）粘土、ｃ：黒色（10ＹＲ３/２）粘土からなる近世以降の水田耕作土（ａ・ｂ・ｄ）や湿地性の堆積土（ｃ）である。ｃは１・２区の北側を中心に分布し、近世の比較的規模の大きい溝跡（SD3820・3834・3850など）の埋没後の窪みに広く堆積して湿地化したものである（SF3900湿地）。Ⅱ層全体として厚さは10～50㎝ある。

Ⅲ層はａ：黒褐色（10ＹＲ３/１）シルト、ｂ：暗灰黄色（2.5Ｙ４/２）粘土質シルトからなる近世以前の旧表土（ａ）や堆積土（ｂ）である。２区西側以西に部分的に分布し、平安時代の遺構を覆っ



第3図　層序模式図

ている。厚さは最大20cmほどある。なお、Ⅲ層は町地区の基本層序の第2層に相当する。

Ⅳ層は平安時代以前の旧表土である。a～cに細分され、a：暗灰黄色（2.5Y 4／2）やにぶい黄色（2.5Y 6／3）砂質シルト、b：明黄褐色（2.5Y 6／6）シルト、c：黒褐色（2.5Y 3／1）シルト質粘土である。厚さは10～60cmで、町地区の第3層に相当する。

Ⅴ層は調査区全域で確認しており、a～cに細分される。aは浅黄色（2.5Y 7／4）の砂質シルトやシルト質砂で、bはaが緑灰色（2.5Y 6／6）にグライ化したものである。厚さは微高地部分は10～15cmと薄く、低地は30～65cmと厚い。町地区で古墳時代中期以前の地山とされた第4層に相当する。

Ⅵ層は黒色（2.5Y 2／1）粘土からなる厚さは10cm前後の湿地状の堆積層である。町地区の古墳時代前期の遺物を含む第5層に相当するが、本地区では遺構・遺物は認められない。

Ⅶ層はグライ化したオリーブ灰色（10Y 4／2）シルト質粘土や灰色（10Y 5／1）粘土である。町地区で古墳時代前期以前の地山とされた第6層に相当する。

3．発見した遺構と遺物

遺構は塀跡1条、柱列跡2条、掘立柱建物跡33棟、井戸跡11基、墓跡1基、河川跡1条、溝跡64条、土壙40基のほか、小溝状遺構を発見した。これらの遺構には古代のものと近世のものとがある。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器、瓦、磁器、陶器、瓦質土器のほか、土製品、金属製品、木製品、石製品が出土した。その総量は整理用平箱で30箱ほどで、土師器、須恵器、赤焼土器が主体をしめる。以下、1～4区の調査区ごとに時代順に主要な遺構と遺物を記述するが、3・4区は遺構が少ないので一括して扱うことにする。なお、記述しない遺構の詳細は巻末の遺構属性表に収載した。

1区

柱列跡、掘立柱建物跡、墓跡、溝跡、土壙のほか、小溝状遺構を検出した（第4図）。北側調査区には東西方向に走る比較的規模の大きい近世の溝跡（SD3850～3852）がある。他の遺構はその南側にあるが、密度は薄い。

A．古代

遺構には柱列跡1条、掘立柱建物跡6棟、溝跡1条、土壙4基のほか、小溝状遺構がある。

〈柱列・掘立柱建物跡〉

【SA3782柱列跡】（第4・5図）

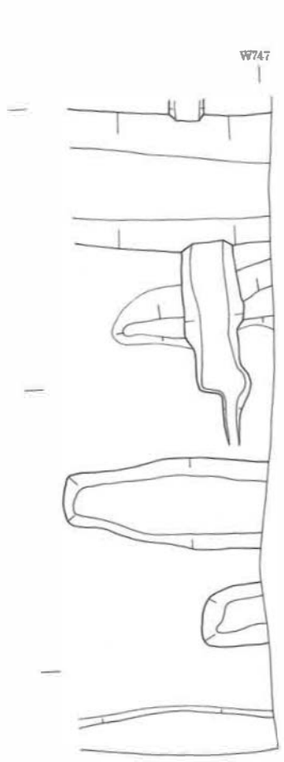
南側調査区の中央部で検出した1間以上の柱列跡で、延長は南北ともに調査区外にのびる。規模は1.9m以上で、方向はN－1°－Wである。柱穴は2個検出し、ともに径15cmほどの柱痕跡を確認した。柱穴は長辺が40～50cmの隅丸長方形で、深さは40cmある。埋土は地山土と炭のブロックを含む黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

【SB3773建物跡】（第4・5図）

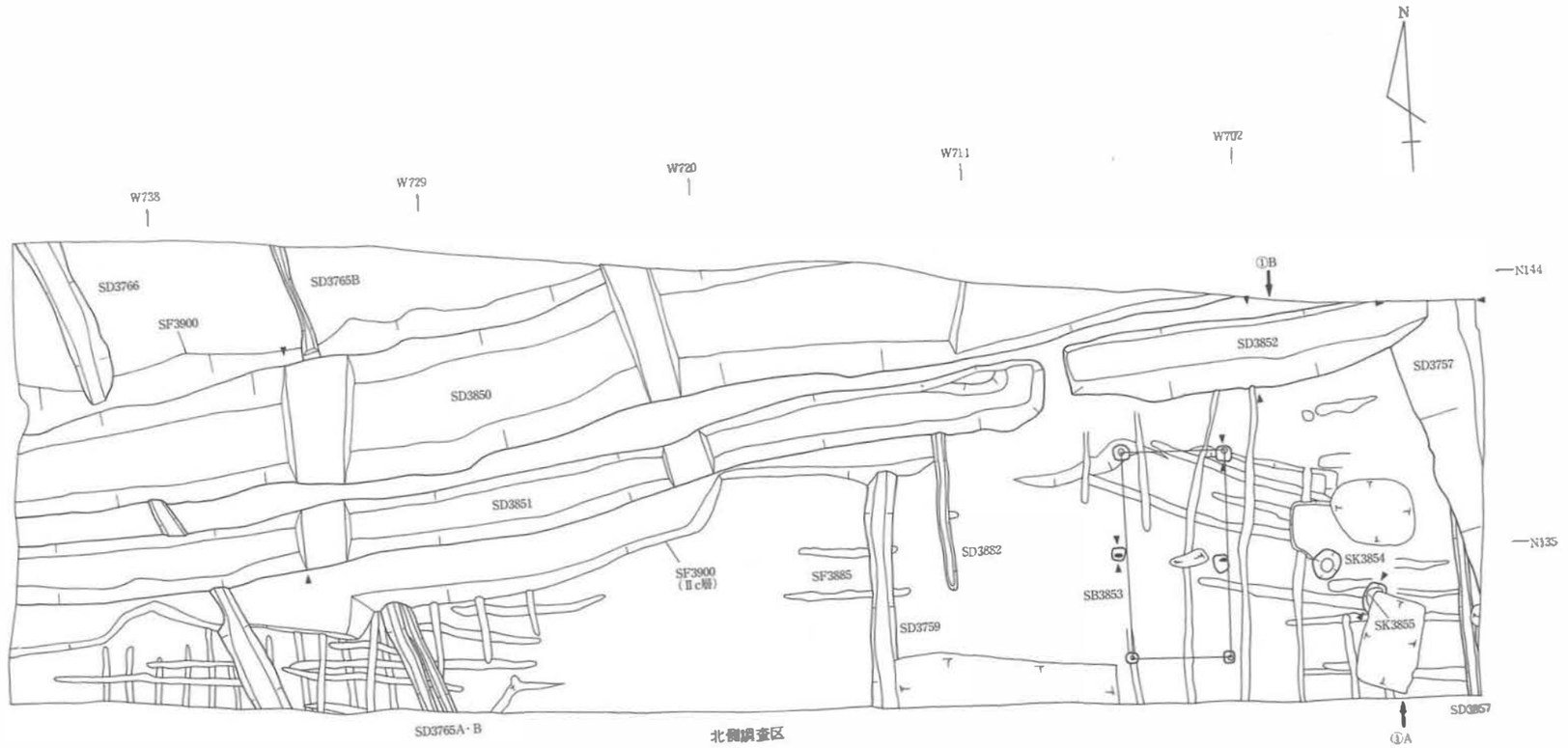
南側調査区の西部で検出した東西2間、南北1間以上の建物跡である。検出したのは建物跡の南半で、北側が調査区外にのびる総柱建物跡と思われる。SB3775建物跡より新しい。柱穴は6個検出し、4個で径15cmの柱痕跡を確認した。柱痕跡には灰白色火山灰の粒が少し含まれている。建物の規模は東西が南側柱列で総長4.7m、柱間寸法は東から2.4m、2.3m、南北が西側柱列で総長1.6m以上である。方向は南側柱列でE－6°－Sである。柱穴は、長辺が60～80cmの隅丸長方形で、深さは深いもので25cmある。埋土は地山土ブロックを多く含む暗灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

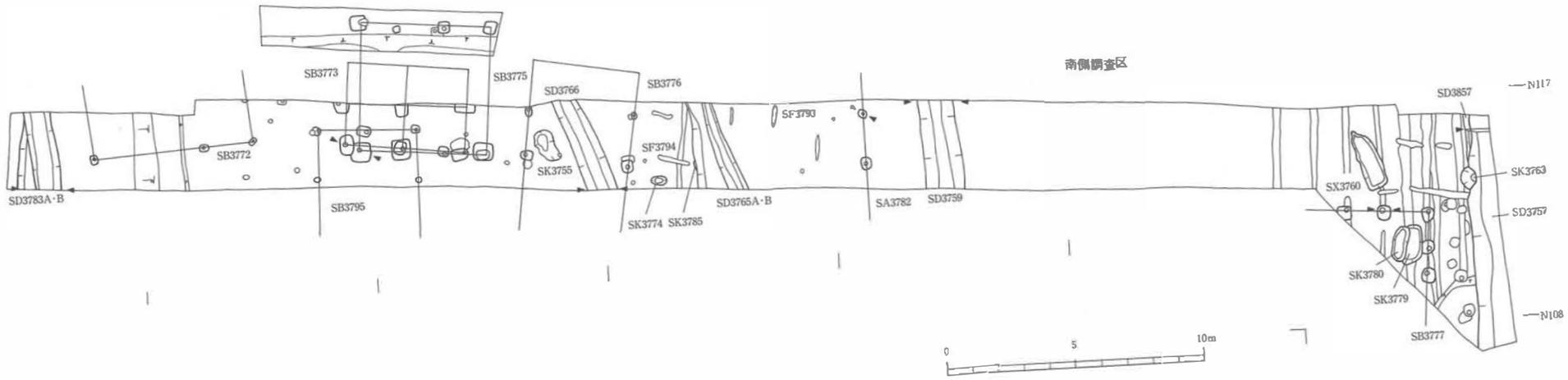
【SB3775建物跡】（第4・5図）

南側調査区の西部で検出した東西3間、南北1または2間の東西棟で、SB3773建物跡より古い。柱穴は8個検出し、5個で径15cmほどの柱痕跡、2個で柱の抜取り穴を確認した。建物の規模は桁行が南側柱列で総長5.0m、柱間寸法は東から1.6m、1.7m、1.7m、梁行が東妻で総長4.9mである。方向は南側柱列でE－5°－Sである。柱穴は長辺が40～80cmの隅丸長方形で、深さは深いもので30cmある。埋土は地山土ブロックを少し含む黄灰色粘土質シルトである。なお、南東隅柱穴で長さ40cm、幅13cm、厚さ3.2cmの礎板（板材：クリ）を検出した（図版1）。抜取り穴は長軸が40cmの楕円形で、地山土ブロックを含む黒褐色粘土で埋め戻されている。遺物は出土していない。

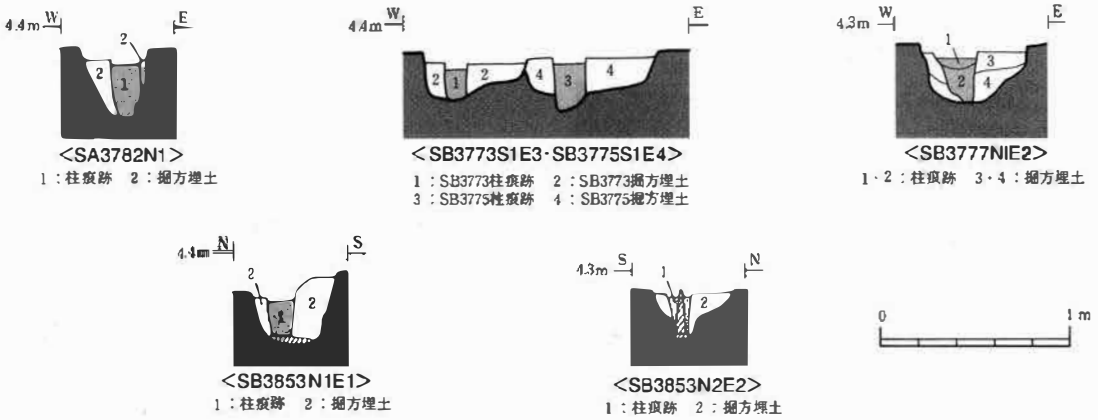


2区





第4図　1区　遺構配置図



第5図　1区　柱列・建物跡柱穴断面図（古代）

【SB3777建物跡】（第4・5図）

南側調査区の東部で建物跡の北東部分を検出した。東西2間以上、南北2間以上の建物跡で、SF3792小溝状遺構より新しく、SK3779土壙より古い。柱穴は5個検出し、すべてで径20cmの柱痕跡を確認した。柱痕跡には灰白色火山灰の粒が少し含まれている。建物の規模は東西が北側柱列で総長3.2m以上、柱間寸法は東から1.8m、1.4m、南北が東側柱列で総長2.4m以上、柱間寸法は北から1.4m、1.0mである。方向は北側柱列でE－5°－Sである。柱穴は長辺が50～60cmの隅丸長方形で、深さは深いもので30cmある。埋土は地山土ブロックを含む黒褐色粘土である。遺物は出土していない。

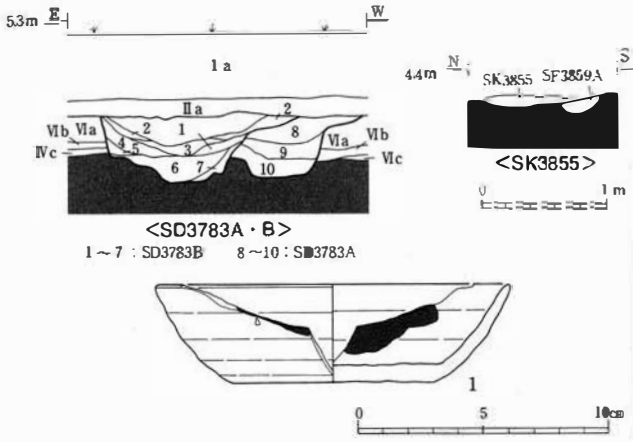
【SB3853建物跡】（第4・5図）

北側調査区の東部で検出した桁行2間、梁行1間の南北棟で、SF3858小溝状遺構より新しい。柱穴は6個確認し、隅柱で径約20cmの柱痕跡、桁行中央の柱穴で幅約20cm、厚さ5cmの柱材（板材：クリ）を検出した。また、柱痕跡の柱が腐朽して空洞化した部分には灰白色火山灰が流入していた（図版2）。建物の規模は桁行が東側柱列で総長6.8m、柱間寸法は北から3.5m、3.3m、梁行が北妻で3.4mである。方向は東側柱列でN－1°－Eである。柱穴は長辺30～55cmの隅丸長方形で、深さは深いもので40cmある。埋土は地山砂ブロックと灰白色火山灰を含む黒褐色粘土質シルトである。なお、南東隅以外の柱穴では長さ20～35cm、幅10～20cm、厚さ3～5cmの礎板（板材：クリ）を検出している。遺物は出土していない。

〈溝跡・土壙〉

【SD3783溝跡】（第4・6図）

南側調査区の西端で検出した南北方向に走る溝跡で、2時期ある（A→B）。Bは長さ2.9m分を検出した。上幅は100～150cm、下幅は60cmである。断面形は逆台形で、深さは50cmある。方向はN－3°－Wである。堆積土は黄灰色や褐灰色のシルトを主体とした自然流入土で、3層には灰白色火山灰の堆積が認められた。Aは長さ2.7m分を検出した。上幅はBに壊されて不明だが、概ねBと同じと思われる。下幅は50cmで、断面形は中段のつく逆台形、深さは45cmある。方向はN－9°－Eである。堆積土は黄灰・黒褐色シルトで、自然流入土である。A・Bともに遺物は出土していない。



遺構	No.	土性	土色	備考
SD3783B	1	シルト	黄灰（25Y4/1）	灰白色火山灰の粒を少し含む。
	2	シルト	黄灰（25Y5/1）	灰白色火山灰の小ブロックを含む。
	3	火山灰	灰白色（2.5Y8/1）	4層の土をブロック上に含む。〈2次〉
	4	シルト	黄灰（2.5Y5/1）	灰白色火山灰が少ししみこむ。
	5	シルト	黄灰（2.5Y4/1）	比較的均質な土。
	6	粘土質シルト	褐灰（10YR4/1）	地山砂粒を少し含む。
	7	粘土質シルト	褐灰（10YR4/1）	6層の土に地山小ブロックが混じる。
SD3783A	8	シルト	黒褐（10YR3/1）	酸化鉄を多く含む。
	9	シルト	黒褐（10YR3/1）	酸化鉄を少し含む。
	10	シルト	黄灰（2.5Y4/1）	地山砂ブロックを多く取り込む。
SK3855	1	シルト	黒褐（2.5Y3/1）	地山砂小ブロックを含む。

No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SK3855・堆積土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り 内外及び割れ口に油煙付着	(14.2)	8.0	3.9	7－1	110

第6図　1区　溝跡・土壙断面図（古代）、及びSK3855土壙出土遺物

【SK3855土壙】（第4・6図）

北側調査区の東部で検出した。SF3759小溝状遺構より新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸が110cm前後、短軸が90cmである。断面形は皿状で、深さは10cmである。堆積土は地山砂が混じる黒褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は底面でヘラ切り無調整の須恵器坏が出土している（第6図1）。体部内面を中心に油煙が付着しており、割れ口にもかかっている。そのほか堆積土から土師器甕、須恵器坏・甕がごく少量出土している。

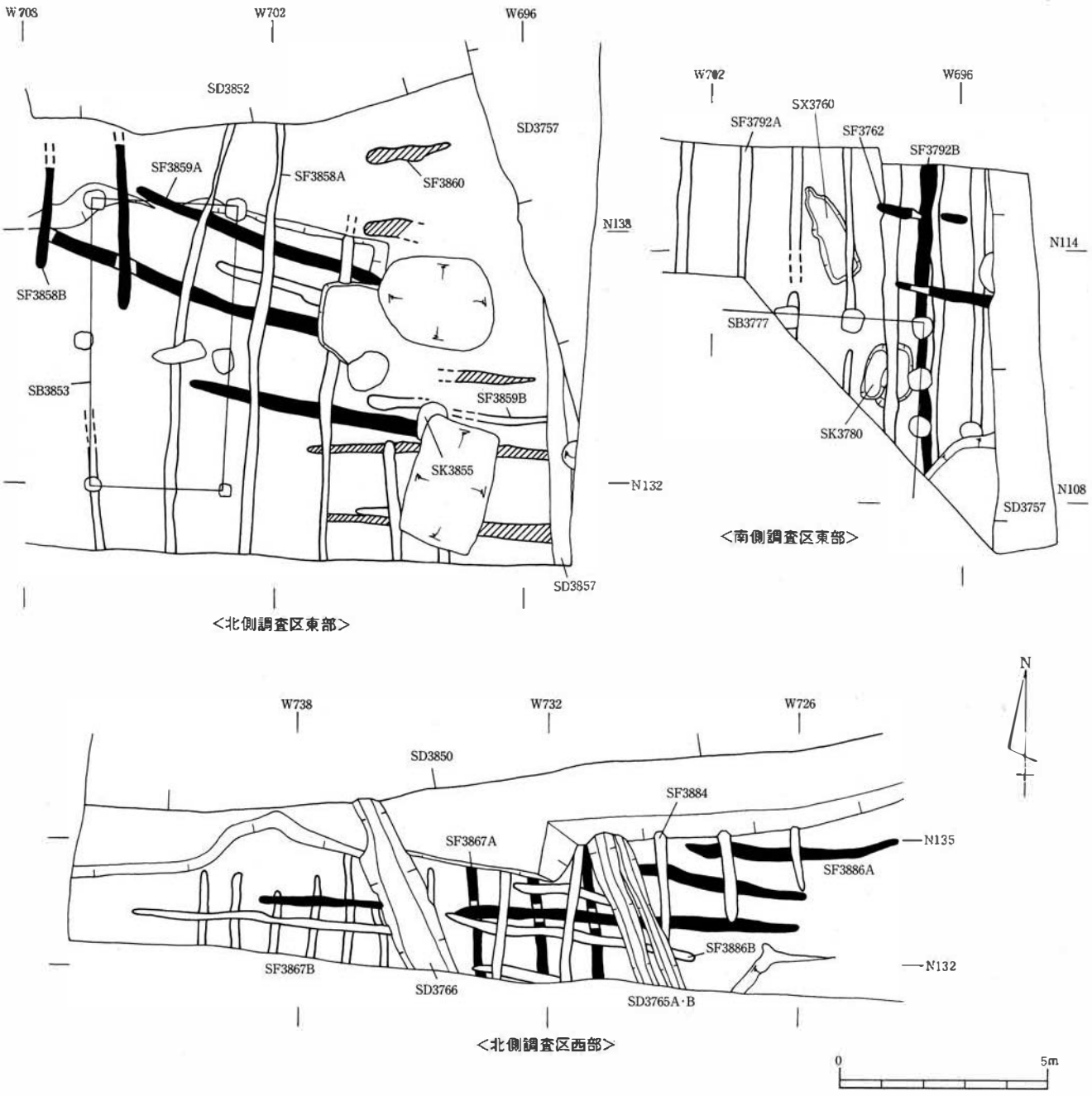
〈小溝状遺構〉（第7図）

南側調査区の東部でSF3762・3792、中央部でSF3793・3794、北側調査区の東部でSF3858～3860、中央部でSF3885、西部でSF3867・3884・3886を検出した。ほぼ東西方向（SF3762・3794・3860・3886）、または南北方向（SF3792・3793・3858・3864・3867・3885）に延びるがものが大部分だが、SF3859のように東に対して南に振れる方向のものもある。各場所における小溝状遺構同士の重複関係は以下のとおりである。なお、他の遺構との重複関係は巻末の遺構属性表に記載した。

南側調査区東部　：　SF3762→SF3792（A→B）
中央部：　SF3793→SF3794
北側調査区東部　：　SF3860→SF3859（A→B）→SF3858（A→B）
西部　：　SF3867（A・B）→SF3886（A→B）→SF3884

小溝状遺構の溝の数は2～7条で、溝同士の間隔は1.1～2.7mである。溝の長さは10.0mを越えるものもあるが、それ以下のものが多い。幅は25cm前後で、断面形はU字形、深さは10cmほどである。堆積土は小さい地山土ブロックを含む黒褐色シルト質粘土で、SF3858・3884には灰白色火山灰の小ブロックが混じる。

遺物はSF3858で土師器甕、SF3859で土師器甕と須恵器の坏・甕、丸瓦がそれぞれ堆積土からごく少量出土している。



第7図　1区　小溝状遺構群模式図（古代）

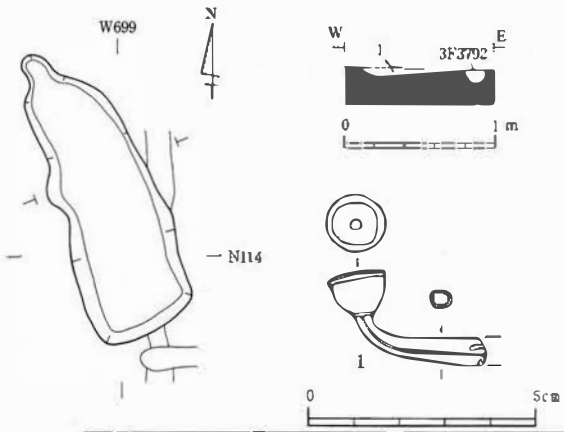
B．近世

遺構には墓跡1基、溝跡8条、土壙3基がある。

〈墓跡〉

【SX3760墓跡】（第8図）

南側調査区の東部で検出した。平面形が隅丸長方形で、人為的に埋め戻された埋土から煙管が出土したことから、墓跡と判断した。SF3792小溝状遺構より新しい。形状は長さ240cm、幅85cmの隅丸長方形で、北辺中央部が外側に飛び出している。断面形は皿状で、深さは7cmある。長軸の方向はN－24°－Wで、埋土は地山土ブロックを多く含む黒褐色粘土である。



No.	土性	土色	備考
1	粘土	黒褐（10YR3/1）	地山ブロックを多く含む。

No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ	写真	登録
1	SX3760・埋土	煙管・雁首	河骨形。火皿：径1.5cm 高さ1.1cm 首隔：径0.6cm 補強帯有。	(4.2)	12－6	176

第8図　1区　SX3760墓跡（近世）

遺物は埋土から煙管が出土している。河骨形の雁首で、火皿の下に補強帯が巡るものである。

〈溝跡〉

北側調査区で上幅1.5mを越える規模の大きい溝跡を4条検出した。東西方向に走るものと（SD3850・3851・3852）、南北方向のもの（SD3757）とがある。その他は上幅が1.2m以下で、南北方向に走る溝跡である。

【SD3757溝跡】（第4・9図）

東端にある南北方向に走る溝跡で、西側部分を検出した。SD3837溝跡、SK3763土壙、SF3762小溝状遺構より新しい。SD3852溝跡とは一連であるが、本溝跡の方がやや遅く埋没している。検出した長さは南側調査区で9.2m、北側で10.1mで、総長は36.2m以上ある。上幅は100～280cm以上である。断面形は皿または逆台形とみられ、深さは50cm以上である。方向は南側調査区で真北、北側でN－18°－Wである。堆積土は黒・黒褐・オリーブ黒色の粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器甕、平瓦が少量出土している。

【SD3759溝跡】（第4・9図）

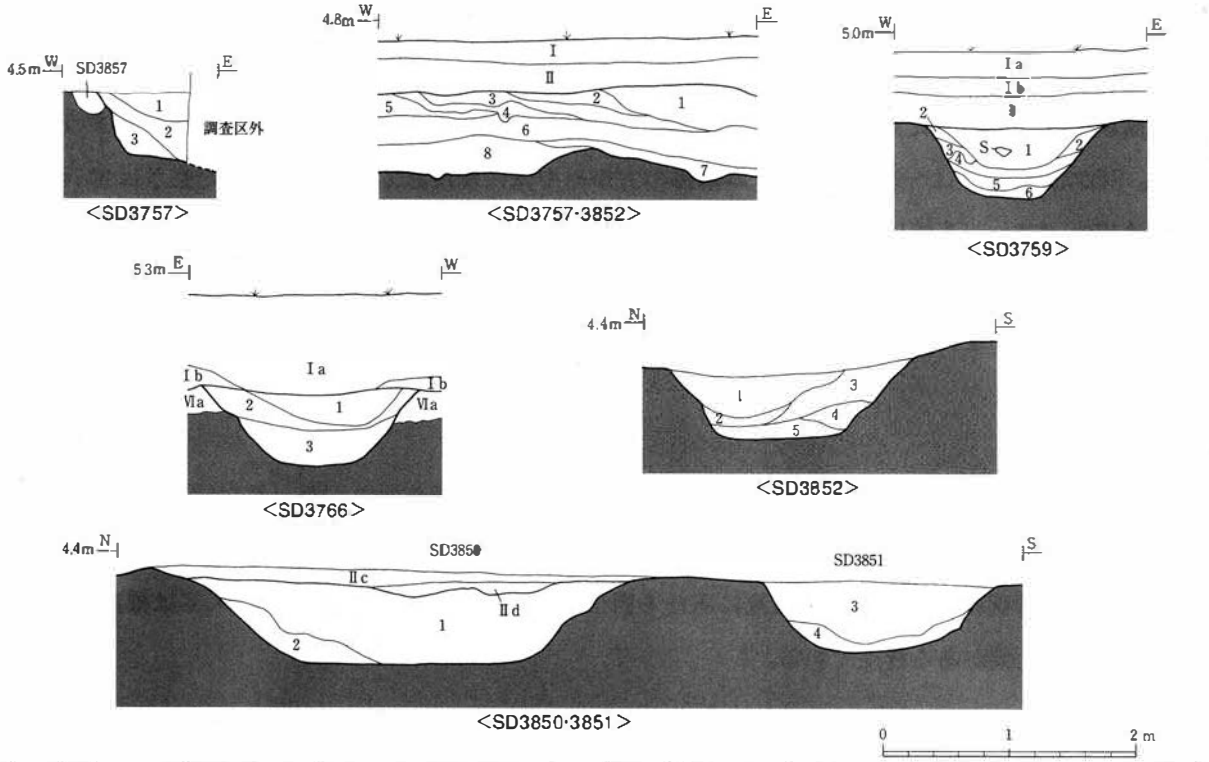
中央部で検出した南北方向に走る溝跡で、SF3885小溝状遺構より新しい。検出した長さは南側調査区で3.4m、北側で8.0mで、総長は24.5m以上ある。上幅は70～150cm、下幅は30～60cmである。断面形は逆台形で、深さは55cmある。方向は南側調査区でN－2°－W、北側でN－1°－Eである。堆積土は地山土が少し混じる黒・黒褐・オリーブ黒色の粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から陶器擂鉢（図版10－15）のほか、土師器甕がごく少量出土している。

【SD3766溝跡】（第4・9図）

中央部で検出した南北方向に走る溝跡で、SF3867・3886小溝状遺構より新しく、SD3850・3851溝跡より古い。検出した長さは南側調査区で4.1m、北側で18.3mで、総長は35.5m以上ある。上幅は60～120cm、下幅は30～75cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで60cmある。方向はN－21°－Wである。堆積土は炭粒を含む黒・黒褐色シルトや地山砂粒を含むオリーブ黒色シルト質粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平・丸瓦、砥石が少量出土している。



遺構	No.	土性	土色	備考
SD3757	1	粘土	黒褐 (2.5Y3/1)	炭・砂を少し含む。部分的に木枝など有機物を含む。
	2	粘土	黒 (7.5Y2/1)	
	3	粘土	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	地山土ブロックを含む。
SD3757	1	粘土質シルト	黒褐 (7.5YR3/1)	地山土を多く含む。
	2	シルト	明黄褐 (2.5Y6/6)	汚れた地山土主体。
	3	シルト	明黄褐 (2.5Y6/6)	2層の土に黄灰色粘土が多く混じる。
	4	シルト質粘土	暗褐 (10YR3/3)	地山土粒を少し含む。
	5	シルト質粘土	黒褐 (2.5Y3/1)	地山土小ブロック少し含む。
	6	粘土	黒 (10Y2/1)	比較的均質な土。グライ化。
	7	シルト質砂	オリーブ灰 (10Y5/2)	黒色粘土が少し混じる。
SD3852	8	粘土	黒 (5Y2/1)	地山土を含む。グライ化。
SD3766	1	シルト	黒 (7.5YR2/1)	炭粒を少し含む。
	2	シルト	黒褐 (7.5YR3/1)	炭粒と砂粒を少し含む。
	3	シルト質粘土	オリーブ黒 (5Y3/1)	地山土粒を少し含む。均質な土。

遺構	No.	土性	土色	備考
SD3759	1	粘土	黒褐 (10YR3/1)	
	2	シルト質粘土	黒褐 (2.5Y3/1)	地山土を少し含む。
	3	細砂	黄灰 (2.5Y4/1)	地山土を含む。
	4	粘土	黒 (2.5Y2/1)	
	5	粘土	オリーブ黒 (5Y3/1)	
	6	粘土	黒 (5Y2/1)	地山土を少し含む。
SD3850	1	粘土	オリーブ黒 (10Y3/1)	地山小ブロック・炭粒を少し含む。グライ化。
	2	粘土	灰 (10Y4/1)	地山小ブロックを含む。グライ化。
SD3851	3	粘土	オリーブ黒 (10Y3/1)	地山小ブロック・炭粒を少し含む。グライ化。
	4	粘土	灰 (10Y4/1)	地山土を多く含む。グライ化。
SD3852	1	粘土	黒 (10Y2/1)	比較的均質な土。
	2	粘土	オリーブ黒 (10Y3/1)	地山砂を互層状に少し含む。
	3	粘土質シルト	オリーブ黒 (10Y3/2)	地山ブロックを多く含む。グライ化。(崩落土)
	4	粘土質シルト	オリーブ灰 (10Y5/2)	地山ブロック主体の土。グライ化。(崩落土)
	5	粘土	黒 (5Y2/1)	地山土を含む。グライ化。

第9図　1区　溝跡断面図（近世）

【SD3850溝跡】（第4・9図）

北側調査区で検出したやや南に膨らみながら東西に走る溝跡で、西端は2区にのびる。SD3765・3766溝跡より新しい。検出した長さは1区で40.0m、2区で5.0mで、総長は51.7m以上である。上幅は180～450cm、下幅は120～255cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで65cmある。方向はE－7°－Nである。堆積土は地山砂ブロックと炭粒を含むオリーブ黒・灰色の粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器甕、須恵器甕、赤焼土器坏がごく少量出土している。

【SD3851溝跡】（第4・9図）

北側調査区で検出した東西方向に走る溝跡で、SD3850溝跡の南に沿ってのびる。SD3766・3882溝跡より新しい。検出した長さは1区で35.0m、2区で2.0mで、総長は41.7mである。上幅は145～225cm、下幅は75～120cmである。断面形はU字形で、深さは深いところで55cmある。方向はE－8°－Nである。堆積土は地山土が混じるオリーブ黒色や灰色の粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から陶器の破片のほか、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平・丸瓦が少量出土している。

【SD3852溝跡】（第４・９図）

北側調査区で検出した東西方向に走る溝跡で、SD3851溝跡東端の約１ｍ東から連続するようにのびる。SD3757溝跡とは一連であるが、本溝跡の方がやや先に埋没している。検出した長さは10.7ｍで、上幅は170～235㎝、下幅は110～120㎝である。断面形は逆台形で、深さは深いところで65㎝ある。方向はＥ－7°－Ｎである。堆積土は地山土が混じるオリーブ黒色や灰色の粘土で、自然流入土である。遺物は出土していない。

２区

塀跡、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙のほか、小溝状遺構を検出した（第10図）。１区と同様、北側調査区に規模の大きい近世の溝跡（SD3720・3725・3730など）があり、他の遺構は南側にある。なかでも北に舌状に張り出した微高地にあたる西部には建物跡などが密集する。東部は標高が低く、遺構は溝跡や土壙がある程度である。

Ａ．古代

遺構には掘立柱建物跡15棟、井戸跡１基、溝跡６条、土壙６基のほか、小溝状遺構がある。

〈掘立柱建物跡〉

調査区西部の微高地に集中する。調査区の制約のため規模がわかるものは少ないが、概して一辺が２～３間のものが多い。柱穴もそれほど大きくないが、なかには長辺が１ｍ近いものもある。

【SB3730建物跡】（第11・12図）

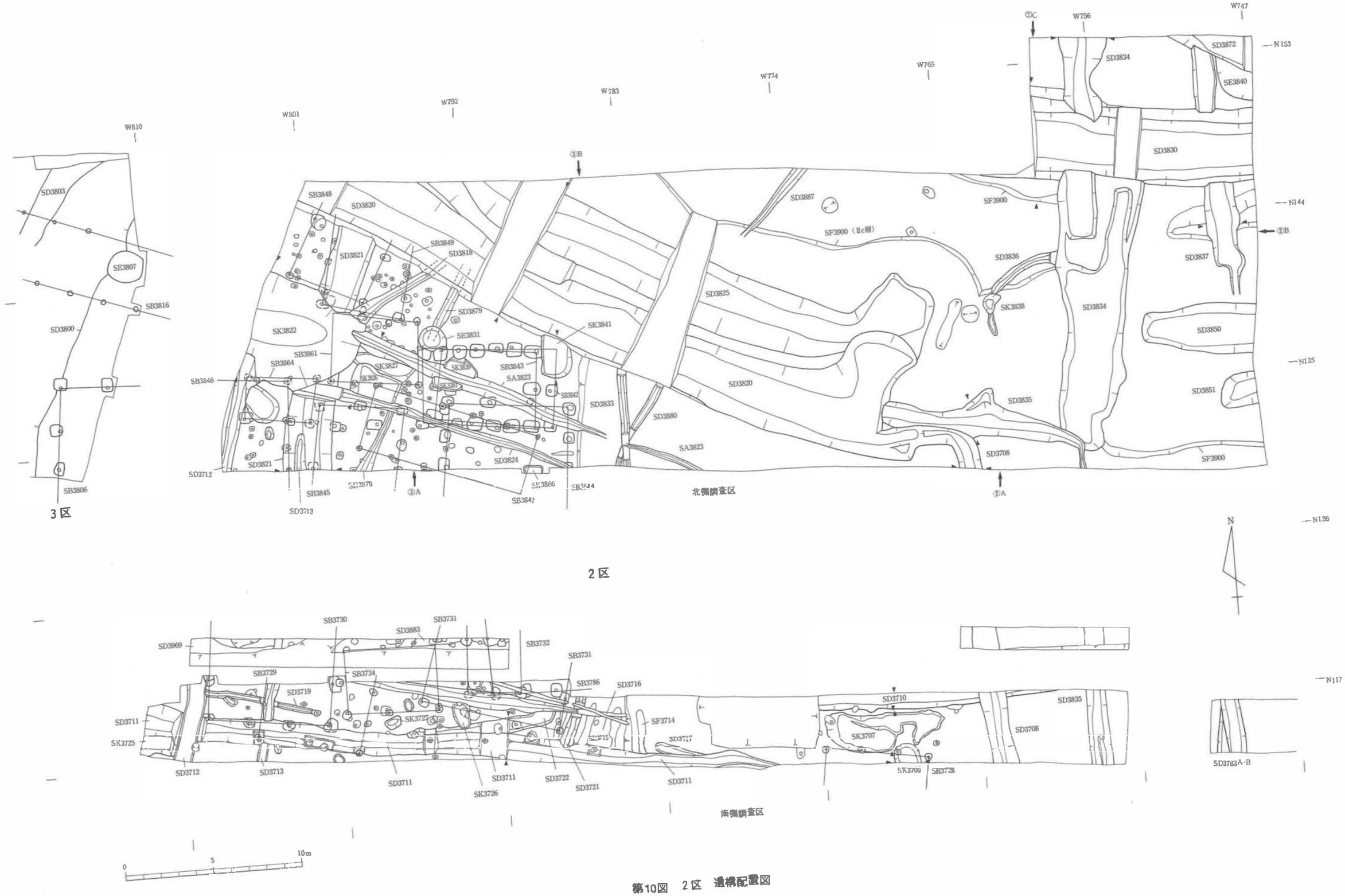
南側調査区で建物跡の南半を検出した。東西３間、南北１間以上の建物跡で、SB3734建物跡、SD3711・3712溝跡より古い。一度、建て替えられている（Ａ→Ｂ）。

Ｂの柱穴は7個検出し、すべてで径20㎝ほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は東西が南側柱列で総長6.8ｍ、柱間寸法は東から2.2ｍ、2.2ｍ、2.4ｍ、南北が東側柱列で総長2.3ｍ以上である。方向は南側柱列でＥ－6°－Ｓである。柱穴は長軸が40～55㎝の楕円形で、深さは深いもので50㎝ある。埋土は地山土ブロックを多く含む黒褐色シルトである。Ａの柱穴は６個検出したが、柱痕跡はＢの柱穴にすべて壊されている。Ａの規模や方向は、Ａ・Ｂの柱穴がほぼ同位置にあることからＢとほぼ同じと思われる。柱穴はＢより大きく、長辺が60～85㎝のやや不整な隅丸長方形で、深さは深いもので50㎝ある。埋土は地山土ブロックを含む黒褐色のシルトや粘土質シルトである。

遺物はＢの柱痕跡から土師器甕、柱穴から土師器甕、須恵器坏・甕が出土している。土師器甕にはロクロ調整のものがある。

【SB3732建物跡】（第11・12図）

南側調査区で建物跡の南西部分を検出した。東西２間、南北２または１間以上の建物跡で、SB3786建物跡より新しく、SD3715・3716溝跡より古い。柱穴は４個検出し、３個で径20㎝ほどの柱痕跡、１個で柱抜取り穴を確認した。建物の規模は東西が南側柱列で総長3.0ｍ、柱間寸法は東から1.5ｍ等間、南北が西側柱列で総長3.0m以上である。方向は南側柱列でＥ－3°－Ｓである。柱穴は長



第10図　2区　遺構配置図

辺40～70cmの隅丸長方形で、深さは深いもので55cmある。埋土は地山土ブロックを多く含む黒褐色シルトである。抜取り穴は長軸45cmの楕円形で、地山土ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。遺物は出土していない。

【SB3786建物跡】（第12図）

南側調査区で建物跡の南西部分を検出した。東西２間以上、南北２または１間以上の建物跡で、SB3731・3732建物跡、SD3715・3716溝跡より古い。柱穴は４個検出し、２個で径20cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は東西が南側柱列で総長3.8m以上、柱間寸法は西から2.0・1.8m、南北が西側柱列で総長2.7m以上である。方向は南側柱列でＥ－2°－Ｓである。柱穴は長辺が80cmの隅丸長方形で、深さは深いもので45cmある。埋土は地山土ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

遺物は柱穴から土師器甕、赤焼土器坏が出土している。

【SB3842建物跡】（第11・12図）

北側調査区で検出した東西３間、南北２間の東西棟で、SA3823塀跡、SB3843・3847・3862・3865建物跡、SE3831井戸跡、SD3824溝跡、SK3841・3881土壙より古い。柱穴は９個検出し、すべてで径20cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は桁行が南側柱列で総長6.7m、柱間寸法は東から2.2m、2.3m、2.2m、梁行が西妻で総長3.9m、柱間寸法は南から1.8m、2.1mである。方向は南側柱列でＥ－8°－Ｓである。柱穴は、長辺が65～100cmのやや不整な隅丸長方形で、深さは深いもので30cmある。埋土は地山砂ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

遺物は柱穴からロクロ調整の土師器甕のほか、須恵器坏、瓦がごく少量出土している。須恵器坏には底部が回転糸切り無調整のものがある。

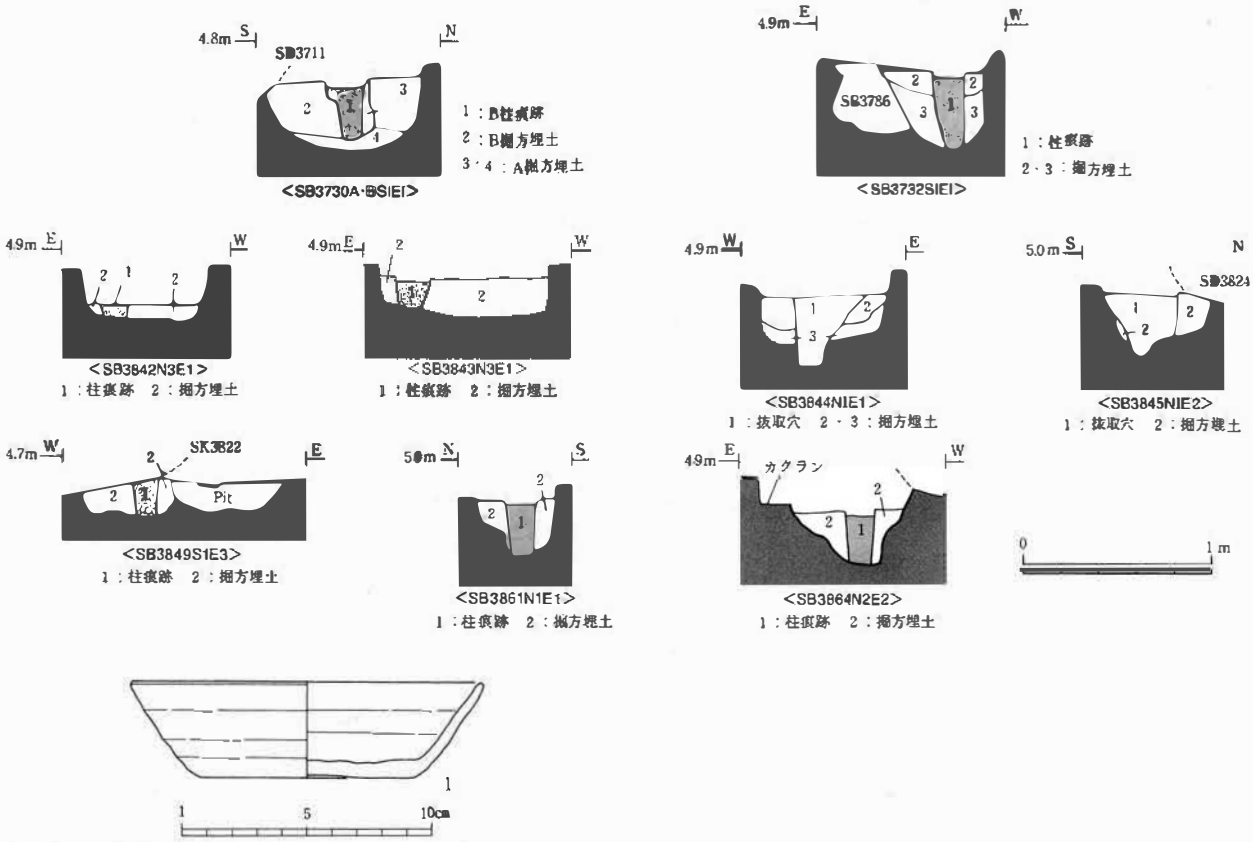
【SB3843建物跡】（第11・12図）

北側調査区で検出した東西３間、南北２間の東西棟で、SB3842建物跡、SK3839土壙より新しく、SB3865建物跡、SE3831井戸跡、SD3824溝跡、SK3841土壙より古い。柱穴はすべて検出し、６個で径20cmほどの柱痕跡、２個で柱の抜取り穴を確認した。建物の規模は桁行が北側柱列で総長6.6m、柱間寸法は東から2.3m、2.2m、2.1m、梁行が東妻で総長4.3m、柱間寸法は南から2.2m、2.1mである。方向は北側柱列でＥ－6°－Ｓである。柱穴は長辺が65～100cmのやや不整な隅丸長方形で、深さは深いもので30cmある。埋土は地山砂ブロックを多く含む黒褐色シルトである。抜取り穴は長軸が30cmの楕円形で、地山砂ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

遺物は柱穴から土師器甕、須恵器坏がごく少量出土している。須恵器坏には底部をヘラ切りで切り離した後に、ナデ調整を施したものがある（第11図１）。

【SB3844建物跡】（第11・12図）

北側調査区で建物跡の北半を検出した。東西３間、南北２間以上の建物跡で、SA3823塀跡、SB3847・3862建物跡より古い。柱穴は８個検出し、７個で柱抜取り穴を確認した。建物の規模は東西が北側柱列で総長6.8m、柱間寸法は東から2.3m、2.2m、2.3m、南北が西側柱列で総長3.7m以上、柱間寸法は北から1.9m、1.8mである。方向は北側柱列でＥ－6°－Ｓである。柱穴は長辺70～90cmの隅丸長方形で、深さは深いもので50cmある。埋土は地山砂ブロックを多く含む黒褐色シルトである。



No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SB3843・掘方埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ 底：ヘラ切り→ナデ	(14.0)	8.5	3.8	7－2	131

第11図　2区　建物跡柱穴断面図（古代）、及びSB3843建物跡出土遺物

抜取り穴は長軸40～60cmの楕円形で、炭粒や地山砂ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

遺物は柱穴から土師器甕、須恵器坏・甕、柱痕跡から赤焼土器坏、抜取り穴から土師器甕がごく少量出土している。

【SB3845建物跡】（第11・12図）

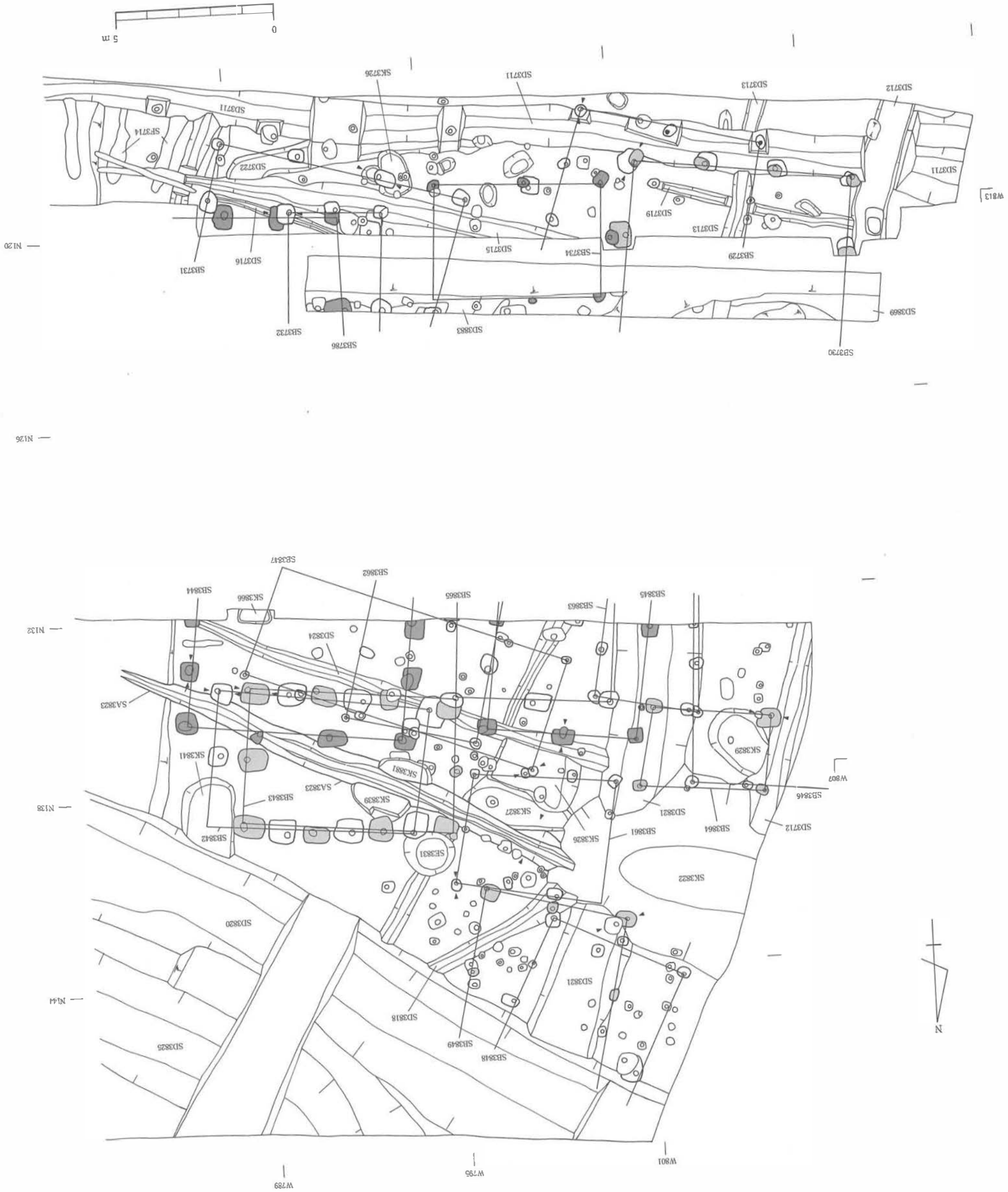
北側調査区で建物跡の北半を検出した。東西2間、南北1間以上の建物跡で、SD3821・3824溝跡より古い。柱穴は5個検出し、2個で径15cmほどの柱痕跡、3個で柱の抜取り穴を確認した。建物の規模は東西が北側柱列で総長4.8m、柱間寸法は東から2.3m、2.5m、南北が西側柱列で総長3.6m以上である。方向は北側柱列でE－8°－Sである。柱穴は長辺が45～70cmの隅丸長方形で、深さは深いもので40cmある。埋土は少量の炭粒と地山砂ブロックを多く含む黒褐色シルトである。抜取り穴は長軸が40cmの楕円形で、炭・焼土・地山砂粒を含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

遺物は柱穴から土師器甕、須恵器坏・甕、柱痕跡と抜取り穴から土師器甕がごく少量出土している。須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のものがある。

【SB3849建物跡】（第11・12図）

北側調査区で建物跡の南半を検出した。東西2間、南北1間以上の建物跡で、SB3848建物跡より新しく、SD3818・3820・3821溝跡、SK3822土壙より古い。柱穴は5個検出し、4個で径15cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は東西が南側柱列で総長4.4m、柱間寸法は東から2.2m等間、南北が東側柱列で総長2.6m以上である。方向は南側柱列でE－15°－Sである。柱穴は長辺35～70cmの隅

第12図　2区　西部遺物群群



丸長方形で、深さは深いもので20cmある。埋土は地山砂ブロックを多く含む褐灰色砂質シルトである。

遺物は柱穴から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、砥石がごく少量出土している。

【SB3861建物跡】（第11・12図）

北側調査区で検出した桁行3間、梁行2間の東西棟で、SA3823塀跡、SB3847建物跡、SD3818・3821溝跡、SK3822・3826土壙より古い。柱穴は8個検出し、すべてで径15cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は桁行が南側柱列で総長4.5m、柱間寸法は東から1.7m、1.5m、1.3m、梁行が東妻で総長3.5m、柱間寸法は北から1.7m、1.8mである。方向は南側柱列でE－6°－Sである。柱穴は長辺が25～50cmの隅丸長方形で、深さは深いもので40cmある。埋土は地山砂ブロックを多く含む黒褐色シルトや褐灰色砂質シルトである。

遺物は柱穴から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が少量出土している。須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のものがある。

【SB3864建物跡】（第11・12図）

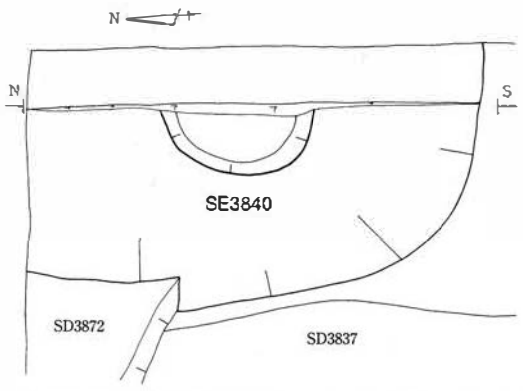
北側調査区で検出した桁行1間、梁行1間の東西棟で、SD3712・3821溝跡、SK3829土壙より古い。柱穴は4個検出し、すべてで径15cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は桁行が南側柱列で3.7m、梁行が東妻で2.5mである。方向は南側柱列でE－8°－Sである。柱穴は長辺が40～70cmの隅丸長方形で、深さは深いもので45cmある。埋土は地山砂ブロックを多く含む黄灰色砂質シルトである。

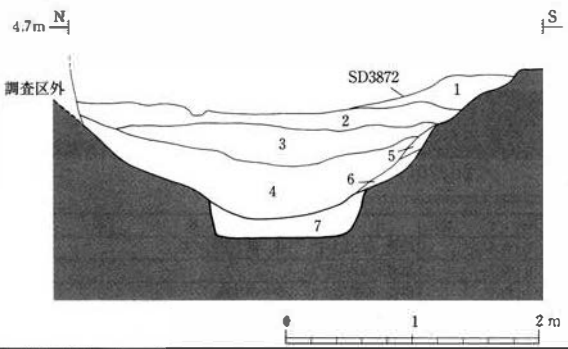
遺物は柱穴から土師器の破片がごく少量出土している。

〈井戸跡〉

【SE3840井戸跡】（第13図）

調査区東壁で西半分のみを検出した。SD3872溝跡より古い。本来は井戸側を据えたと考えられるが、すべて抜取られている。掘方は底面付近しか残っていない。その平面形は長軸1.2m、短軸1.0mほどの楕円形とみられる。深さは130cmである。抜取り穴は東西約3.5mの楕円形で、深さは110cmである。堆積土は上層（1～6層）と下層（7層）に大別できる。下層はオリーブ灰色砂質シルトで、機能時の堆積土とみられる。上層は抜取り穴の堆積土で、炭粒を含む暗褐・灰オリーブ・オリーブ黒





遺構	No	土性	土色	備考
SE3840	1	粘土質シルト	灰黄褐（10YR4/2）	黄褐色砂質シルトブロックを含む。〈抜取堆積土〉
	2	粘土	暗褐（10YR3/3）	黄褐色砂質シルト、炭粒を含む。〈抜取堆積土〉
	3	粘土	灰オリーブ（7.5Y4/2）	地山砂を少し含む。酸化鉄、炭粒を含む。グライ化。〈抜取堆積土〉
	4	粘土	オリーブ黒（7.5Y3/2）	地山砂を少し含む。グライ化。〈抜取堆積土〉
SE3840	5	砂質シルト	暗オリーブ灰（10YR3/3）	暗褐色粘土との互層。炭粒を含む。グライ化。〈抜取堆積土〉
	6	シルト	オリーブ灰（5GY5/1）	灰白色火山灰との互層。グライ化。〈抜取堆積土〉
	7	シルト	オリーブ灰（5GY5/1）	地山砂を多く含む。グライ化。〈横流時堆積土〉

第13図　2区　SE3840井戸跡（古代）

色の粘土などで、6層には灰白色火山灰が互層状に含まれている。いずれも自然流入土である。

遺物は上層からロクロ調整の土師器坏・甕のほか、丸瓦がごく少量出土している。

〈溝跡〉

【SD3710溝跡】（第10・14・15図）

南側調査区東部を東西方向に走る溝跡で、南半分を検出した。SD3708溝跡より古い。検出した長さは13.8mで、上幅40～90cm以上、下幅が30cm以上である。断面形は逆台形で、深さは60cmある。方向はE－2°－Nである。堆積土は砂を互層に含む黒褐色粘土・シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、平瓦、曲物の底板（第15図17）が出土している。

【SD3821溝跡】（第10・14図）

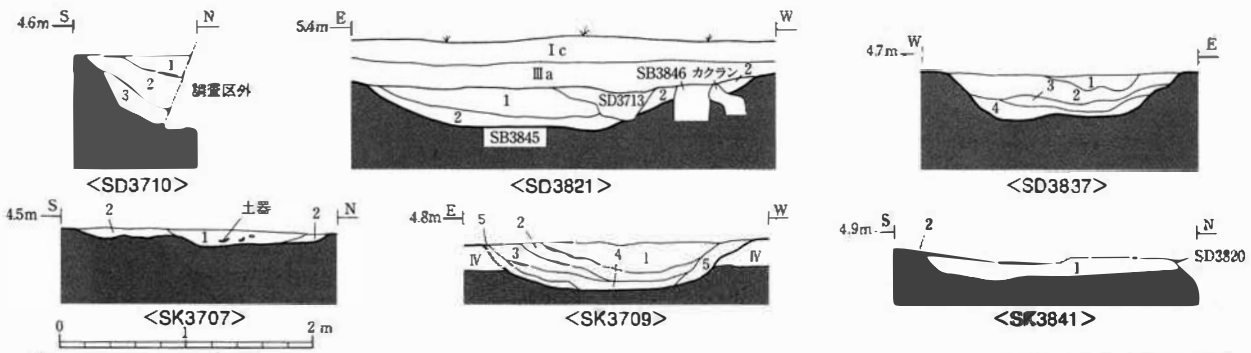
北側調査区の西端で検出した南北方向に走る溝跡で、SB3845・3848・3849・3861・3863～3865建物跡より新しく、SB3846建物跡、SD3820・3824溝跡、SK3822土壙より古い。検出した長さは13.5mで、上幅が210～270cm、下幅は100～180cmである。断面形は皿状で、深さは深いところで30cmある。方向はN－18°－Eである。堆積土は暗褐・黒褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏が出土している。

【SD3837溝跡】（第10・14図）

北側調査区東部で検出した南北方向に走る溝跡で、SD3830・3872溝跡より古い。検出した長さは14.3mで、上幅が40～190cm、下幅は30～150cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで40cmある。方向はN－2°－Wである。堆積土は炭粒や地山砂粒を含む褐灰色シルトや黄灰色砂質シルトで、自然流入土である。

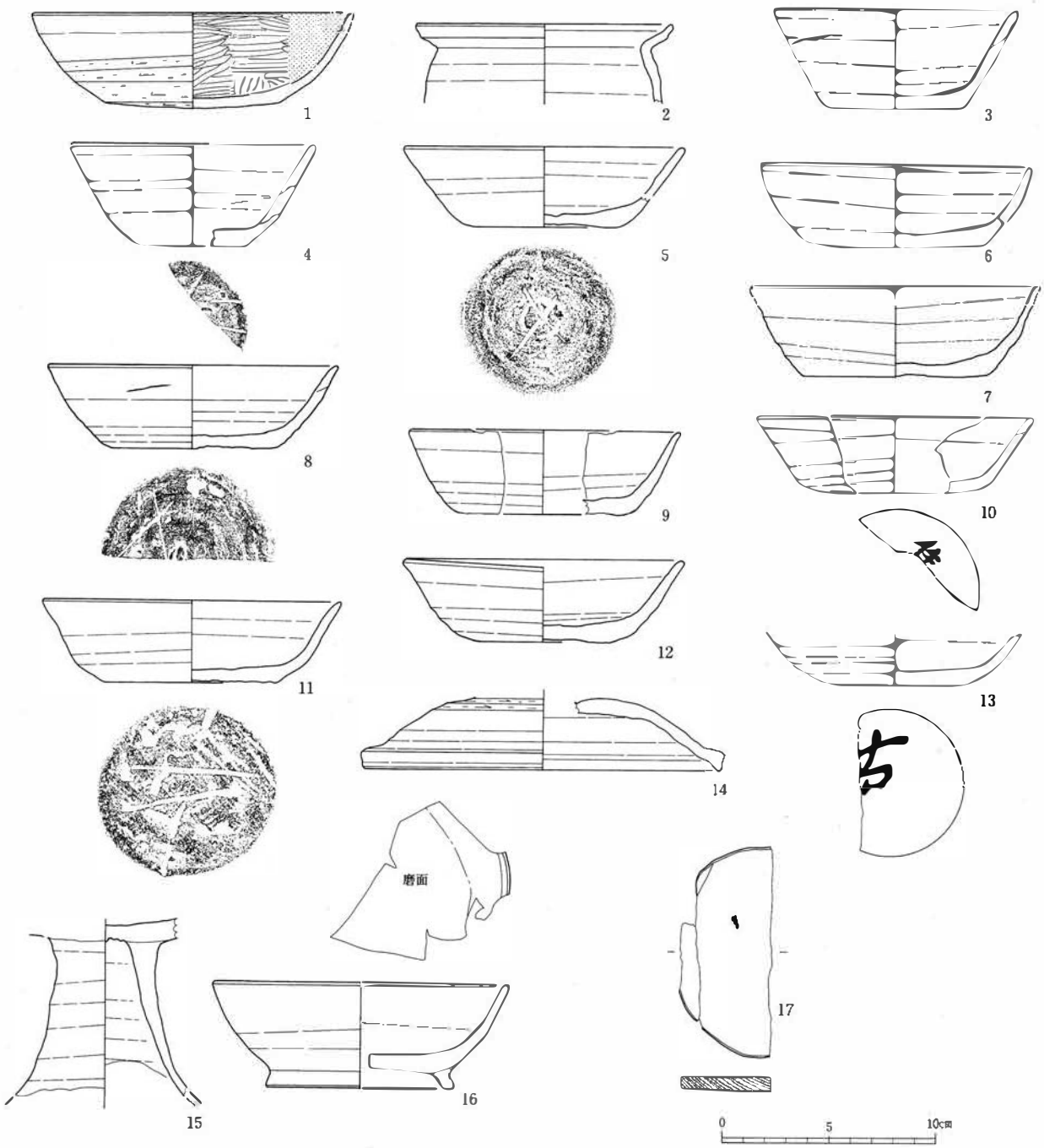
遺物は堆積土からロクロ調整の土師器坏・甕がごく少量出土している。



遺構	No.	土性	土色	備考
SD3710	1	シルト	黒褐（2.5Y3/1）	砂、粘土との互層。
	2	粘土	黒褐（10YR3/1）	
	3	粘土	黒褐（10YR3/1）	砂との互層。
	4	粘土質シルト	黒（5Y2/1）	
SD3821	1	シルト	灰黄褐（10YR4/2）	地山土を少し含む。
	2	シルト	黒褐（10YR3/2）	
SD3837	1	シルト	黒（10YR2/1）	地山土粒、炭粒を含む。
	2	シルト	褐灰（10YR4/1）	地山土粒、炭粒を少し含む。
	3	シルト	黒褐（10YR3/1）	地山砂粒を少し含む。
	4	砂質シルト	黄灰（25Y4/1）	地山小ブロックを含む。

遺構	No.	土性	土色	備考
SK3707	1	粘土	黒褐（10YR3/1）	炭や焼土、地山土ブロックを多く含む。土器片も多い。
	2	粘土	黒褐（10YR3/2）	地山土・砂ブロックを多く含む。
SK3709	1	シルト	黒褐（10YR3/2）	
	2	粘土	黒褐（10YR3/1）	
	3	シルト	黒褐（10YR3/2）	
	4	粘土	黒褐（10YR3/1）	
	5	粘土	黒褐（10YR3/1）	地山土・砂をまだらに含む。
SK3841	1	シルト	褐灰（10YR5/1）	灰白色火山灰、炭化物を含む
	2	砂質シルト	にぶい黄褐（10YR5/3）	

第14図　2区　溝跡・土壙断面図（古代）



No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SX3707・埋土	土師器・坏	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　底：ヘラ切り→回転ヘラケズリ　内黒	(15.1)	8.3	4.5	7－3	7
2	SX3707・埋土	土師器・甕	内外：ロクロナデ	(12.0)	－	－		8
3	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(12.4)	(6.6)	4.8	7－4	13
4	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　焼成前に刻書	(11.5)	(5.2)	4.8		19
5	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　焼成前に×状の刻書	(13.1)	7.0	3.8	7－7	10
6	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(12.6)	(8.0)	3.9	7－5	12
7	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(13.6)	(8.6)	4.3	7－6	11
8	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　焼成前に×状の刻書	(13.6)	(8.0)	4.0	7－8	14
9	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(12.6)	(7.6)	3.9		16
10	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　墨書「□」	(13.0)	(7.6)	3.6	7－9	17
11	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　焼成前に二本線状の刻書	14.0	8.1	3.9	7－10	9
12	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(13.2)	(7.6)	3.8	7－11	15
13	SX3707・埋土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ　墨書「□」	－	6.7	－		18
14	SX3707・埋土	須恵器・蓋	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　内：ロクロナデ	(17.0)	－	－	7－12	20
15	SX3707・埋土	須恵器・高盤	脚部内外：ロクロナデ	－	－	－		21
16	SX3707・埋土	転用硯（須恵器・高台坏）	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り→高台貼付→ロクロナデ	(13.8)	(8.8)	5.0	7－13	23
17	SD3710・堆積土	曲物・底板	径：10.0cm　厚さ：0.6cm　木取：柾目　樹種：ヒノキ					木1

第15図　2区　SD3710溝跡、SK3707土壙出土遺物

〈土壙〉

【SK3707土壙】（第10・14・15図）

南側調査区の東部で検出した。SB3728建物跡より古い。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸670cm、短軸210cmである。断面形は皿状で、北側は一段深く窪む。深さは15cmである。堆積土は炭や焼土、地山土ブロックを多く含む黒褐色粘土で人為的に埋め戻されており、遺物も多く含まれている。

遺物は埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・蓋・高盤・瓶、平・丸瓦、転用硯（第14図16）が出土しており、須恵器坏の出土量が多い。遺物の残存は必ずしも良好ではないが、土師器は坏・甕ともにロクロ調整のものが主体で、坏には底部の切離し後に底部と体部下端を回転ヘラケズリ調整したものがある（1）。須恵器坏の底部の切離し技法はヘラ切りが多く、切離し後は無調整か、あるいはナデ調整が施されている（3～13）。また、底部に墨書したもの（10・13）や、焼成前に×状や二本線状の刻書をしたもの（4・5・8・11）もある。

【SK3709土壙】（第10・14図）

南側調査区の東部で検出した。平面形は楕円形で、規模は長軸が120cm以上、短軸が140cmである。断面形は皿状で、深さは40cmある。堆積土は黒褐色のシルトや粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器甕、須恵器蓋がごく少量出土している。

【SK3841土壙】（第10・14図）

北側調査区の西部で検出した。SB3842・3843建物跡より新しい。平面形は楕円形で、規模は長軸が250cm以上、短軸が170cmである。断面形は皿状で、深さは30cmある。堆積土はにぶい黄褐色砂質シルトや、炭と灰白色火山灰が混じる褐灰色シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋が少量出土している。

〈小溝状遺構〉（第10図）

南側調査区の中央部でSF3714を検出した。南北方向にのびる小溝状遺構で、SB3831建物跡、SD3711・3715・3716溝跡より古い。検出した溝の数は4条で、間隔は1.5mである。各溝の長さは南側がSD3711溝跡に壊されているため不明だが、最も長いもので2.6m分を検出している。幅は20～50cmで、断面形はU字形、深さは深いところで15cmである。堆積土は地山土ブロックを含む黒褐色シルトである。遺物は堆積土から土師器甕がごく少量出土している。

B．近世

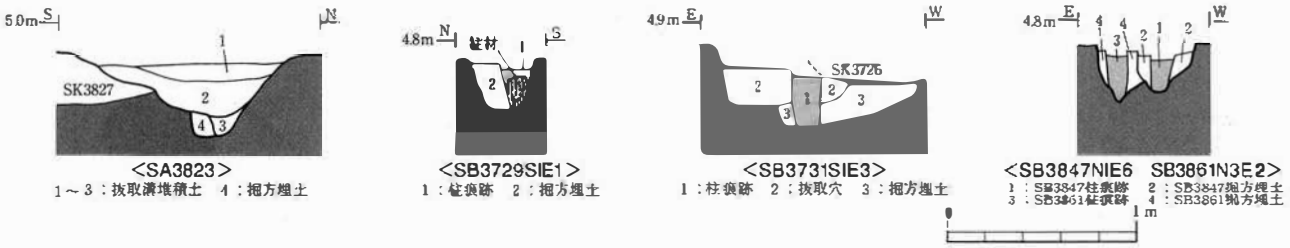
遺構には塀跡1条、掘立柱建物跡4棟、井戸跡1基、溝跡15条、土壙5基がある。

〈塀・掘立柱建物跡〉

古代の建物跡と同様に調査区西部の微高地で検出した。概して柱穴が小さい。

【SA3823塀跡】（第12・16・17図）

北側調査区にある東西方向にのびる塀跡である。検出したのは溝状の掘方の一部と塀材の抜取り溝で、塀材は完全に抜取られている。SB3842・3844・3861建物跡、SD3833・3880溝跡、SK3827・3839・3881土壙より新しく、SK3822土壙より古い。



第16図　2区　塀跡・建物跡柱穴断面図（近世）

抜取り溝の下で検出した掘方は、溝状で西から長さ9.5m分を検出した。幅は30～50cmである。断面形は箱形で、深さは最大15cm分が残存する。遺構確認面からの深さは60cmある。方向はE－26°－Sである。埋土は地山ブロックを含む黒色粘土質シルトである。抜取り溝は長さ21.2m分を検出した。幅は30～95cmである。断面形はU字形で、塀材最下部の抜取り部分はさらに窪む。深さは深いところで65cmで、方向は掘方と同じである。堆積土は自然流入土で、3層に細分される。1・3層が黒褐色、2層が黄灰色のシルトで、1層に地山砂粒、2・3層に小さい地山砂ブロックが少し混じる。

遺物は掘方埋土から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、赤焼土器坏、丸・平瓦が少量出土している。抜取り溝の堆積土からは陶器のほか、土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、赤焼土器坏・高台坏、丸・平瓦、釘（第17図3）が出土している。陶器には瀬戸美濃の鉢（2）、志野の皿（1）がある。

【SB3729建物跡】（第12・16・17図）

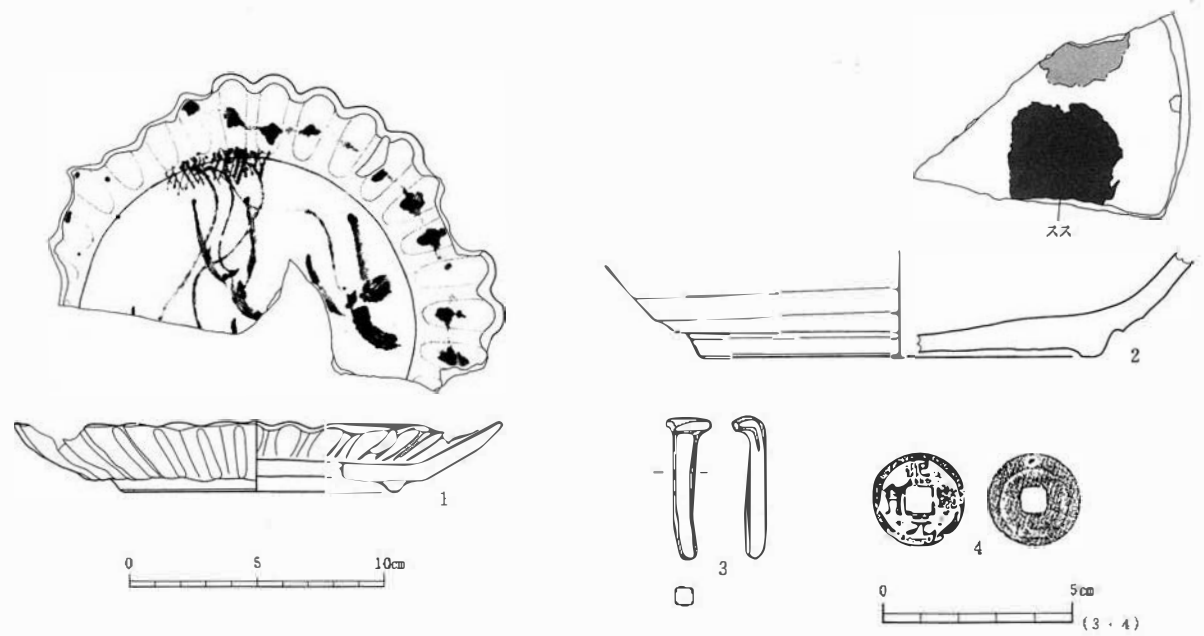
南側調査区で建物跡の南半を検出した。南北2間以上、東西2間の建物跡で、SD3711・3713・3719溝跡より新しい。柱穴は6個検出し、4個で径15cmほどの柱痕跡、2個で径10cmの柱材を確認した。建物の規模は南北が東側柱列で総長3.6m以上、柱間寸法は1.8m等間、東西が南側柱列で総長5.7m、柱間寸法は東から2.8m、2.9mである。方向は東側柱列でN－18°－Eである。柱穴は長軸が25～40cmの楕円形で、深さは深いもので25cmある。埋土は地山土ブロックを含む黒褐色シルトである。

遺物は柱穴から熙寧元宝（北宋：1068初鋳）（第17図4）が出土している。

【SB3731建物跡】（第12・16図）

南側調査区で建物跡の南半を検出した。東西3間、南北2間以上の建物跡で、SB3786建物跡、SF3714小溝状遺構より新しく、SD3722溝跡、SK3726土壙より古い。柱穴は6個検出し、すべてで径20cmほどの柱痕跡を確認した。また、1個で柱の抜取り穴を確認した。建物の規模は東西が南側柱列で総長6.8m、柱間寸法は東から2.2m、2.2m、2.4m、南北が西側柱列で総長3.6m以上、柱間寸法は南から3.6mである。方向は南側柱列でE－15°－Sである。柱穴は長辺が40～70cmの隅丸長方形で、深さは深いもので45cmある。埋土は地山土ブロックを多く含む黒褐色シルトである。抜取り穴は長軸が80cmの楕円形で、地山土ブロックを含む黒褐色シルトで埋め戻されている。

遺物は柱痕跡から土師器甕、柱穴から土師器坏・甕、須恵器坏、赤焼土器坏、瓦、抜取り穴から土師器坏が出土している。



No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SA3823・抜取堆積土	陶器・皿	志野。灰釉（灰色）。見込みに鉄絵草花文。底部に焼台痕。	(19.4)	(10.8)	2.8	10－1	113
2	SA3823・抜取堆積土	陶器・鉢	瀬戸美濃。灰釉（浅黄色）。内面に一部緑釉およびスス付着。高台部露胎。	－	(16.0)	－	10－2	114
3	SA3823・抜取堆積土	釘	長さ：(3.8)cm　残存　幅：1.2cm　厚さ：0.5cm	－	－	－	12－8	173
4	SB3729・掘方埋土	銭貨（開寧元宝）	北宋（1068年初鋳）外縁外径：2.5cm　外縁内径：2.1cm	－	－	－	12－3	174

第17図　2区　SA3823塀跡、SB3729建物跡出土遺物

【SB3847建物跡】（第12・16図）

北側調査区で検出した桁行5間、梁行1間の建物跡で、SB3842・3844・3861・3862建物跡、SK3826土壙より新しい。柱穴は9個検出し、すべてで径10cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は桁行が北側柱列で総長9.6m、柱間寸法は東から1.9m、1.9m、1.8m、2.0m、1.9m、梁行が西妻で総長3.6mである。方向は北側柱列でE－22°－Sである。柱穴は長軸が25～40cmの楕円形で、深さは深いもので40cmある。埋土は少量の炭粒と、小さい地山砂ブロックを多く含む黒褐色シルトである。

遺物は柱穴から土師器坏・甕、須恵器坏・甕がごく少量出土している。

〈井戸跡〉

【SE3831井戸跡】（第18図）

平面形が楕円形の素掘りの井戸跡で、SB3842・3843建物跡より新しく、SD3879溝跡より古い。規模は長軸が1.6m、短軸1.4mである。断面形は円筒形で、深さは105cmある。堆積土は小さい地山砂ブロックが混じる灰黄褐色シルトや黒褐色粘土質シルトで、自然流入土である。

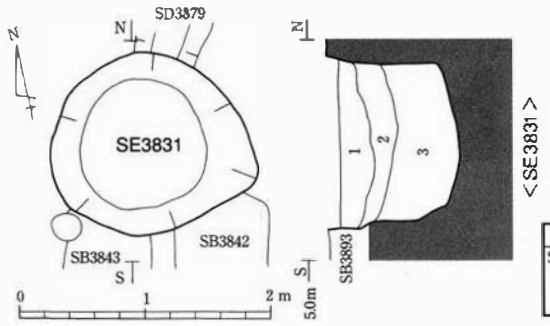
遺物は堆積土から土師器坏・甕がごく少量出土している。

〈溝跡〉

北側調査区に上幅が1.5mを越える比較的規模の大きい溝跡（SD3820・3825・3830・3834など）がみられる。ほかは上幅1.0m前後の溝跡が多い。

【SD3708溝跡】（第10・19図）

東部で検出した。北から見てSD3820東西溝跡の東端にL字に取付く溝跡である。SD3710・3835溝



遺構	No.	土性	土色	備考
SE3831	1	シルト	灰黄褐（10YR4/2）	地山小ブロックを含む。
	2	粘土質シルト	黒褐（10YR3/1）	地山小ブロックを少し含む。
	3	シルト質粘土	黒褐（2.5Y3/1）	地山ブロックを含む。

第18図　2区　SE3831井戸跡

跡より新しい。検出した長さは南側調査区で5.5m、北側で6.7mで、総長は23.4m以上ある。上幅は120～150cmで、下幅は60～90cmである。断面形はU字形で、深さは深いところで40cmある。方向は東西部分がE－3°－N、南北部分がN－2°－Wである。堆積土は地山砂を含む黒色粘土質シルトや黒褐色シルト質粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から須恵器甕がごく少量出土している。

【SD3711溝跡】（第10・19～21図）

南側調査区の中央～西部で検出した東西方向に走る溝跡で、SB3730建物跡、SD3713・3717・3721・3722溝跡、SK3725土壙、SF3714小溝状遺構より新しく、SB3729建物跡、SD3712溝跡より古い。検出した長さは36.0mで、上幅は40～210cm、下幅は30～70cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで70cmある。方向はE－8°－Sである。堆積土は地山土が混じる黒褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から青磁皿（第20図1）、陶器碗・皿・火鉢（3）、瓦質土器擂鉢（図版10－17）、硯（第20図4）、折敷の底板（第21図1）のほか、土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・壺、赤焼土器坏・高台坏、平・丸瓦が出土している。陶器皿には瀬戸美濃のものがある（第20図2）。

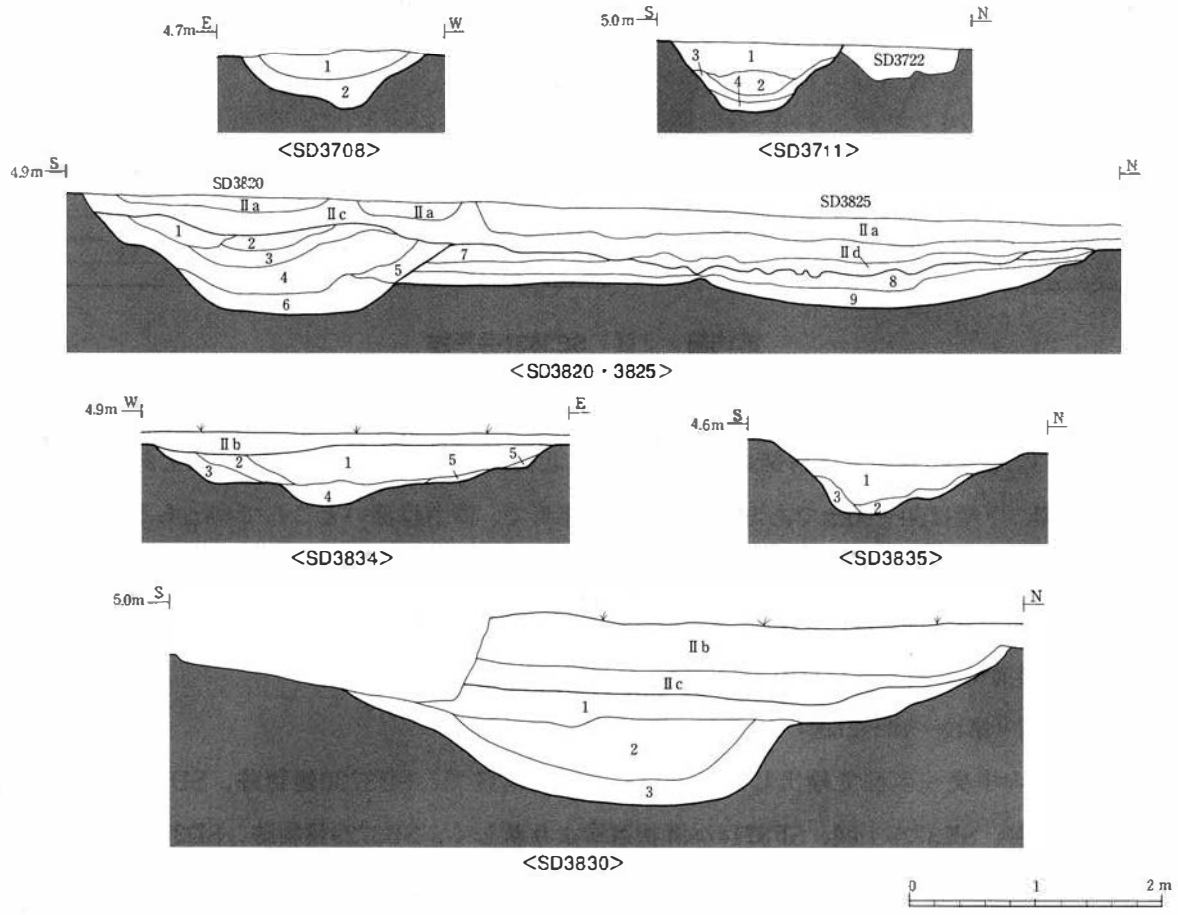
【SD3712溝跡】（第10図）

西端部で検出した南北方向に走る溝跡で、SK3822土壙の南側に取付いている。SB3730・3846・3864建物跡、SD3711溝跡、SK3829土壙より新しい。検出した長さは南側調査区で5.2m、北側で6.9mで、総長は23.5m以上ある。上幅は70～110cm、下幅は20～100cmである。断面形はU字形や皿状で、深さは深いところで30cmある。方向はN－14°－Eである。堆積土は炭粒を少し含む灰色砂質シルトやオリーブ黒色シルト質砂で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、赤焼土器坏、瓦が出土している。

【SD3818溝跡】（第10・21図）

北側調査区の西部で検出した東西方向に走る溝跡で、SK3822土壙の北東部に取付いている。SB3848・3849・3861建物跡、SD3820溝跡より新しい。検出した長さは5.1mで、上幅は50～105cm、下幅は15～30cmである。断面形はU字形で、深さは深いところで15cmある。方向はE－27°－Nである。堆積土は黒褐色砂質シルトで、自然流入土である。



遺構	No.	土性	土色	備考
SD3711	1	シルト	黒褐（10YR3/2）	地山小ブロックが混じる。炭粒を若干含む。
	2	シルト	黒褐（10YR3/1）	地山小ブロックを混じる。
	3	シルト	黒褐（10YR2/2）	地山土との互層。
	4	シルト	黒褐（10YR2/2）	地山土をまだらに取込む。
SD3820	1	砂質シルト	にぶい黄褐（10YR5/4）	2層の土がブロック状に混じる。炭粒を少し含む。
	2	粘土質シルト	灰黄褐（10YR4/2）	1層の土を互層状に取り込む。炭粒を少し含む。
	3	粘土質シルト	黒褐（10YR3/2）	地山土粒、炭粒を含む。
	4	粘土質シルト	暗褐（10YR3/3）	地山砂ブロック、炭粒を含む。
	5	粘土質シルト	暗褐（10YR3/3）	地山砂との互層。炭粒を含む。
	6	粘土質シルト	暗緑灰（7.5GY4/1）	地山砂ブロックを含む。グライ化。
SD3825	7	シルト	灰黄褐（10YR4/2）	炭粒を含む。
	8	粘土質シルト	黒褐（10YR3/1）	地山土ブロックを含み、炭粒を少し含む。
	9	粘土	暗褐（10YR3/3）	地山土ブロックを含み、炭粒を少し含む。

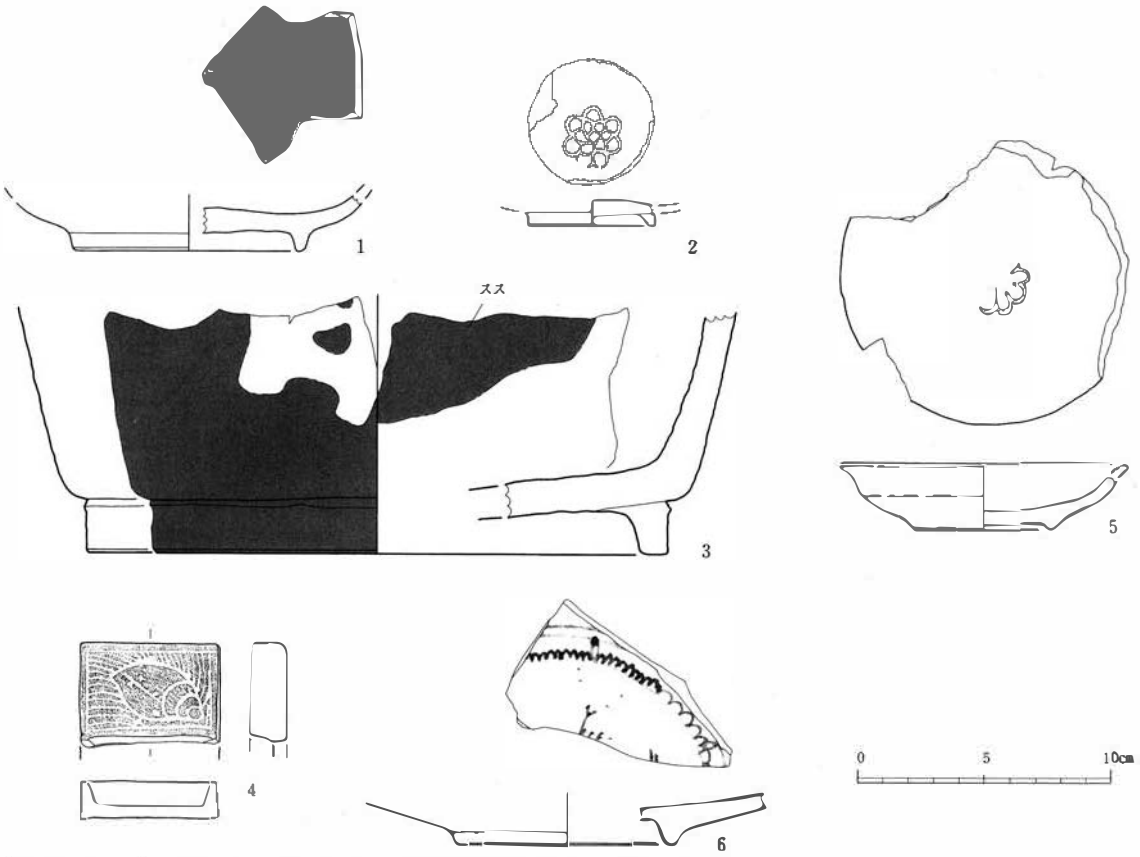
遺構	No.	土性	土色	備考
SD3708	1	粘土質シルト	黒（2.5Y2/1）	地山砂粒と少し炭粒を含む。
	2	シルト質粘土	黒褐（2.5Y3/1）	地山砂を少し含む。
SD3834	1	シルト	黒褐（7.5YR3/1）	2、4、5層の土を少し含む。炭粒、地山土粒少し含む。
	2	シルト	褐灰（10YR4/1）	地山土粒を少し含む。
	3	シルト	暗灰黄（2.5Y5/2）	地山小ブロックを含む。
	4	粘土質シルト	黄灰（2.5Y4/1）	地山小ブロックを含む。
	5	砂質シルト	暗灰黄（2.5Y5/2）	地山砂を多く含む。
SD3835	1	シルト質粘土	黒（5Y2/1）	地山小ブロックと炭粒を少し含む。
	2	シルト質粘土	オリーブ黒（5Y3/1）	地山小ブロックを多く含む。
	3	シルト質粘土	灰（5Y5/1）	地山小ブロックを含む。
SD3830	1	粘土	黒褐（10YR3/3）	地山砂を互層状に含み、炭・酸化鉄粒を多く含む。
	2	粘土	オリーブ黒（7.5Y3/2）	酸化鉄粒を少し含む。グライ化。
	3	粘土	オリーブ黒（7.5Y3/2）	地山砂との互層。酸化鉄粒を少し含む。グライ化。

第19図　2区　溝跡断面図（近世）

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、曲物底板（第21図2）が出土している。

【SD3820溝跡】（第10・19・21図）

北側調査区の北西隅から中央部にかけて検出した。東西方向にのびる規模の大きい東西溝跡である。東端は⌐状に止まっており、また、南東隅にはSD3708溝跡が取付いている。SB3848・3849建物跡、SD3821・3825・3833・3880溝跡より新しく、SD3818・3879溝跡より古い。検出した長さは39.0mで、上幅は360～420cm、下幅は120～340cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで80cmある。方向はE－28°－Sである。堆積土は炭粒や地山砂を含む黒褐色や暗褐色、暗緑灰色の粘土質シルトで、自然流入土である。



No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SD3711・堆積土	青磁・皿	(オリーブ灰) 見込みに草花文。高台内無釉。	−	(9.2)	−	9−12	49
2	SD3711・堆積土	陶器・皿	瀬戸美濃。灰釉 (灰オリーブ)。見込みに印花文。	−	5.0	−	10−4	50
3	SD3711・堆積土	陶器・火鉢	無釉。内外面ともにスス付着	−	(23.0)	−	7−14	53
4	SD3711・堆積土	硯	長さ：(4.2)cm 幅：5.5cm 高さ：1.5cm 上面に宝珠を線刻 石材：凝灰岩or泥岩	−	−	−	12−11	54
5	SD3825・堆積土	陶器・皿	瀬戸美濃。灰釉端反皿。(オリーブ灰)。見込みに印花文。高台から高台内無釉。貫入有り。高台内に墨焼痕。外底〜体下部：2次加熱？	(11.4)	5.6	2.7	10−3	126
6	SD3834・堆積土	磁器・皿	染付。肥前。高台部露胎。	−	(8.8)	−	9−15	127

第20図　2区　SD3711・3825・3834溝跡出土遺物（陶磁器・硯）

遺物は底面から下駄（第21図3）、堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・蓋・甕、赤焼土器坏、平・丸瓦、砥石が出土している。

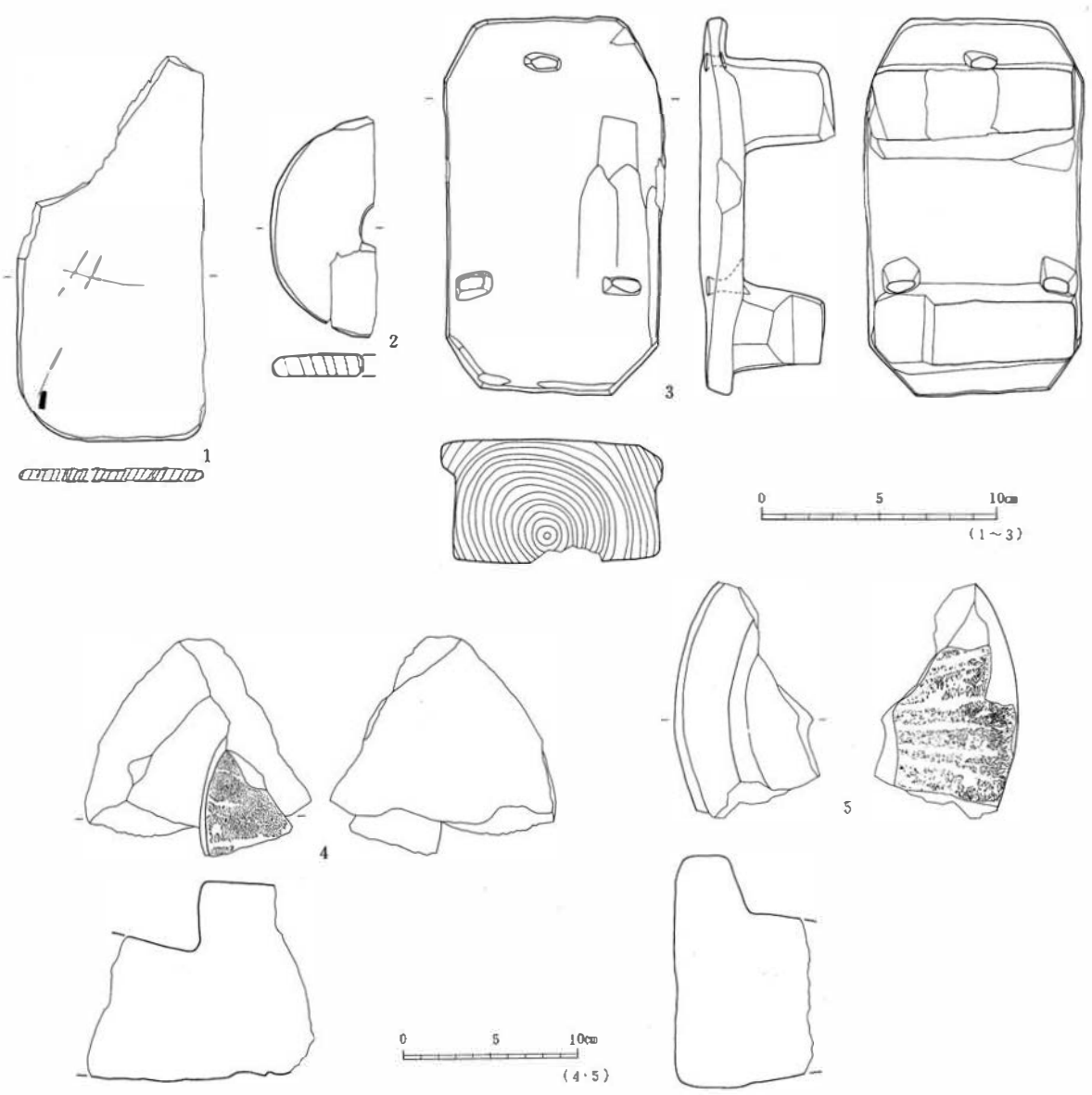
【SD3825溝跡】（第10・19・20図）

SD3820溝跡と同様に、北側調査区の北西隅から中央部にかけて検出した規模の大きい東西方向にのびる溝跡である。東端は⌐状に止まっており、南東隅にはSD3720溝跡に対するSD3708溝跡と同じようにSD3835溝跡が取付いていたとみられる。また、西側は北側に少し曲がって調査区外に出る。SD3820溝跡より古い。検出した長さは28.5mで、上幅は310〜480cm、下幅は100〜170cmである。断面形は皿状で、深さは深いところで60cmある。方向はE−27°−Sである。堆積土は黒褐色粘土質シルトや炭粒を含む暗褐色粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から瀬戸美濃の灰釉端反皿が出土している（第20図5）。

【SD3830溝跡】（第10・19図）

北側調査区の東部で検出した東西方向にのびる規模の大きい溝跡で、SD3834・3837溝跡より新しい。検出した長さは12.7mで、上幅は420〜480cm、下幅は170〜230cmである。断面形はなかほどに段



No.	遺構・層位	種別	特徴	写真	登録
1	SD3711・堆積土	折敷・底板	長さ：(16.4)cm　幅：8.0cm　厚さ：0.5cm　木取：柾目　樹種：ケヤキ　刃傷有。	10－22	木2
2	SD3818・堆積土	曲物・蓋板	径：9.4cm　厚さ：0.9cm　中心に有孔（径2.0cm）　木取：柾目　樹種：サクラ属	10－23	木19
3	SD3820・底面	下駄	長さ：16.1cm　幅：9.4cm　高さ：5.3cm　樹種：イヌガヤ	11－2	木20
4	SD3835・堆積土	茶臼・下臼	径：－　高さ：11.3cm　石材：安山岩		130
5	SD3835・堆積土	石臼・上臼	径：－　高さ：13.3cm　石材：安山岩	12－16	129

第21図　2区　SD3711・3818・3820・3835溝跡出土遺物（木・石製品）

がつく逆台形で、深さは深いところで90cmある。方向はE－8°－Sである。砂を互層状に含むオリーブ黒色粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、瓦が出土している。

【SD3834溝跡】（第10・19・20図）

北側調査区の東部で検出した南北方向にのびる規模の大きい溝跡で、SD3836溝跡より新しく、SD3830・3835溝跡より古い。検出した長さは23.5mで、上幅が150～470cm、下幅は140～320cmである。断面形は逆台形で、部分的に一段深くなる場所もある。深さは深いところで45cmある。方向はN－

8° －Eである。堆積土は炭や地山土の粒を含む黒褐色シルトや黄灰色粘土質シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から肥前の磁器皿（第20図６）のほか、土師器甕、須恵器甕、平瓦が少量出土している。

【SD3835溝跡】（第10・19・21図）

東部で検出した。北から見てSD3825東西溝跡の東端にＬ字に取付くとみられる溝跡で、SD3834溝跡より新しく、SD3708溝跡より古い。南側調査区で5.5m、北側で13.0m分を検出し、総長は29.7m以上ある。上幅は20～195cm、下幅は15～80cmである。断面形は逆台形で、底面が部分的に一段深くなる場所がある。深さは60cmである。方向は東西部分がE－12° －S、南北部分がN－2° －Eである。堆積土は小さい地山土ブロックが混じる黒・オリーブ黒色シルト質粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から茶臼（第21図４）、石臼（５）のほか、土師器坏・甕、須恵器高台坏・甕、赤焼土器坏、平・丸瓦が出土している。

〈土壙〉

【SK3822土壙】（第10・22図）

北側調査区の西端で検出した。SA3823塀跡、SB3846・3849・3861建物跡、SD3821溝跡より新しく、SD3712・3818溝跡とは一連である。平面形は楕円形で、南側にSD3712、北東部にSD3818が取付く。規模は長軸620cm以上、短軸580cmである。断面形は皿状で、深さは85cmある。堆積土は４層に分けられる。３・４層は地山砂が少し混じる黒・暗オリーブ灰色粘土で、自然流入土である。２層は地山粘土ブロックを多く含むオリーブ黒色シルト質粘土で、人為的に埋め戻されている。１層は埋め戻し後の窪みに堆積した自然流入土で、炭と地山土の粒を含む黒色シルト質粘土である。

遺物は堆積土から唐津の陶器皿（図版10－10）、杓子（第22図１）のほか、土師器坏・甕、須恵器甕、平・丸瓦が少量出土している。

【SK3826土壙】（第10・22図）

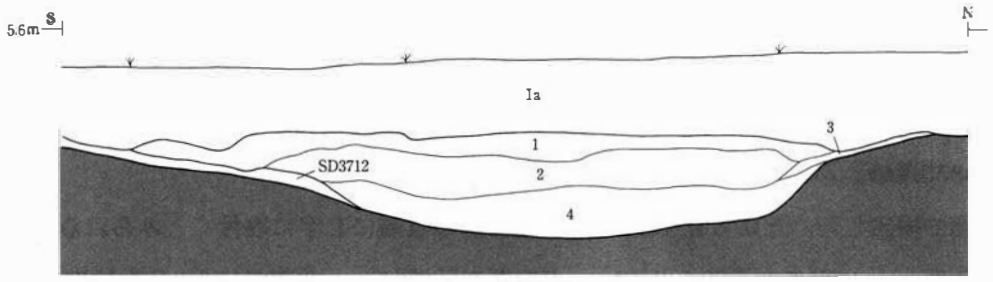
北側調査区の西部で検出した。SB3861建物跡、SK3827土壙より新しく、SB3847建物跡、SD3824溝跡より古い。平面形は不整な長方形で、規模は長辺280cm、短辺180cm以上である。断面形は皿状で、深さは30cmある。堆積土は地山砂と炭を少し含む黒褐色シルトで、自然流入土である。

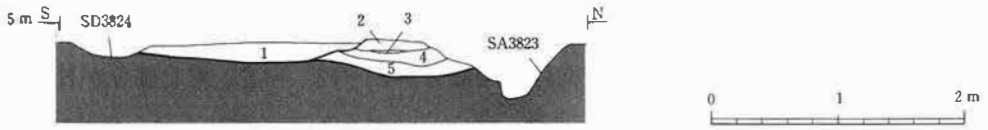
遺物は堆積土から陶器の破片のほか、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、平・丸瓦、釘が少量出土している。

【SK3827土壙】（第10・22図）

北側調査区の西部で検出した。SA3823塀跡、SK3822・3826土壙より古い。平面形は楕円形で、規模は長軸が350cm、短軸が140cm以上である。断面形は皿状で、深さは30cmある。堆積土は地山砂を多く含む黄灰色や黒色のシルトで、自然流入土である。

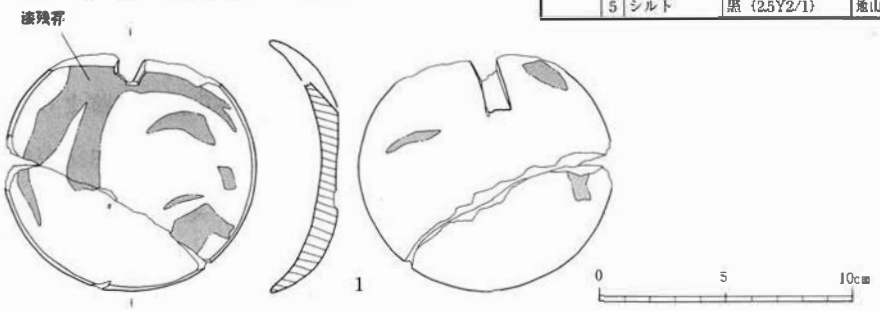
遺物は堆積土から八羽文の描かれた中国産磁器の角皿（図版９－16）のほか、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、平・丸瓦が少量出土している。





遺構	No	土性	土色	備考
SK3822	1	シルト質粘土	黒 (5Y2/1)	均質な土。地山土と炭粒を少し含む。(自然)
	2	シルト質粘土	オリーブ黒 (5Y3/2)	地山大ブロックを多く含む。炭粒を少し含む。(人為)
	3	粘土	黒 (2.5Y2/1)	地山砂を少し含む。(自然)
	4	粘土	暗オリーブ灰 (2.5GY3/1)	3層がグライ化した土。(自然)

遺構	No	土性	土色	備考
SK3826	1	シルト	黒褐 (7.5YR3/1)	地山砂粒、炭粒を少し含む。
SK3827	2	シルト質砂	灰黄 (2.5Y6/2)	汚れた地山砂主体。
	3	シルト	黄灰 (2.5Y4/1)	地山砂を少し含む。
	4	シルト	黄灰 (2.5Y5/1)	地山砂を多く含む。
	5	シルト	黒 (2.5Y2/1)	地山砂小ブロックを少し含む。



No.	遺構・層位	種別	特徴	写真	登録
1	SK3822・底面直上	漆器・椀子	径：10.0cm 高さ：2.7cm 木取：横目 樹種：ブナ	10-21	漆9

第22図　2区　土壙断面図（近世）、及びSK3822土壙出土遺物

3・4区

柱列跡、掘立柱建物跡、井戸跡、河川跡、溝跡、土壙、小溝状遺構を検出した（第23図）。2区西側の微高地に近い3区東側（特にSD3740南北溝跡東側）は遺構が多いが、井戸跡、溝跡、土壙が主体である。西側は次第に遺構が少なくなり、4区にはSE3701井戸跡とSD3704溝跡があるのみである。

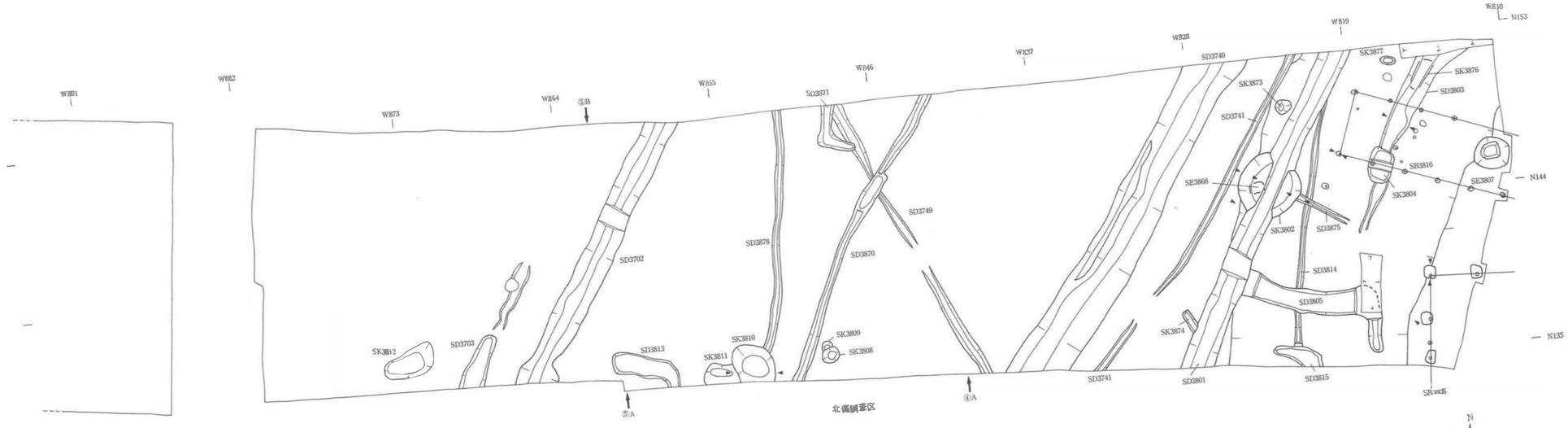
A. 古代

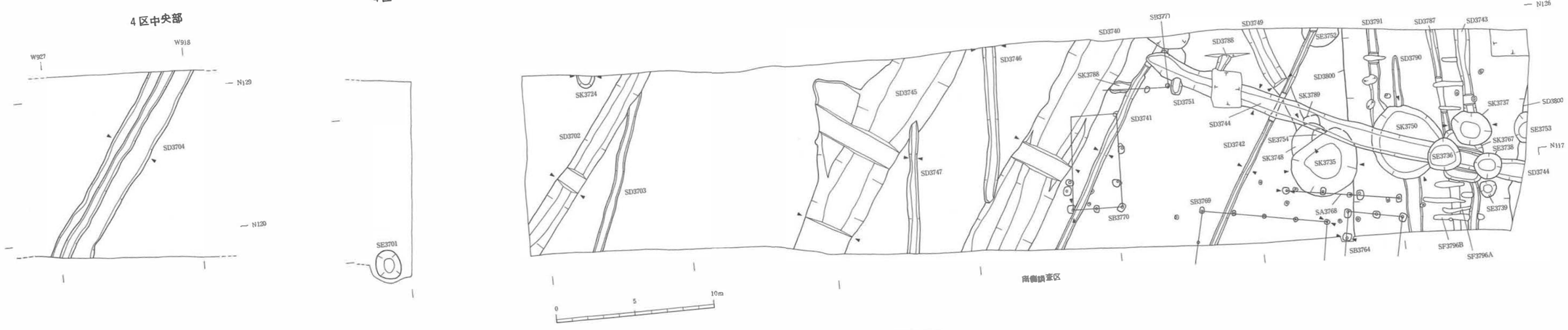
掘立柱建物跡3棟、井戸跡5基、河川跡1条、溝跡14条、土壙14基のほか、小溝状遺構がある。

〈掘立柱建物跡〉

【SB3770建物跡】（第23・24図）

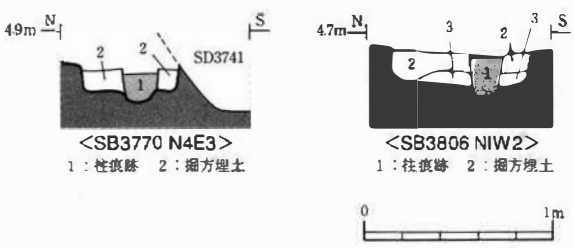
南側調査区で検出した桁行3間、梁行2間の建物跡で、SD3740・3741溝跡より古い。柱穴は6個検出し、すべてで径20cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は桁行が東側柱列で総長5.6m、柱間寸法は南から1.6m、1.6m、2.0m、梁行が南妻で総長3.2m、柱間寸法は東から1.7m、1.5mである。方向は東側柱列でN－3°－Eで、建物跡の西側約5mのところにあるSD3746溝跡とほぼ平行する。柱穴は長辺が50cmの隅丸長方形で、深さは深いもので25cmある。埋土は地山砂ブロックを多く含む黄灰色シルトである。遺物は出土していない。





第23図　3区　遺構配置図

【SB3806建物跡】（第23・24図）



第24図　3区　建物跡柱穴断面図（古代）

北側調査区で建物跡の北西部を検出した。南北２間、東西１間以上の建物跡で、SD3800河川跡より新しい。柱穴は４つ検出し、すべてで径20㎝ほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は南北が西側柱列で総長4.6m以上、柱間寸法は北から2.4m、2.2m、東西が北側柱列で総長2.6m以上である。方向は西側柱列でN－6°－Eである。柱穴は長辺が65～70㎝の隅丸長方形で、深さは深いもので25㎝ある。埋土は地山ブロックを多く含む灰黄褐色シルトや褐灰色粘土質シルトである。

遺物は柱痕跡から土師器甕、須恵器坏・甕、柱穴から須恵器坏・甕が少量出土している。

〈井戸跡〉

３区東側に集中する。平面形はSE3868を除いて楕円形である。SE3754では井戸側、SE3868では底面で曲物を検出したが、それ以外は素堀りの井戸跡である。

【SE3736井戸跡】（第23・26図）

南側調査区で検出した。SD3800河川跡、SD3784溝跡、SK3750・3767土壙より新しく、SD3744より古い。規模は長軸が2.2m、短軸が2.1mである。断面形は漏斗状で、深さは80㎝ある。堆積土は砂を互層状に含む黒色や黒褐色の砂質シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕・壺、赤焼土器坏・高台坏・皿、丸・平瓦が出土している。須恵器坏には底部の特徴が回転糸切無調整で、「大」とみられる文字を墨書したものがある（第26図１）。また、須恵器壺には内面に漆が付着したものがある。

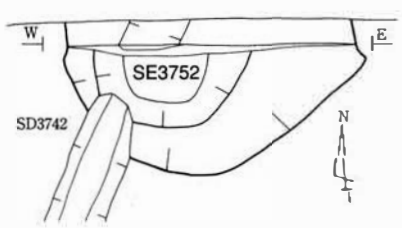
【SE3752井戸跡】（第25・26図）

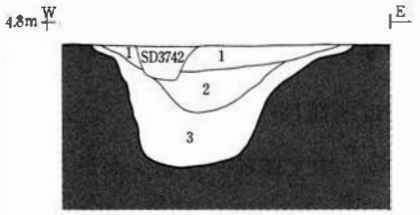
南側調査区の北壁で南半分のみを検出した。SD3742溝跡より古い。規模は東西が2.4m、南北が1.2m以上である。断面形は漏斗状で、深さは95㎝ある。堆積土は上層（１・２層）と下層（３層）に大別できる。下層は地山砂と互層をなす灰色粘土質シルト、上層は地山砂小ブロックを少し含むオリーブ黒色粘土質シルトや酸化鉄を多く含む黒褐色シルトで、上下層とも自然流入土である。

遺物は下層から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、平瓦、上層から土師器坏・高台坏・甕、須恵器甕、赤焼土器高台坏、丸・平瓦、砥石（第26図４）が出土している。赤焼土器坏には内外面にススが付着しているものがある（２）。

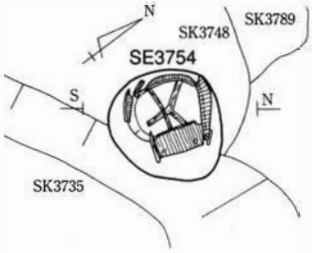
【SE3754井戸跡】（第25・26図）

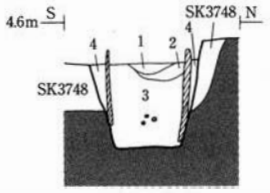
南側調査区で検出した。井戸側を据えた井戸跡で、SK3748土壙より新しく、SD3744溝跡、SK3735土壙より古い。掘方は長軸1.0m、短軸0.9mの楕円形である。断面形は下部がすぼまる円筒形で、深さは70㎝ある。井戸側は高さ75㎝ほど残存する。木を刳抜いて縦に割った湾曲した材（模式図①～④：モミ属）と通常の板材（⑤～⑦：ケヤキ）を用いて縦に組んだもので、側内下部には丸材をはめて抑さえとしている。内径は約60㎝である。なお、⑤には２ヶ所にほぞ穴が認められるが、側組とは無関係であり、転用材と思われる。堆積土は４層に分けられる。４層は掘方埋土で、地山ブロックを



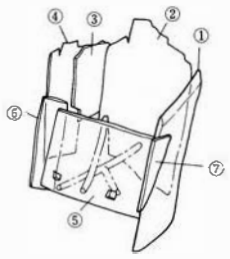


<SE3752>

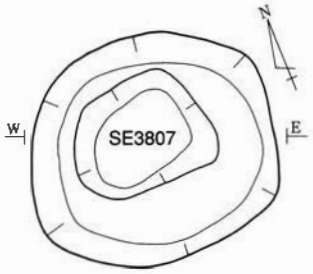


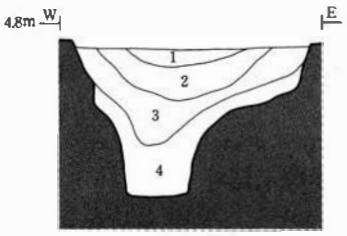


<SE3754>

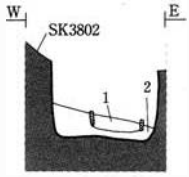


<SE3754井戸側模式図>
（縮尺：任意）

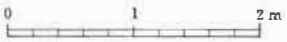




<SE3807>



<SE3868>



遺構	No	土性	土色	備考
SE3752	1	シルト	黒褐（10YR3/2）	酸化鉄を多く含む。
	2	粘土質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	地山ブロックをわずかに含む。
	3	粘土質シルト	灰（10Y4/1）	地山砂との互層。
SE3754	1	粘土質シルト	黄灰（2.5Y4/1）	地山ブロックを少し含む。〈側内堆積土〉
	2	砂質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	スクモを互層状に含む。〈側内堆積土〉
	3	粘土質シルト	オリーブ黒（7.5Y3/1）	砂との互層。〈側内堆積土〉
	4	粘土質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	地山ブロックを多く含む。〈掘方埋土〉
SE3807	1	シルト	黒褐（10YR3/2）	地山土を含む。
	2	シルト	黒（10YR2/1）	地山土、スクモを少し含む。
	3	シルト	黒褐（10YR3/1）	地山土を互層状に含む。
	4	粘土	黒褐（10YR3/1）	地山砂との互層。
SE3868	1	粗砂	暗緑灰（10GY4/1）	
	2	シルト質砂	緑灰（10GY5/1）	黒色粘土ブロックを含む。

第25図　3区　井戸跡（古代）

多く含むオリーブ黒色粘土質シルトである。1～3層は側内堆積土で、3層が砂と互層をなすオリーブ黒色粘土質シルト、1・2層が地山ブロックやスクモの混じるオリーブ黒色砂質シルトや黄灰色粘土質シルトである。3層は機能時の堆積土、1・2層は廃絶後の自然流入土とみられる。

遺物は掘方埋土から土師器坏、須恵器坏・甕、赤焼土器高台皿（第26図3）、曲物の蓋板（4）、側内底面から挽物高台皿（5）、側内堆積土から土師器坏、須恵器坏が少量出土している。

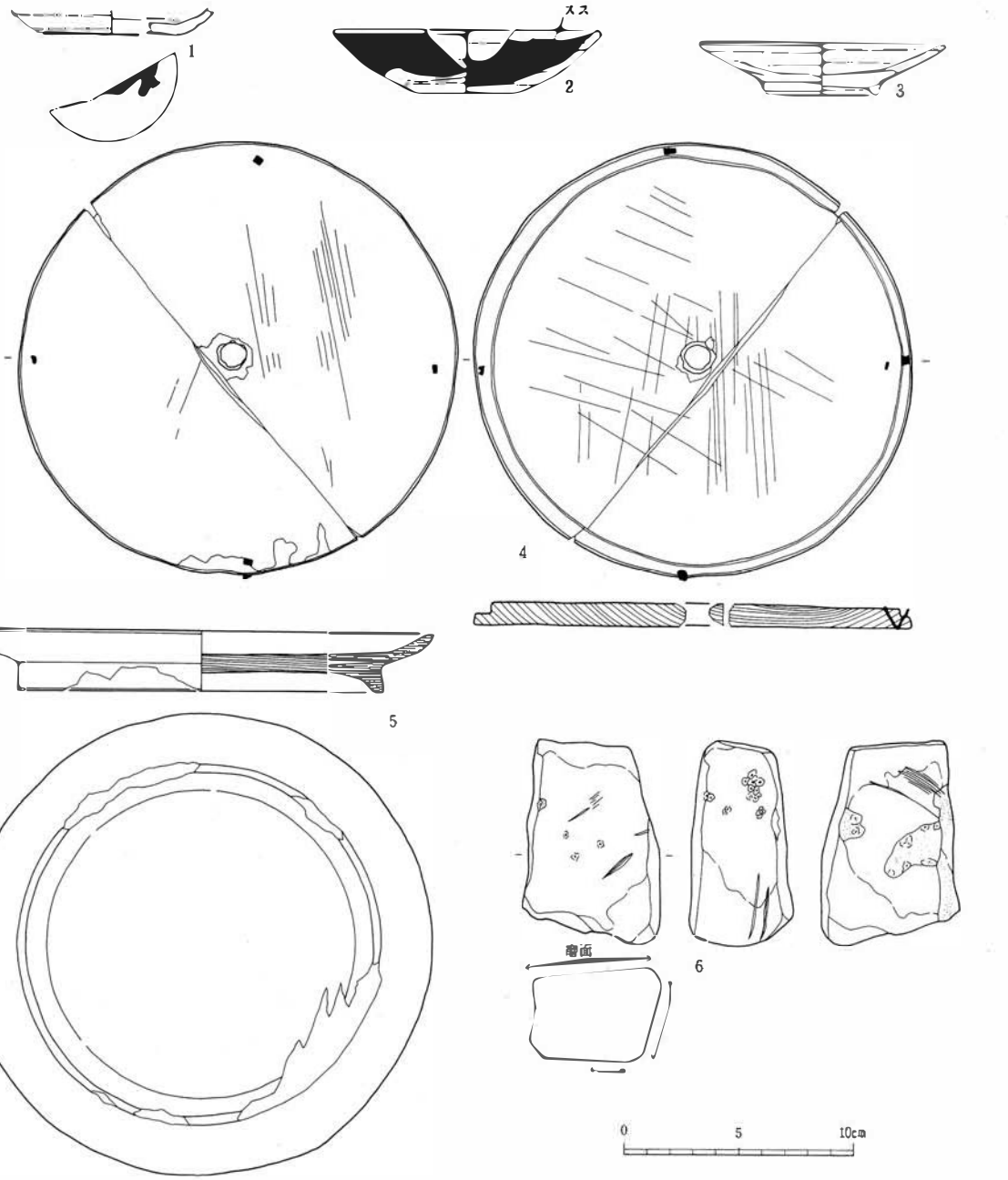
【SE3807井戸跡】（第25図）

北側調査区で検出した。SD3800河川跡より新しい。規模は長軸が1.9m、短軸が1.8mである。断面形は明瞭な中段のつく漏斗状で、深さは125cmある。堆積土は黒・黒褐色シルトや砂と互層をなす黒褐色粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器甕、須恵器坏・甕、赤焼土器高台坏がごく少量が出土している。

【SE3868井戸跡】（第25図）

北側調査区で検出した。SD3800河川跡より新しく、SD3801溝跡、SK3802土壙より古い。平面形は隅丸長方形で、規模は長辺が0.8m、短辺が0.6mである。断面形は筒形で、深さは120cmある。底面直上には径40cmの曲物（ヒノキ）が据えられていた。高さは6cmほどが残存しており、底板はない。堆積土は2層に分けられ、2層は黒色粘土ブロックを含む暗緑灰色シルト質である。1層は曲物内に堆



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SE3736・堆積土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り　底部に墨書「□大カ」	−	(5.8)	−	9 − 8	2
2	SE3752・下層	赤焼土器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）内外ともスス付着	(11.6)	4.4	2.8	7 − 15	5
3	SE3754・掘方埋土	赤焼土器・高台皿	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り→高台貼付→ロクロナデ	(10.8)	5.0	2.3	7 − 16	1
4	SE3754・掘方埋土	曲物・蓋板	径：19.0cm　厚さ：10cm　ほぼ中心に有孔（径1.1cm）木取り：柾目　樹種：ヒノキ	−	−	−	11 − 1	木6
5	SE3754・側内底面	挽物・高台皿	木取り：板目　樹種：ケヤキ	20.0	16.0	2.7	11 − 3	木5
6	SE3752・上層	砥石	長さ：8.9cm　幅：6.0cm　高さ：4.1cm　磨面：3　石材：アルコース砂岩	−	−	−	12 − 12	6

第26図　3区　SE3736・3752・3754井戸跡出土遺物

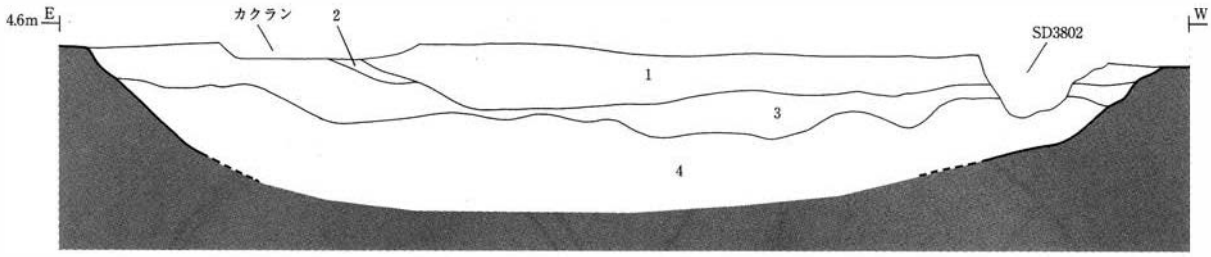
積した暗緑灰色粗砂で、自然流入である。

遺物は1層から土師器坏・甕、丸瓦がごく少量が出土しており、坏にはロクロ調整のものがある。

〈河川跡〉

【SD3800河川跡】（第23・27図）

3区東端で検出した。調査区内をゆるく曲がりながら南から北東に横断しており、重複するすべて



遺構	No.	土性	土色	備考	遺構	No.	土性	土色	備考
SD3800	1	粗砂	褐 (7.5YR4/4)	酸化が著しい。	SD3800	3	砂	暗灰黄 (2.5Y5/2)	
	2	シルト	にぶい黄 (2.5Y6/3)	3層の砂を互層に少し含む。		4	砂	暗青灰 (10BG4/1)	スクモ層を互層状に少し含む。グライ化。

第27図　3区　河川跡断面図（古代）

の遺構よりも古い。検出した長さは南側調査区で13.2m、北側で17.5mで、上幅は10～12mである。湧水と崩落のため底面まで掘下げなかったが、下幅は概ね6～8mと思われる。断面形は皿状で、深さは1.2m以上である。堆積土は褐色や暗灰黄色、暗青灰色の砂で、比較的短い期間に堆積したものとみられる。遺物は堆積土から種子がごく少量出土したのみである。

〈溝跡〉

【SD3704溝跡】（第23・28図）

4区の南側調査区で検出した南北方向に走る溝跡である。検出した長さは14.7mで、上幅が170～260cm、下幅は35～50cmである。段掘りされており、断面形は逆凸形を呈す。深さは深いところで60cmある。方向はN－36°－Eである。堆積土は2層に灰白色火山灰の2次堆積が認められる。他は、黒褐色やオリーブ黒色の粘土質シルト、灰色砂質シルトで自然流入土である。遺物は出土していない。

【SD3743溝跡】（第23・28図）

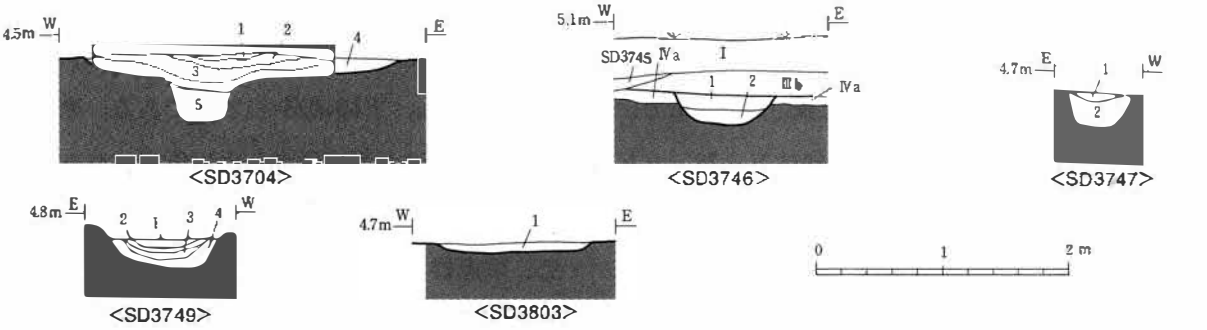
南側調査区東端で検出した南北方向に走る溝跡で、SD3800河川跡、SF3796小溝状遺構より新しい。検出した長さは12.5mで、上幅40～90cm、下幅30～50cmである。断面形はU字形で、深さは15cmある。方向はN－1°－Eである。堆積土は砂粒を含む黄灰色シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕・瓶、平・丸瓦が少量出土している。土師器はロクロ調整のものが主体で、坏には切離し後に底部から体部下端に手持ちヘラケズリ調整をするもの（第28図1）と、回転糸切り無調整のものがある（2）。

【SD3746溝跡】（第23・28図）

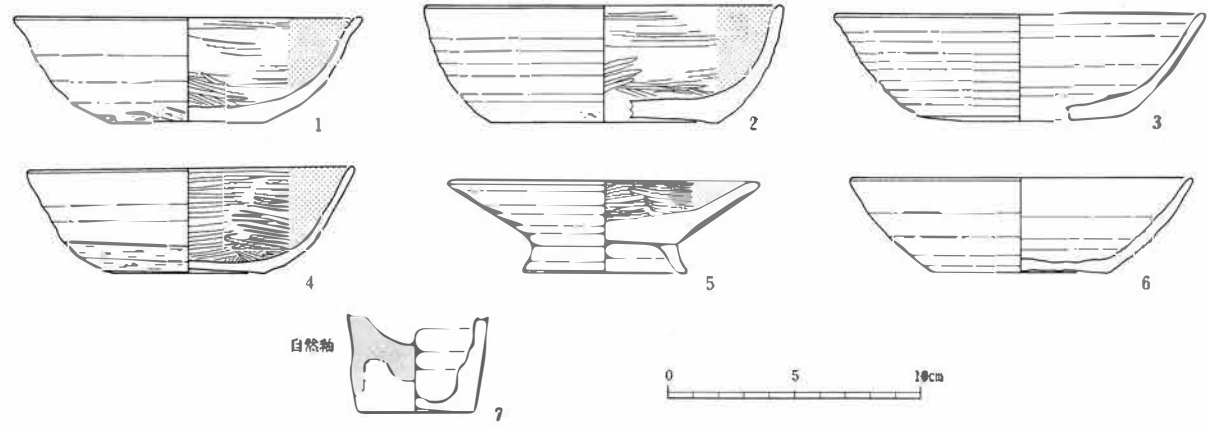
南側調査区の中央部で検出したほぼ南北方向にのびる溝跡である。後述のSD3747溝跡の約5m東を平行してのびており、SD3740溝跡より古い。検出した長さは9.7mで、上幅が60～80cm、下幅は35～45cmである。断面形はU字形で、深さは20cmある。方向はN－2°－Eである。堆積土は小さい灰白色火山灰ブロックを含む黒褐色シルトで、自然流入土である。灰白色火山灰は1層の下部に多くみられる。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕が出土している。土師器はロクロ調整のものが主体をしめる。須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のものがある（第28図3）。



遺構	No.	土性	土色	備考
SD3704	1	シルト	にぶい黄橙（10YR6/3）	灰白色火山灰粒を含む。
	2	火山灰	灰白色（10YR8/1）	（2次）
	3	粘土質シルト	黒褐（10YR3/2）	炭類を少し含む。
	4	粘土質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	地山土の流入土。
	5	砂質シルト	灰（5Y4/1）	地山粘土と地山砂の流入土。
SD3746	1	シルト	黒褐（7.5YR3/1）	砂粒と灰白色火山灰の小ブロックを含む。
	2	砂質シルト	黒褐（7.5YR3/1）	地山砂が多く流入した土。

遺構	No.	土性	土色	備考
SD3747	1	砂質シルト	灰黄褐（10YR4/2）	地山砂を少し含む。
	2	砂質シルト	黄灰（2.5Y4/1）	地山砂を多く取り込む。
SD3749	1	粘土質シルト	黄灰（2.5Y5/1）	酸化鉄を多く含む。
	2	粘土質シルト	暗灰（N3/）	炭を多く含む。
	3	粘土質シルト	灰（N4/）	地山砂を取り込む。
	4	砂質シルト	黄灰（2.5Y6/1）	地山砂を多く含む。
SD3803	1	砂質シルト	暗褐（10YR3/3）	地山砂と灰白色火山灰の小ブロックを含む。



No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SD3743・堆積土	土師器・坏	外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ　底：切離し不明→手持ちヘラケズリ　内黒　全体に摩滅	13.8	6.0	4.0	7－17	67
2	SD3743・堆積土	土師器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り？→手持ちヘラケズリ　内黒　全体に摩滅	(14.2)	(9.0)	4.6		68
3	SD3746・堆積土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り	(14.8)	(8.0)	4.3	7－18	75
4	SD3803・堆積土	土師器・坏	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ　底：切離し不明→回転ヘラケズリ　内黒	13.5	6.1	4.2	8－1	120
5	SD3803・堆積土	土師器・高台皿	外：ロクロナデ　底：切離不明→高台貼付→ロクロナデ　内黒	12.4	6.5	3.7	8－2	121
6	SD3803・堆積土	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り	(13.6)	7.0	3.8	8－3	123
7	SD3803・堆積土	須恵器・壺	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り　外面に自然釉。歪み大きい。胎C。	－	4.6	－	8－4	122

第28図　3・4区　溝跡断面図（古代）、及びSD3743・3746・3803溝跡出土遺物

【SD3747溝跡】（第23・28図）

前述のSD3746溝跡の約5m西を平行してのびる溝跡で、SD3745溝跡より古い。検出した長さは8.4mで、上幅が45～70cm、下幅は25～45cmである。断面形は逆台形で、深さは25cmある。方向はN－4°－Eである。堆積土は地山砂を含む灰黄褐・黄灰色シルトで、自然流入土である。遺物は出土していない。

【SD3749溝跡】（第23・28図）

東部から中央部で検出した南北方向に走る溝跡で、SD3742・3744・3870・3871溝跡、SK3748・3789土壙より古い。検出した長さは南側調査区で7.3m、北側で17.5mで、総長は35.2m以上ある。上幅は30～120cm、下幅は20～55cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで35cmある。方向はN－24°－Wである。堆積土は炭を含む黄灰・灰色粘土質シルトや地山砂を含む黄灰色砂質シルトで、自然流入土である。遺物は出土していない。

【SD3803溝跡】（第23・28図）

北側調査区の東端で検出した南北方向にのびる溝跡で、SD3800河川跡、SK3876土壙より新しく、SK3804土壙より古い。検出した長さは11.9mで、上幅は35～150cm、下幅は25～120cmである。断面形は皿状で、深さは10cmある。方向はN－28°－Eである。堆積土は上面に灰白色火山灰ブロックを含む暗褐色砂質シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・高台皿（第28図５）・甕、須恵器坏・甕・壺、赤焼土器坏・高台坏が出土している。土師器はロクロ調整のものが主体で、坏には切離し後に底部から体部下端に回転ヘラケズリ調整をするものがある（４）。須恵器には底部がヘラ切り後ナデ調整の坏（６）のほか、平城宮の調査で壺Ｇと分類される体部が細長く、底部に回転糸切り痕跡が残る小型長胴の壺（７）がある。

〈土壙〉

平面形は楕円形が主体である。なかには長軸が3.5mを越える規模の大きいもの（SK3735・3750・3802）もある。

【SK3724土壙】（第23・29図）

南側調査区の西端で南半分を検出した。平面形は直径110cmほどの円形とみられる。断面形は皿状で、深さは40cmである。堆積土は２層に灰白色火山灰の１次堆積が認められる。ほかは地山土ブロックが混じる黄灰色や灰色の粘土質シルトで、自然流入土である。遺物は出土していない。

【SK3735土壙】（第23・29・30図）

南側調査区の東部で検出した。SE3854井戸跡、SD3800河川跡、SK3748土壙より新しく、SA3768柱列跡、SD3744溝跡より古い。平面形は楕円形で、規模は長軸が440cm、短軸が350cmである。断面形は逆台形で、深さは100cmある。堆積土は上層（１層）と下層（２・３層）に大別できる。下層はオリーブ黒色の粘土や粘土質シルトで、自然流入土である。上層は地山ブロックを少し含む黒色シルトである。

遺物は下層から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏（第30図２）・高台坏、丸瓦、上層から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏が出土している。下層出土の土師器坏には底部が回転糸切り無調整で、墨書が認められるものがある（１）。

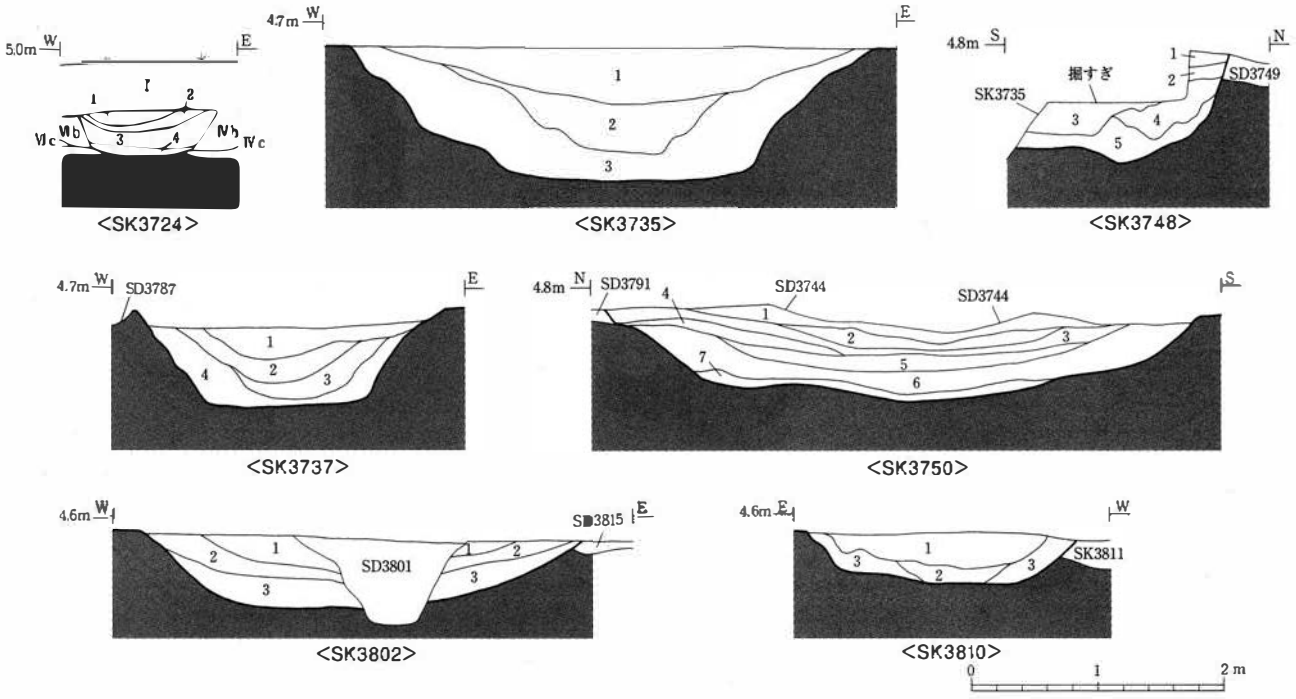
【SK3737土壙】（第23・29図）

南側調査区の東部で検出した楕円形の土壙で、SD3800河川跡、SD3743溝跡、SK3767土壙より新しい。規模は長軸260cm、短軸220cmである。断面形は逆台形で、深さは70cmある。堆積土は黒褐色やオリーブ黒色の砂質シルトや、黒色粘土質シルト、暗緑灰シルト質砂で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器高台坏、赤焼土器坏が少量出土している。

【SK3748土壙】（第23・29図）

南側調査区の東部で検出した。SD3749溝跡、SK3789土壙より新しく、SE3754井戸跡、SK3735土壙より古い。平面形は楕円形で、規模は長軸が250cm、短軸が180cm以上である。断面形は逆台形で、深さは75cmある。堆積土は上・中・下層に大別できる。下層（５層）はスクモを含むオリーブ黒色粘土質シルト、中層（２～４層）は地山ブロックを多量に含む暗灰黄色シルト質粘土やオリーブ黒色粘



遺構	No	土性	土色	備考
SK3724	1	シルト	褐灰（10YR6/1）	灰白色火山灰の粒を含む。
	2	火山灰	灰白（10YR8/1）	（1次）
	3	粘土質シルト	黄灰（2.5Y4/1）	4層の土を少し取り込む。
	4	粘土質シルト	灰（N4/）	地山土ブロックを多く含む。
SK3735	1	シルト	黒（10YR2/1）	地山土ブロックを少し含む。
	2	粘土	オリーブ黒（5Y3/1）	
	3	粘土質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	地山土との互層。
SK3737	1	砂質シルト	黒褐（7.5YR3/1）	酸化鉄を多く含む。
	2	粘土質シルト	黒（7.5Y2/1）	砂粒を少し含む。
	3	砂質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	グライ化。
	4	シルト質砂	暗緑灰（10GY3/1）	砂と3層の土が互層状に堆積。グライ化。
SK3748	1	粘土質シルト	黒褐（2.5Y3/2）	
	2	シルト質粘土	暗灰黄（2.5Y4/2）	地山土ブロック含む。
	3	粘土質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	地山土を多く含む。
	4	粘土質シルト	オリーブ褐（2.5Y4/3）	地山主体。黒褐色土ブロックを含む。
	5	粘土質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	有機物を含む。

遺構	No	土性	土色	備考
SK3750	1	シルト	暗灰黄（2.5Y5/2）	砂粒、炭粒、酸化鉄を含む。
	2	シルト質砂	灰黄（2.5Y6/2）	3層の土と砂との互層。炭粒含む。
	3	シルト	黒褐（10YR3/1）	砂粒と炭粒を含む。
	4	シルト質砂	灰黄（2.5Y6/2）	3層の土と砂との互層。炭粒含む。
	5	粘土質シルト	黒褐（2.5Y3/1）	均質な粘性の強い土。
	6	砂質シルト	オリーブ黒（5Y3/1）	5層の土と砂との互層。炭粒少し含む。
	7	シルト質砂	暗緑灰（10GY3/1）	グライ化。
SK3802	1	粘土質シルト	黒（10YR2/1）	地山土を含む。土器片を多く含む。
	2	粘土	暗褐（10YR3/3）	
	3	粘土	暗オリーブ（5Y4/3）	地山砂との互層。
SK3810	1	粘土	黒褐（10YR3/1）	灰白色火山灰のしみこみ有り。
	2	粘土	黒褐（10YR3/1）	砂を互層状に含む。
	3	粘土	褐灰（10YR4/1）	地山砂ブロックを含む。

第29図　3区　土壙断面図（古代）

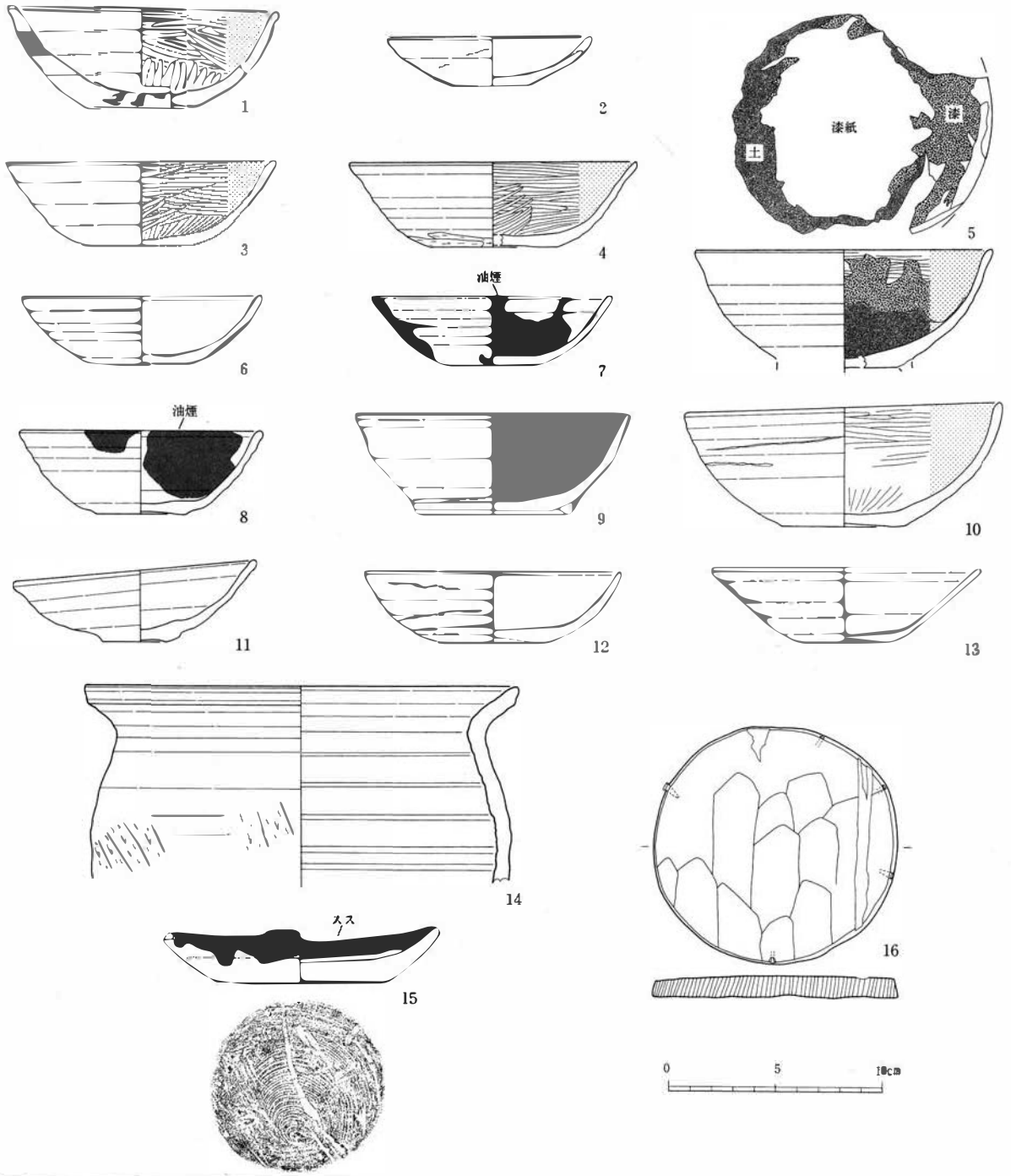
土質シルト、上層（1層）は黒褐色粘土質シルトで、中層は人為的に埋め戻されている。上層と下層は自然流入土である。

遺物は上層から土師器坏、須恵器坏・甕が少量出土している。須恵器坏には底部がヘラ切り無調整のものがある。

【SK3750土壙】（第23・29・30図）

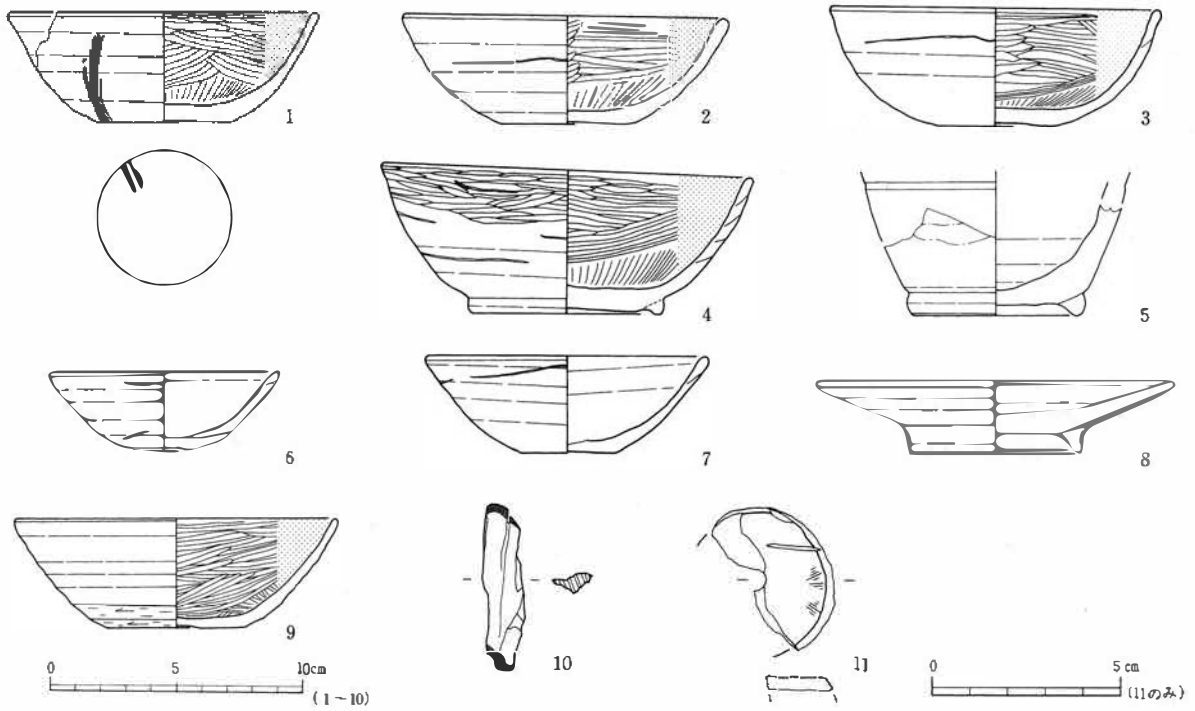
南側調査区の東部で検出した。SD3800河川跡、SD3790・3791溝跡、SK3767土壙より新しく、SE3736井戸跡、SD3744溝跡より古い。平面形は楕円形で、規模は長軸が450cm、短軸が440cmである。断面形は皿状で、深さは75cmある。堆積土は上層（1～4層）と下層（5～7層）に大別できる。下層は暗緑灰シルト質砂や砂と互層をなす黒褐色粘土質シルト、上層は灰黄色シルト質砂と互層をなす暗灰黄色や黒褐色のシルトで、いずれも自然流入土である。

遺物は下層から土師器坏・高台坏・高台埦・甕、須恵器坏・甕・壺、赤焼土器坏・高台坏、平瓦、曲物の底板（第30図16）、漆紙、上層から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕、赤焼土器



No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SK3735・下層	土師器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　体部に正位で墨書「□」 内黒	(12.7)	5.4	4.7	8－5	24
2	SK3735・下層	赤焼土器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	9.6	3.4	2.3	8－6	25
3	SK3750・下層	土師器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	(12.7)	4.8	4.0	8－8	29
4	SK3750・下層	土師器・坏	外：ロクロナデ　底：切離し不明→手持ちヘラケズリ　内黒	(13.4)	(5.8)	4.0		30
5	SK3750・下層	土師器・高台椀	外：ロクロナデ　底：回転糸切り→高台貼付→ロクロナデ　内黒　内面に漆紙付着	(14.0)	－	－	8－7	31
6	SK3750・下層	赤焼土器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	(11.2)	4.4	3.2	8－9	37
7	SK3750・下層	赤焼土器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）内外面に油煙付着	(11.2)	4.7	3.3	8－11	36
8	SK3750・下層	赤焼土器・坏	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内外面に油煙付着	(11.4)	4.2	3.9	8－10	35
9	SK3750・下層	赤焼土器・高台坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り→高台貼付　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	(12.9)	7.5	4.7	8－12	38
10	SK3750・上層	土師器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒	14.9	5.9	5.6	8－13	39
11	SK3750・上層	赤焼土器・坏	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り→ナデ	11.5	3.6	3.4	8－14	42
12	SK3750・上層	赤焼土器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	(12.0)	4.8	3.4	8－15	44
13	SK3750・上層	赤焼土器・坏	内外：ロクロナデ　底：回転糸切り　歪み大きい。	12.6	4.4	3.5	8－16	43
14	SK3750・上層	土師器・甕	内：ロクロナデ　外：ロクロナデ→手持ちヘラケズリ	(20.4)	(9.2)	－	9－6	41
15	SK3750・上層	土師器・甕	内外：ロクロナデ、油煙付着　底：回転糸切り→手持ちヘラケズリ　焼成前に一本線状の刻書	－	8.0	2.5		40
16	SK3750・下層	曲物・底板	径11.5cm　厚さ1.0cm　木取：柾目　樹種：モミ属	－	－	－	11－4	木13

第30図　3区　SK3735・3750土壙出土遺物



No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	SK3802・下層	土師器・坏	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 底～体部に墨書 内黒	(12.4)	5.2	4.4	8－17	93
2	SK3802・上層	土師器・坏	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 摩滅著しい 内黒	14.0	5.3	4.3	8－18	101
3	SK3802・上層	土師器・坏	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内黒	(13.2)	4.6	4.6	8－19	92
4	SK3802・上層	土師器・椀	外：ロクロナデ→ヘラミガキ 底：回転糸切り→高台貼付→ロクロナデ 内黒	14.8	7.6	5.9	8－20	94
5	SK3802・下層	須恵器・瓶	外：回転ヘラケズリ→ロクロナデ 底：切離し不明→高台貼付→ナデ 内：ロクロナデ 体部にアテ布の痕跡	－	(6.8)	－		98
6	SK3802・上層	赤焼土器・坏	外：ロクロナデ 底：回転糸切り 内：ロクロナデ（コテ仕上げ）	(9.2)	3.6	3.1		97
7	SK3802・上層	赤焼土器・坏	内外：ロクロナデ 底：回転糸切り	(11.2)	4.2	3.8	9－1	96
8	SK3802・下層	赤焼土器・高台皿	内外：ロクロナデ 底：切離し不明→高台貼付→ロクロナデ 全体に摩滅	(14.2)	(6.8)	3.9	9－2	99
9	SK3810・上層	土師器・坏	外：ロクロナデ→回転ヘラケズリ 底：切離し不明→回転ヘラケズリ 内黒	(12.8)	5.5	4.3	9－3	102
10	SK3802・上層	付け木	長さ：6.6cm 幅：1.6cm 厚さ：0.8cm 木取：柾目 樹種：アカマツ	－	－	－	11－6	木21
11	SK3767・堆積土	紡錘車	上部径（1.8）cm 孔径（0.5）cm 厚さ（0.4）cm 石材：片岩？	－	－	－	12－19	28

第31図　3区　SK3767・3802・3810土壙出土遺物

坏・高台坏、丸・平瓦が出土している。上・下層とも土師器と赤焼土器の坏の出土量が多い。土師器はロクロ調整のものがほとんどで、坏は口径に比して底径が小さく、体部が底部から内湾気味に立ち上がるものが多い。底部は回転糸切り無調整のもの（3・10）が主体をしめるが、再調整が施されたものもある（4）。高台埦には内面に漆紙が付着したものがある（5）。赤外線テレビカメラを利用したが、墨痕は観察されなかった。甕には長胴形のものがある（14）。赤焼土器坏には口径が12cm前後で、体部が底部から内湾気味に立ち上がるもの（6～8・11・12）と、直線的に外傾するものがある（13）。

【SK3802土壙】（第23・29・31図）

北側調査区の東部で検出した。SE3868井戸跡、SD3800河川跡、SD3875溝跡より新しく、SD3801溝跡より古い。平面形は楕円形で、規模は長軸350cm、短軸330cmである。断面形は皿状で、深さは60cmある。堆積土は上層（1層）と下層（2・3層）に大別され、下層は暗褐色粘土と砂の互層で自然流入土である。上層はにぶい黄褐色土の混じる黒色粘土質シルトで、遺物が多く含まれている。

遺物は下層から土師器坏・甕、須恵器坏・高台坏・甕・瓶、赤焼土器坏・高台皿、瓦、上層から土師器坏・高台坏・高台埦・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏・高台皿、瓦、付け木（第31図10）が出土

している。上・下層とも土師器と赤焼土器の坏の出土量が多く、特に上層のものに図化可能な資料がある。土師器はロクロ調整のものがほとんどで、坏は口径に比して底径が小さく、体部が底部から内湾気味に立ち上がるものが多い。底部は回転糸切り無調整のものが主体をしめる（1～3）。1の底部から体部にかけては墨痕も認められる。高台埦には外面の口縁部周辺がヘラミガキ調整されたものがある（4）。赤焼土器坏には口径が10cm以下のものがみられる（6・7）。また、瓦には凹面に「下」とヘラ書きしたものがある（図版9－11）。

【SK3810土壙】（第23・29・31図）

北側調査区の中央部で北半分を検出した。SD3878溝跡、SK3811土壙より新しい。平面形は楕円形で、規模は東西が265cm、南北が185cm以上である。断面形は皿状で、深さは40cmある。堆積土は黒褐色や褐灰色の粘土で、自然流入土である。

遺物は底面から体部下端が回転ヘラケズリ調整された土師器坏（第31図9）が出土している。そのほか堆積土から須恵器甕がごく少量出土している。

〈小溝状遺構〉（第23図）

南側調査区の東端でSF3796を検出した。東西方向の小溝状遺構で2時期（A・B）あるが、その新旧関係は不明である。SD3800河川跡、SD3787溝跡より新しく、SD3743溝跡より古い。検出した溝の数はAが2条、Bが6条である。残りのよいBをみると、溝の間隔は1.1～1.5mで、各溝の長さは最も長いもので3.2mである。幅は20～40cmで、断面形はU字形、深さは深いところで15cmある。堆積土は地山砂の混じる黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

B．近世

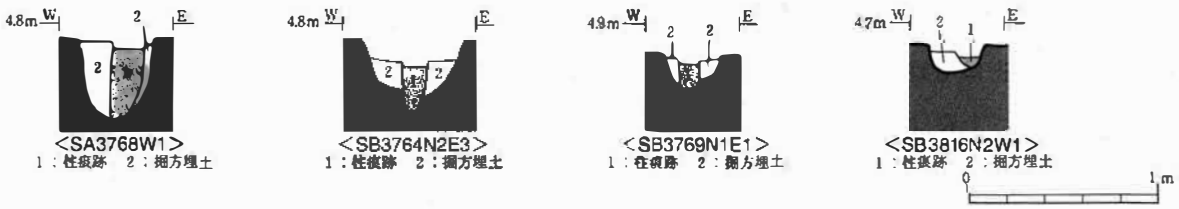
遺構には柱列跡1条、掘立柱建物跡3棟、井戸跡3基、溝跡8条がある。

〈柱列・掘立柱建物跡〉

【SA3768柱列跡】（第23・32図）

南側調査区で検出した東西3間の柱列跡で、SD3800河川跡・SK3735土壙より新しい。総長は7.2mで、柱間寸法は東から2.5m、2.4m、2.3mである。方向はE－9°－Sである。検出した4個の柱穴すべてで径15cmほどの柱痕跡を確認した。柱穴は長軸が40～60cmの隅丸長方形で、深さは深いもので45cmある。埋土は地山土ブロックと炭粒を含む黒褐色シルトである。

遺物は柱穴から土師器坏・甕、須恵器坏、赤焼土器高台坏がごく少量出土している。



第32図　3区　柱列・建物跡柱穴断面図（近世）

【SB3764建物跡】（第23・32図）

南側調査区で建物跡の北端を検出した。東西２間、南北１間以上の建物跡で、SD3800河川跡より新しい。柱穴は４個検出し、すべてで径20cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は東西が北側柱列で総長3.5m、柱間寸法は東から1.7m、1.8m、南北が西側柱列で総長1.7m以上である。方向は南側柱列でE－9°－Sである。柱穴は長辺が50cmの隅丸長方形で、深さは深いもので40cmある。埋土は地山砂ブロックを少し含む黒褐色シルトである。遺物は出土していない。

【SB3769建物跡】（第23・32図）

南側調査区で建物跡の北半を検出した東西４間、南北１間以上の東西棟である。柱穴は６個検出し、５個で径10cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は桁行が北側柱列で総長7.9m、柱間寸法は西から2.0m、1.9m、2.0m、2.0m、梁行が西妻で総長2.1m以上である。方向は南側柱列でE－9°－Sである。柱穴は長辺が20～35cmの隅丸長方形で、深さは深いもので15cmある。埋土は地山ブロックを少し含む黒色シルトである。遺物は出土していない。

【SB3816建物跡】（第23・32図）

北側調査区で建物跡の西半を検出した。東西５間以上、南北１間の東西棟で、SD3800河川跡・SK3804土壙より新しい。柱穴は10個検出し、すべてで径10cmほどの柱痕跡を確認した。建物の規模は桁行が南側柱列で総長9.6m以上、柱間寸法は西から2.0m、1.9m、1.8m、2.0m、1.9m、梁行が西妻で総長3.6mである。方向は南側柱列でE－19°－Sである。柱穴は長軸が20～35cmの楕円形で、深さは深いもので15cmある。埋土は黒褐色シルトである。

遺物は柱痕跡から土師器甕、須恵器甕、柱穴から土師器坏がごく少量出土している。

〈井戸跡〉

SE3701のほかは３区東側に集中する。平面形は楕円形で、構造はすべて素掘りである。

【SE3701井戸跡】（第33図）

４区の南東隅で検出した井戸跡で、規模は長軸が1.9m、短軸1.6mである。断面形は下部がすぼまる円筒形で、深さは90cmある。堆積土はスクモを含む黒色やオリーブ黒色の粘土で、自然流入土である。遺物は出土していない。

【SE3738井戸跡】（第33図）

南側調査区で検出した。SD3800河川跡、SD3744溝跡、SK3767土壙より新しい。規模は長軸が1.8m、短軸が1.7mである。断面形は漏斗状で、深さは80cmある。堆積土はオリーブ黒色砂質シルトや黒色粘土質シルト、砂を互層状に含む黒褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器甕がごく少量出土している。

【SE3739井戸跡】（第33図）

南側調査区で検出した。SD3800河川跡より新しい。規模は長軸が1.1m、短軸が1.0mである。断面形は明瞭な中段のつく漏斗状で、深さは80cmある。堆積土は上層（１～３層）と下層（４・５層）に大別できる。下層は黒褐色粘土質シルトと暗緑灰色砂、上層は砂・粘土・スクモが互層をなす黒褐色シルトや粘土質シルトで、上・下層とも自然流入土である。

【SD3702溝跡】（第23・34図）

西部で検出した南北方向に走る溝跡で、SD3703溝跡より新しい。検出した長さは南側調査区で13.5m、北側で17.0mで、総長は44.0m以上ある。上幅は110～170cmで、下幅は40～70cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで55cmある。方向はN－32°－Eである。堆積土は酸化鉄や砂を含む黒色や黒褐色、オリーブ黒色の粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器甕、平・丸瓦が少量出土している。

【SD3740溝跡】（第23・34図）

東部で検出した南北方向に走る溝跡でSD3746溝跡、SK3788土壙より新しい。検出した長さは南側調査区で16.9m、北側で22.0mで、総長は48.6m以上ある。上幅は240～370cm、下幅は85～190cmである。断面形はU字形で、段がつく場所もある。深さは深いところで80cmある。方向はN－34°－Eである。堆積土は砂を含む褐灰色シルトや黒・黒褐色粘土質シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から青磁碗（図版9－13）、磁器茶碗（第34図1）、陶器碗のほか、土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・壺・瓶、赤焼土器坏・高台坏、平・丸瓦、永楽通宝（8）、砥石が出土している。陶器茶碗には瀬戸美濃の天目茶碗がある（図版10－9）。

【SD3741溝跡】（第23・34図）

上述のSD3740溝跡の1～2.5m東に沿う溝跡で、SB3770建物跡、SK3788土壙より新しく、SD3744溝跡より古い。検出した長さは南側調査区で10.3m、北側で21.0mで、総長は47.7m以上ある。上幅は30～60cm、下幅は20～30cmである。断面形はU字形で、深さは20cmある。方向はN－32°－Eである。堆積土は地山砂を含む黒褐色シルトや黄灰色砂質シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器坏、平瓦が出土している。

【SD3742溝跡】（第23・34図）

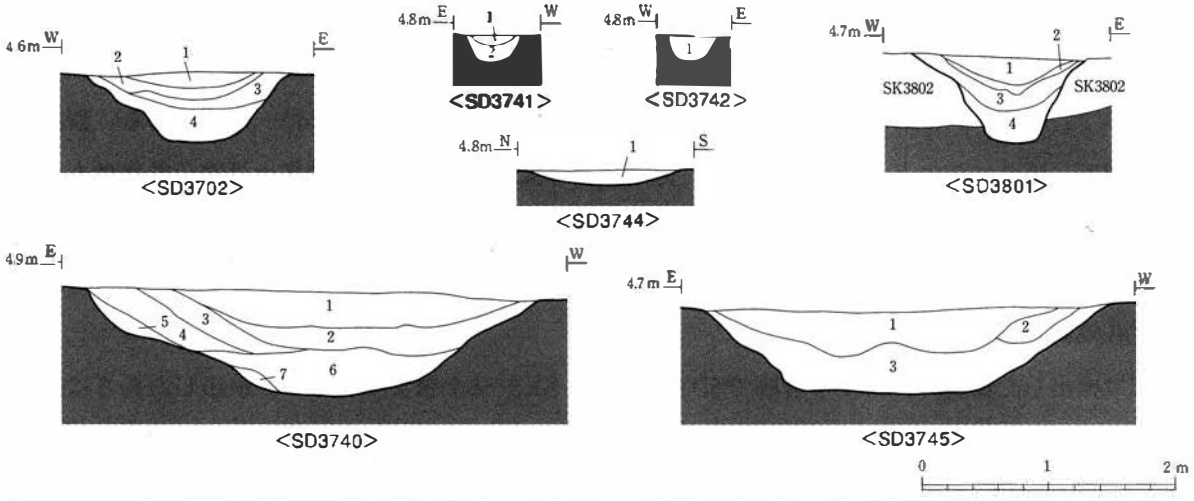
南側調査区の東部で検出した南北方向に走る溝跡で、SE3752井戸跡、SD3749溝跡より新しく、SD3744溝跡より古い。検出した長さは15.2mで、上幅が35～45cm、下幅は15～20cmである。断面形はU字形で、深さは20cmある。方向はN－31°－Eで、堆積土は地山土粒を少し含む黒褐色シルトの自然流入土である。

遺物は堆積土から陶器皿のほか、土師器坏・甕、須恵器坏・甕、赤焼土器高台坏、瓦が少量出土している。陶器茶碗には志野の菊皿がある（図版10－5）。

【SD3744溝跡】（第23・34図）

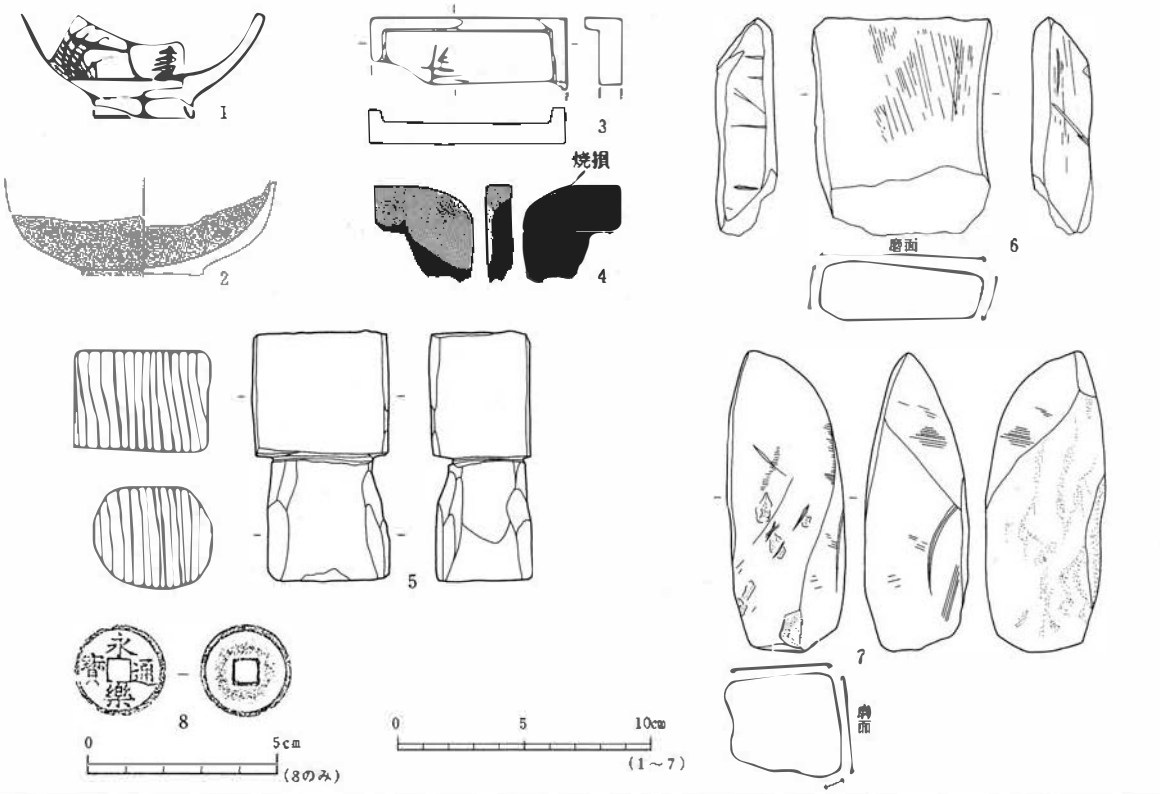
南側調査区の東部で検出した東西方向に走る溝跡である。調査区東端から中央部にかけてのび、SD3740溝跡の約1m手前で止まる。SE3736、SD3741・3742・3749・3751溝跡、SD3800河川跡、SK3750・3767・3789土壙より新しく、SE3738より古い。検出した長さは24.9mで、上幅は110～160cm、下幅は40～95cmである。断面形は皿状で、深さは15cmある。方向はE－22～28°－Sで、SD3740溝跡とは概ね直交に近い。堆積土は地山小ブロックが少し混じる黒褐色シルトで、自然流入土である。

遺物は堆積土から青磁碗（図版9－14）、陶器片のほか、土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・蓋・



遺構	No	土性	土色	備考
SD3702	1	粘土	黒褐（10YR3/2）	地山土小ブロックを少し含む。酸化鉄を含む。
	2	粘土	黒褐（10YR3/1）	酸化鉄を少し含む。
	3	粘土	黒（2.5Y2/1）	均質な土。
	4	粘土	オリーブ黒（5Y3/1）	地山砂を少し含む。グライ化。
SD3740	1	シルト	褐灰（7.5YR4/1）	砂粒を少し含む。
	2	粘土質シルト	黒（7.5YR1.7/1）	地山土小ブロックを少し含む。
	3	粘土質シルト	黒褐（7.5YR3/1）	砂を互層状に含む。
	4	粘土質シルト	黒（7.5YR2/1）	砂粒を少し含む。
	5	粘土	暗緑灰（10GY3/1）	地山小ブロックを少し含む。グライ化。
	6	砂質シルト	褐灰（10YR5/1）	地山土の流入土。
	7	砂質シルト	緑灰（10GY5/1）	6層がグライ化した土。

遺構	No	土性	土色	備考
SD3741	1	シルト	黒褐（10YR3/2）	地山砂粒を少し含む。
	2	砂質シルト	黄灰（2.5Y4/1）	地山砂を含む。
SD3742	1	シルト	黒褐（7.5YR3/1）	地山土粒を少し含む。
SD3744	1	シルト	黒褐（10YR3/1）	壁際と底面付近で地山小ブロックを少し取り込む。
SD3745	1	砂質シルト	黒褐（10YR3/2）	地山小ブロックを含む。
	2	シルト質砂	暗灰黄（2.5Y5/2）	汚れた地山の流入土。
	3	粘土	暗緑灰（10GY3/1）	均質な土。
SD3801	1	シルト	黒褐（10YR2/2）	
	2	砂質シルト	灰黄褐（10YR4/2）	
	3	砂質シルト	黒褐（10YR3/2）	
	4	粘土	オリーブ黒（5Y2/2）	砂を含む。グライ化。



No.	遺構・層位	種別	特徴	長さ	幅	厚さ	写真	登録
1	SD3740・堆積土	茶碗	染付。肥前。区画有草花文。高台部露胎。 底径（4.0）cm	−	−	−	9－17	201
2	SD3745・堆積土	漆器・椀	樹種：ブナ	−	−	−	10－19	漆1
3	SD3801・堆積土	砚	石材：凝灰岩or泥岩	(2.8)	7.8	1.5	12－10	115
4	SD3801・堆積土	漆器・椀	樹種：針葉樹 焼損	−	−	1.1	10－18	漆5
5	SD3801・堆積土	部材？	木取：柾目 樹種：スギ	9.9	5.4	4.0	11－5	木18
6	SD3801・堆積土	砥石	磨面：3 石材：砂岩	(8.6)	7.1	2.4	12－13	117
7	SD3745・堆積土	砥石	磨面：3 石材：凝灰岩	12.1	4.7	4.2		73
8	SD3740・堆積土	銭貨（永楽通宝）	明（1408年初鋳）外縁外径：2.4cm 外縁内径：2.1cm	−	−	−	12－1	207

第34図　3区　溝跡断面図（近世）、及びSD3740・3745・3801溝跡出土遺物

甕、赤焼土器坏、平・丸瓦が出土している。

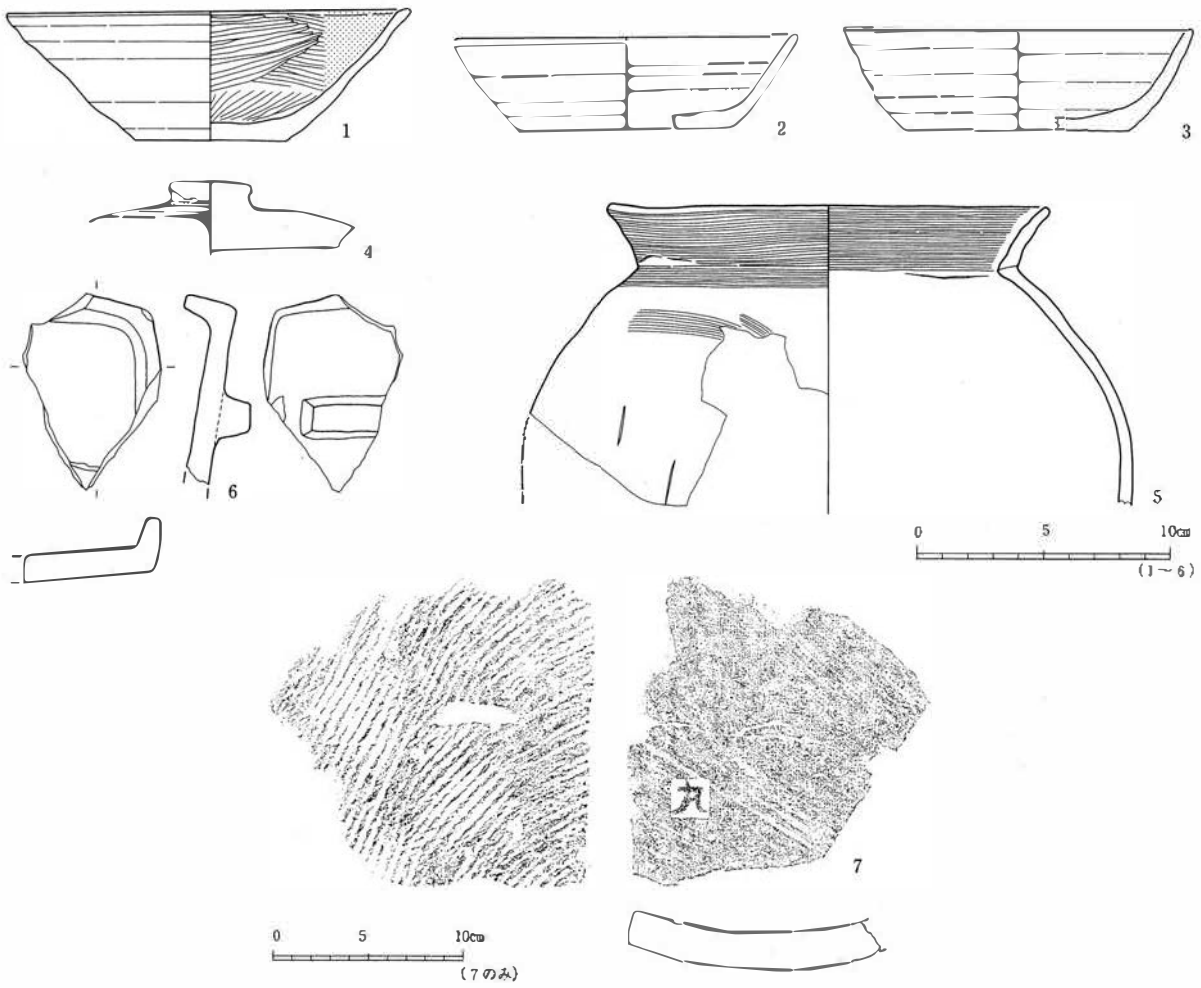
【SD3745溝跡】（第23・34図）

南側調査区の西部で検出した南北方向に走る溝跡で、SD3747溝跡より新しい。検出した長さは16.0mである。上幅は310～450cmだが、西側に約3mほど浅く張り出したところもある。下幅は150～220cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで65cmある。方向はN－36°－Eである。堆積土は上層（1層）と下層（2～4層）に大別できる。下層は暗灰黄色シルト質砂や暗緑灰色粘土で、自然流入土である。上層は地山ブロックを含む黒褐色シルトで、人為的に埋め戻されている。

遺物は堆積土から陶器擂鉢、漆器椀（第34図2）のほか、土師器坏・甕、須恵器坏・甕・瓶、丸瓦、砥石（7）が出土している。

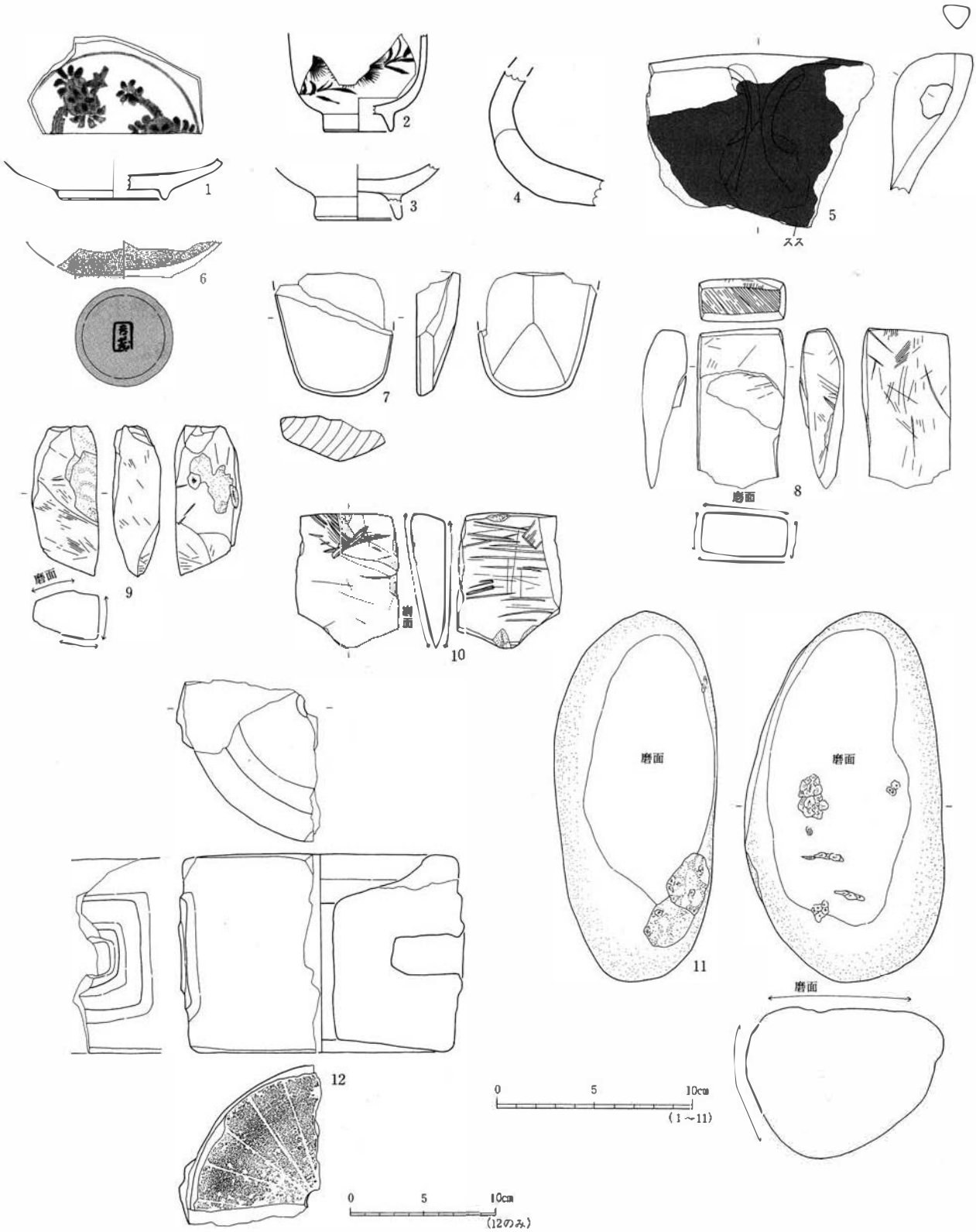
【SD3801溝跡】（第23・34図）

北側調査区の東部で検出した南北方向に走る溝跡で、SE3868井戸跡、SD3800河川跡、SD3805・



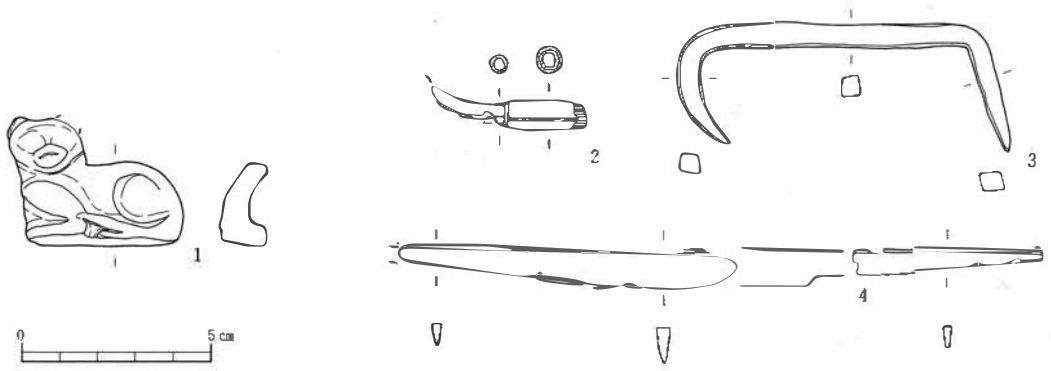
No.	遺構・層位	種別	特徴	口径	底径	器高	写真	登録
1	Ⅱc層	土師器・坏	外：ロクロナデ　底：回転糸切り　内黒　全体的に摩滅	16.0	6.0	5.1	9－4	135
2	I層（2区）	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(13.8)	(8.8)	4.0	9－5	84
3	I層（2区）	須恵器・坏	内外：ロクロナデ　底：ヘラ切り→ナデ	(13.6)	(8.6)	3.6		85
4	I層（3区）	須恵器・蓋	外：回転ヘラケズリ→ロクロナデ→つまみ貼付→ロクロナデ　内：ロクロナデ	－	－	－		164
5	SD3805・堆積土	土師器・甕	外：ヨコナデ、ヘラナデ→ナデ　内：ヨコナデ　全体的に摩滅	(17.6)	－	－	9－7	124
6	I層（2区）	風字硯	長さ：(7.8) cm　幅：(5.5) cm　高さ：(3.1) cm　調整：ヘラケズリ	－	－	－	9－9	83
7	pit4（2区）	平瓦	多賀城跡ⅡB類。　凹面に刻印「丸」A	－	－	－	9－10	80

第35図　その他の出土遺物1



No.	遺構・層位	種　別	特　徴	厚さ	幅	厚さ	写真	登録
1	I層（2区）	磁器・皿	染付。腰前。草花文。高台部露胎。　底径：(5.6) cm	－	－	－	9－19	151
2	I層（2区）	磁器・湯呑茶碗	染付。栗文。もしくは撫子文。高台部露胎。　底径：(3.6) cm	－	－	－	9－18	197
3	I層（3区）	陶器・碗	瀬戸美濃もしくは肥前。灰釉（明黄褐）。高台部露胎。　底径：(4.5) cm	－	－	－	10－6	165
4	SD3721・堆積土	陶器・甕	内外：ナデ　自然釉付着	－	－	－	10－14	60
5	II c層	陶器・内耳土鍋	無釉　内外：ナデ　スス多量に付着	－	－	－	10－13	137
6	I層	漆器・椀	外：赤漆　内・高台内：黒漆　高台内面に赤漆で「吉蔵」　樹種：ブナ	－	－	－	10－20	漆4
7	I層（2区）	下駄（歯固）	高さ2.3cm　木取：柾目　樹種：ハリギリ	(6.3)	(6.0)	－	11－7	木17
8	I層	砥石	磨面：5　石材：凝灰岩	(8.2)	4.5	2.3	12－14	170
9	I層	砥石	磨面：3　石材：凝灰岩	7.8	3.4	2.5		162
10	I層（2区）	砥石	磨面：2　石材：凝灰岩	6.9	5.3	1.7	12－15	82
11	II c層	すり石	磨面：2　石材：安山岩	19.0	10.1	7.8	12－17	142
12	I層	茶臼・上臼	上縁径：(18.8) cm　下端径：(18.0) cm　高さ：13.5cm　芯木孔径：1.5～2.0cm　挽手孔径：2.5cm	－	－	－	12－18	171

第36図　その他の出土遺物2



No.	遺構・層位	種別	特徴	写真	登録
1	I層（3区）	土製人形・猫	前後型合せの裏込き。中空　長さ：3.6cm　幅4.7cm　高さ：(1.8) cm残存　全体に摩滅	12－2	88
2	I層（2区）	煙管・雁首	河骨形。肩付。長さ：(4.1) cm　首部径：0.5cm　胴部径：0.8cm	12－5	205
3	I層（2区）	鎹	長さ：8.7cm　幅：3.4cm　厚さ：0.6cm	12－7	180
4	I層（2区）	刀子	刀身：長さ(9.0) cm　幅1.1cm　厚さ0.3cm　茎：長さ(5.0) cm　幅0.7cm　厚さ0.2cm	12－9	206

第37図　その他の出土遺物3

3814溝跡、SK3802・3874土壙より新しい。検出した長さは20.3mで、上幅は130～170cm、下幅は45～90cmである。断面形は逆台形で、深さは深いところで70cmある。方向はN－29°－Eである。堆積土は砂を含む黒褐色シルトやオリーブ黒色粘土で、自然流入土である。

遺物は堆積土から土師器坏・高台坏・甕、須恵器坏・甕・壺・瓶、赤焼土器坏・高台坏、平・丸瓦、木製品（第34図5）、櫛（4）、硯（3）、砥石（6）、石器剥片（図版12－20：玉髄）が出土している。

その他の出土遺物

上述した遺構以外や表土等の堆積土からも遺物が出土している。土師器、須恵器、赤焼土器、磁器、陶器、瓦、硯、漆器、木製品、土製品、鉄製品、石製品があり、その大部分は土師器、須恵器、赤焼土器がしめる。

土師器は坏・甕が多い。ロクロ調整のものが主体で、図化できるものには底部が回転糸切り無調整の坏がある（第35図1）。非ロクロ調整のものはごく少数であるが、甕が1点図化できた（5）。須恵器も坏・甕が多く、坏の底部はヘラ切り無調整のものが主体をしめる（2・3）。他には高台坏・蓋（3）・瓶が出土している。赤焼土器は坏・高台坏・高台皿の破片があるのみである。

磁器と陶器は出土量が少ない。総量でも整理用平箱で1箱ほどであり、破片資料がほとんどである。磁器には湯呑茶碗（第36図2）や肥前の皿（1）をはじめとした碗・皿の破片がある。陶器には瀬戸美濃の碗（第36図3）や天目茶碗（図版10－7・8）、唐津の皿（11）のほか、擂鉢（16）や大堀相馬の土瓶（12）がみられる。その他、内耳土鍋や在地のものとみられる甕（第36図4）も出土している。内耳土鍋（5）は耳部分の破片で、内外面には煤が激しく付着している。

瓦には平瓦と丸瓦があり、凹面に「丸」の刻印が捺された平瓦（第35図7）もみられる。硯では風字硯（6）が出土している。漆器には椀（第36図6）、木製品には下駄があり、下駄（7）は差歯のものである。土製品には猫の土人形（第37図1）、鉄製品には刀子（4）、鎹（3）、煙管がある。煙管（2）は火皿部分が欠損するが「河骨形」の雁首とみられる。肩付で、木質も少し残存している。石製品には砥石、磨石（第36図11）、茶臼がある。砥石（8～10）は小型で、凝灰岩を石材とするものが多い。茶臼（12）は安山岩製で、挽手穴には二重方形の飾り模様が施されている。

第Ⅲ章 考　察

本調査では掘立柱建物跡、井戸跡、墓跡、溝跡などの遺構を多数検出した。遺物は土師器、須恵器、赤焼土器など古代の土器を中心とし、ほかに近世の磁器、陶器などが出土している。以下、時代ごとに検討することにする。

A．古代

1．遺物

遺物には土師器、須恵器、赤焼土器、木製品、金属製品、石製品があるが、大部分は土師器、須恵器、赤焼土器である。ここでは土器の概要と特徴について図示したものを中心に述べる。

土器の特徴：土師器には非ロクロ調整（A類）とロクロ調整（B類）のものとがあるが、ほとんどがB類である。器種は坏、高台坏、高台埦、高台皿、甕があり、坏類と高台皿・埦の内面はヘラミガキ後に黒色処理されている。坏には口径に占める底径の割合が大きいBⅠ類（底径/口径：0.54～0.63）と、小さいBⅡ類（0.4前後）がある。BⅠ類は体部が底部から内湾気味に立ち上がり、そのまま口縁部に至る器形で、底部の切離し技法や調整は回転糸切り無調整のものと、切離し後に回転ヘラケズリ調整されるものとがある。BⅡ類の器形は、底部から直線的に外傾して口縁部に至るもの（a）、底部から内湾気味に立ち上がり体部が外傾して口縁部に至るもの（b）、底部から内湾気味に立ち上がりそのまま口縁部に至るもの（c）がある。底部は回転糸切り無調整のものが主体を占めるが、再調整が施されるものもみられる。

坏以外の器種は図示できた資料が少ない。高台埦は、体部が底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が少し外反するもので、低い高台がつく。内黒のものと、内黒で外面の上半もヘラミガキ調整したものがある。高台皿は高台が高めで「ハ」字状を呈すものである。甕は破片資料のみで、非ロクロ調整（A類）のものには、長胴形と球胴形のものとがある。ロクロ調整のもの（B類）は長胴形で、口径が20cm以上の大型品（BⅠ類）と14cm以下の小型品（BⅡ類）とがある。

須恵器は坏、高台坏、蓋、高盤、瓶、壺がある。坏には体部が底部から直線的に外傾するA類と、内湾気味に立ち上がるB類があり、A類が主体を占める。また、A類には口径に占める底径の割合が大きい（底径/口径：0.51～0.63）Ⅲ形の器形のAⅠ類と、やや小さく（0.45～0.53）器高も高い逆台形のAⅡ類がある。ともに底部の切離し技法はヘラ切りで、その後にナデ調整を施すものと無調整のものがある。B類は破片資料のみで、底部の特徴は回転糸切り無調整である。坏以外の器種は破片資料のみで、図化資料も少ない。注目されるものには小型長胴の壺がある。底部に回転糸切り痕跡が残っており、平城宮の調査で壺Gと分類されるものである（奈良国立文化財研究所1976）。

赤焼土器は坏、高台坏、高台皿がある。坏には口径が12.0cm前後のA類、A類より小さく、口径が9.0～10.0cmのB類があり、A類には体部が底部から直線的に外傾する器形のものと、内湾気味に立ち上がるものとがある。B類は底部から内湾気味に立ち上がる器形である。A類も含めて内湾気味に立ち上がる坏の内面は、コテ状の工具で仕上げられているものが多い。高台坏は口径12.9cm、器高4.7cmと小振りで、低い三角高台が付く。高台皿には口径14.2cmの大型品（A類）と、口径10.8cmの小型品

（B類）がある。A類の高台は比較的高く「ハ」字状を呈し、B類には低い三角高台が付く。

土器の組合せと年代：表1は出土した土器を遺構ごとにまとめたものである。この表からわかるように、土器がまとまって出土したのはSK3707・3750・3802土壙であり、他は出土数が少ない。ここではそれらの土壙出土土器を中心に検討することにする。

〈SK3707土壙出土土器〉：SK3707土壙は炭・焼土を多く含む黒褐色粘土で埋め戻されており、埋土から多数の土器が出土している。須恵器坏AⅠ類を主体とし、ほかに須恵器坏AⅡ類・高台坏・蓋・高盤、土師器坏BⅠ類・甕BⅡ類を伴う。本遺跡周辺で共通した内容をもつものには、多賀城跡SⅠ2153住居跡（柳澤1993）、市川橋遺跡SK236土壙（石川1990）がある。SⅠ2153は土師器坏BⅠ類、須恵器坏AⅠ・Ⅱ類を主体とし、他に土師器高台坏、須恵器高台坏・蓋・壺、土師器甕A・BⅠ・BⅡ類などが出土している。SK236土壙は須恵器坏AⅠ類を主体とし、他に土師器坏A・BⅠ類、土師器甕BⅡ類、須恵器坏AⅡ類・高台坏・甕、平城京の土器分類で壺Gとされる小型長胴の壺などが出土している。年代は、多賀城跡SE2101B井戸跡第Ⅲ層出土土器群との比較や、壺Gの年代観から8世紀末を上限とする9世紀前葉代とみられている（柳澤1993）。したがって、共通する内容の土器が出土したSK3707は同じ頃のものと考えられる。

〈SK3750・3802土壙出土土器〉：これらの土壙出土土器は、様相が似ているので続けて検討する。まず、SK3750の堆積土は上・下層に大別されるが、土器の特徴は共通している。土師器坏BⅡb・c類、赤焼土器坏A類を主体とし、ほかに土師器高台埦・甕　BⅠ類、赤焼土器坏高台坏を伴う。

周辺で類似した内容をもつものには多賀城跡第61次調査第7層（柳澤・進藤1992）、本遺跡町地区SK2850土壙（村田・八島ほか1998）がある。第7層出土土器は赤焼土器A類を主体とし（註1）、これに土師器坏BⅡ類・高台埦・甕BⅠ類、赤焼土器坏B類、高台皿A・B類、赤焼土器高台坏・高台埦・耳皿、須恵器甕・壺を伴う。年代は、灰白色火山灰との関係から10世紀中頃以降に位置づけられている（註2）。町地区SK2850土壙では赤焼土器坏A類を主体とし、他に須恵器坏B類、赤焼土器高台皿B類・高台坏が出土している。年代は第7層出土土器との赤焼土器坏A類の法量比較を通じて、10世紀中頃とみられている。

SK3750土壙出土土器は、第7層出土土器とSK2850土壙出土土器との類似性から10世紀中頃以降とみられる。また、赤焼土器坏A類の法量をSK2850土壙のものと比べてみると、SK3750が口径11.2～11.5cm、器高3.4cm前後、SK2850は口径10～11.5cm、器高3cm前後であり、SK3750のほうが大きめで

遺構No.	土師器										須恵器							赤焼土器				
	坏					高台埦	高台皿	甕			坏			高台坏	蓋	高盤	瓶・壺	坏		高台坏	高台皿	
	A	BⅠ	BⅡa	BⅡb	BⅡc			A	BⅠ	BⅡ	AⅠ	AⅡ	B					A	B		A	B
SB3843											1											
SE3736													1									
SE3752																		1				
SE3754																						1
SD3743		1		1																		
SD3746											1											
SD3803				1			1				1						1					
SK3707		1								1	9	2		1	1	1						
SK3735					1														1			
SK3750				2	1	1			2									6		1		
SK3802				1	2	1											1	1	1		1	
SK3810			1																			
SK3856											1											

表1　遺構出土土器一覧表（古代）

はあるが、ほぼ同様といえる。よって、SK3750土壙の年代は10世紀中葉頃とみられる。

一方、SK3802土壙では、土師器坏BⅡb・c類、赤焼土器坏A・B類のほか、土師器高台埦、赤焼土器皿A類、須恵器瓶が出土している。赤焼土器坏B類を含む点で、SK3750土壙出土土器より後次的な要素があるが、ごく少数であり、大きな違いとはみられない。若干、新しい可能性は含みつつも10世紀中葉頃とみておきたい。

土器がまとまって出土したSK3707・3750・3802土壙の年代をみたところ、SK3707が8世紀末を上限とする9世紀前葉代、SK3750・3802が10世紀中葉頃という結果を得た。ここで他の遺構の土器もみると、SB3843建物跡、SD3746溝跡、SK3855土壙で須恵器坏AⅠ類、SK3735土壙で土師器坏BⅡcと赤焼土器坏B類、SE3752井戸跡で赤焼土器坏A類が出土している。これらはまとまって出土したものではないが、SB3843、SD3746、SK3855のものはSK3707土壙の主体をなす土器、SK3735とSE3752のものはSK3750・3802土壙の主体をなす土器と同じ特徴をもつものである。一方、SD3743溝跡では土師器坏BⅠ類とBⅡb類、SD3803溝跡では土師器坏BⅡb類と高台皿、須恵器坏AⅠ類と壺が出土している。SD3743の土師器坏は底部が再調整されたものであり、SD3803の土師器高台皿の高台は「ハ」字状を呈す高めのものである。こうした土師器坏・高台皿は周辺では山王遺跡多賀前地区の3群土器に類例を比較的見ることができる。3群土器の年代は9世紀後半とみられている。

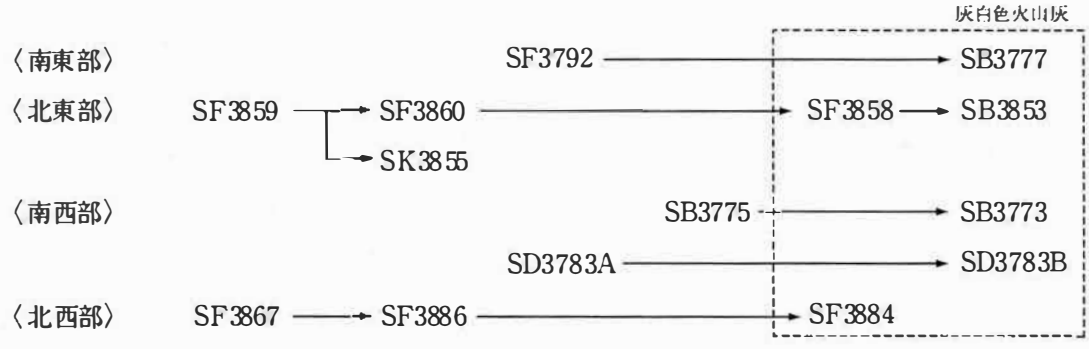
以上のことからすると、多少の幅をみる必要はあるが、その他の遺構出土土器も概ね8世紀末頃から10世紀中葉頃の平安時代のものと思われる。

2．遺構

ここでは調査区ごとに遺構の重複関係や年代を整理・検討し、次に伊勢地区全体の年代ごとの様子をみることにする。

①遺構の年代

1区（第4図）：主な遺構の重複関係を整理すると次のようになる。



この重複関係をはじめ、灰白色火山灰や出土土器からある程度の年代把握が可能な遺構について、以下検討することにする。

SB3773・3777・3853建物跡は、柱痕跡や柱穴埋土に灰白色火山灰を含むことから、10世紀前葉以降と考えられる。SB3775はSB3773よりも古く、10世紀前葉以前とみられる。また、SB3773とはほぼ同じ位置にあるので、遡っても年代は9世紀後半頃までと思われる。

SD3783溝跡は2時期の変遷（A→B）がある南北溝跡で、B期の中位程度の層に灰白色火山灰を

含む。よって、B期は10世紀前半頃に機能していたと考えられ、A期はそれ以前とみられる。

土壙ではSK3855が底面で須恵器坏AⅠ類が出土したことから、8世紀末頃から9世紀前半頃と思われる。小溝状遺構はSF3858が先述のSB3853建物跡より古く、堆積土に灰白色火山灰を含むことから10世紀前葉頃と考えられる。SF3884もSF3858同様に灰白色火山灰を堆積土に含み、方向も類似するので同じ頃とみられる。また、これらSF3858・3884の前には重複関係に示したように小溝状遺構が各々2回営まれている。このうちSK3855より古いSF3859は9世紀前半以前と考えられる。その他のものについては重複関係から9世紀代とみておきたい。

2区（第10・12図）：西側の比較的狭い範囲に密集して建物跡が多数ある。それらを中心とした主な遺構の重複関係は次のようになる。

〈北側〉

〈南側〉 SB3730A → SB3730B → SB3734

SB3786 → SB3732

まず、建物跡について検討する。北側調査区のSB3842・3843建物跡は桁行3間、梁行2間の東西棟であり、少し位置をずらして建てられているので建替えと考えられる。また、それらの南側柱列はSB3863の北側柱列、SB3864の南側柱列と柱筋が揃う。よって、SB3863・3864も一連の建物跡とみられる。SB3863・3864の新旧は不明だが、位置が重複するので、いずれかがSB3842、またはSB3843と組むと思われる。

SB3844は他の建物跡と直接的な重複がないが、上述のSB3842・3843と位置が重複するので同時には存在しない。また、SB3845とは北側柱列の柱筋がほぼ揃うこと、ともに柱の多くが抜取られている点に共通性があることから、同時期とみられる。SB3865は先述のSB3842・3843・3863より新しい。また、SB3844・3845とは位置が重複するので同時には存在しない。SB3846はSB3863より新しく、また、SD3821溝跡を介してSB3865よりも新しい。

以上のことから、北側の建物跡には5回程度の変遷があったとみられる。一方、重複図に示したように南側調査区でも、SB3730の建替えを含めて2～3回の変遷がある。このように狭い範囲に複数の建物跡があり、建替えを含めた変遷があることから、これらの建物跡はある程度の間、継続的に営まれていたと考えられる。

年代については、SB3842・3843が後述する10世紀前葉頃に埋没したSK3841土壙より古く、SB3842柱穴で土師器甕B類、SB3843柱穴で須恵器坏AⅠ類が出土したことから9世紀代と考えられる。また、SB3786・3844は柱穴から赤焼土器坏が出土しているので10世紀以降とみられ、それらより新しい

SB3732・3846や、同時期のSB3845も同じように考えられる。こうしたあり方からみて、建物跡は全体的に９～10世紀頃のものと考えられる。また、本調査における出土遺物の年代や建物跡の継続性も考慮すると、下限は10世紀中葉頃、上限も９世紀をそれほど遡らないと思われる。したがって、９世紀後半～10世紀前半を中心とする頃とみておきたい。

建物跡以外をみると、SE3840井戸跡では抜取り穴の最下層に灰白色火山灰が含まれており、10世紀前葉以前に機能していたと考えられる。溝跡ではSD3821がSB3845より新しいことから10世紀以降であり、SD3821より新しいSD3813も同じである。土壙は、SK3841が堆積土に灰白色火山灰を含むことから10世紀前葉頃に埋没したとみられる。他には前節でみたSK3707が８世紀末を上限とする９世紀前葉頃と考えられる。

３・４区（第23図）：主な遺構の重複関係等は次のようになる。なお、４区はSD3704溝跡以外に遺構がない。

この重複関係をはじめ、ある程度の年代把握が可能な遺構について検討する。

南側調査区のSB3770建物跡は、約５ｍ西側にある10世紀前半頃のSD3746溝跡と方向が揃うことから同じ頃のものと考えられる。また、北側調査区のSB3806建物跡は、２区のSB3844・3845と北側柱列の柱筋が揃うことから同時期とみられる。

SE3754は刳抜きの井戸側を据えた井戸跡で、後述する10世紀中葉頃のSK3735土壙より古い。掘方埋土から赤焼土器高台皿が出土しているので10世紀前半頃と考えられる。また、これより古いSD3749溝跡、SK3748・3789土壙はそれ以前であり、９世紀代の可能性が高い。SE3736は前節でみた10世紀中葉頃のSK3750土壙より新しく、それ以降と考えられる。一方、SE3868も前節のSK3802土壙より古く、10世紀中葉以前と思われる。また、SE3752ではSK3750土壙のものと同じ赤焼土器坏Ａ類が出土しており、10世紀中葉頃とみられる。

SD3743溝跡では底部を再調整した土師器坏ＢⅠ類とＢⅡｂ類が出土しており、９世紀後半頃と考えられる。また、これより古いSD3787溝跡、SF3796小溝状遺構はそれ以前とみられる。SD3746は３区南側調査区の中央部で検出したほぼ南北方向の溝跡で、堆積土に灰白色火山灰を含むことから10世紀前半頃と考えられる。また、この溝跡の５ｍ西にあるSD3747は、SD3746と平行して南北にのびてい

る。残存状況が悪く、堆積土に灰白色火山灰は認められないが、底面の標高もSD3746とほぼ同じであることから同時期と思われる。その他、SD3704も堆積土に灰白色火山灰を含んでおり、10世紀前半頃とみられる。一方、SD3803は堆積土に灰白色火山灰を含むが、それは上面で顕著である。また、出土土器は土師器・須恵器が主体をしめる。土師器坏はBⅡb類で、底部を再調整したものがあり、土師器高台皿の高台も高めで「ハ」字状を呈すものである。よって、SD3803は9世紀後葉頃に機能し、10世紀前葉頃には埋没したと考えられる。

SK3735土壙は、出土した土器が前節でみたSK3802土壙のものと類似するので10世紀中葉頃とみられる。SK3724・3873は、堆積土に灰白色火山灰を含むことから10世紀前半頃のものと思われる。SK3767は9世紀後半頃のSD3743より新しく、10世紀中葉頃以降のSE3736より古い。10世紀前半頃と考えられる。また、SK3767より新しいSK3737はそれ以降とみられる。

これらの遺構のほか、SD3800河川跡は重複する9～10世紀の遺構のすべてより古く、種子以外の遺物も出土していないことから8世紀以前に流れていたと思われる。

●年代ごとの様子

前項での整理・検討の結果、建物跡や井戸跡をはじめとする主要な遺構は、9世紀後半～10世紀前半を中心に営まれたものが多いと思われる。それに基づいて伊勢地区の年代ごとの様子を述べるが、その場合、東側に隣接する町地区XI区の様相にも注意したい（註3）。町地区XI区では南端でSX3106東西道路跡を検出しており（第38図）、その建設と廃絶を画期とした遺構の変遷が捉えられている(村田・八島ほか1998)。それはA期：道路建設前の8世紀後半から9世紀中葉、B期：道路機能時の9世紀後半から10世紀前半、C期：道路廃絶後の10世紀中頃以降とする変遷であり、伊勢地区の様相にも概ね対応すると思われる。

A：8世紀末頃～9世紀前半頃

確実な遺構は1区のSK3855土壙とSF3859小溝状遺構、2区のSK3707土壙のみである。町地区では本地区に近い北部に小溝状遺構群が営まれており、ほかには若干の小型建物跡と土壙がある程度である。したがって、この頃の本地区周辺は耕作域として利用されていた程度であり、全体的に閑散としていたとみられる。なお、3区東端には8世紀以前に河川跡が湾曲して流れており、この頃には埋没している。

B：9世紀後半頃～10世紀中葉頃（第38図）

前の時代に比べて多数の遺構が営まれている。その分布をみると、本地区は1区のSD3783溝跡から東の地区（a区）、2区西側と3区東側を中心としたSD3747までの地区（b区）、SD3747から西側の地区（c区）に分けられる。以下、東から順番にみていくことにする。

a区：建物4棟、溝1条のほか、小溝状遺構がある。建物は南側調査区に3棟あり、北側は1棟のみである。調査区の広さからみて、明らかに南側に多い。規模は一辺が1～3間と小さく、方向はほぼ真北のもの（SB3853）と、真北に対して東に傾くもの（SB3773・3775・3777）がある。SB3775→3773の重複があり、2回以上の変遷がある。溝は南側調査区西端のSD3783南北溝のみである。2時期（A→B）の変遷があり、B期に灰白色火山灰が含まれる。小溝状遺構は主に北側に営まれており、

SF3858・3884ように10世紀前葉頃に限定できるものもある。こうしたａ区のあり方をみると、南側と北側で様子が異なる。南側は建物跡が営まれているが、北側は小溝状遺構が主体の耕作域となっていた。小溝状遺構は10世紀前葉頃にもあり、北側の様子は前の時代からほとんど変化していない。

ここで町地区XI区をみると、北、東、南を各々SD2816東西溝、SD2766南北溝、SX3106道路北側溝に囲まれた地区となっている。北のSD2816と東のSD2766には、２時期（A→B）の変遷があり、B期が堆積土に灰白色火山灰が含まれることから10世紀前半、A期は道路側溝との関係から９世紀後半とみられている。地区の内部には28棟の建物がある。一辺が２・３間ほどの小型の建物が目立ち、方向はほぼ真北のもの、真北に対して西に傾くもの、真北に対して東に傾くものがあるが、後二者の東西への傾きは小さい。

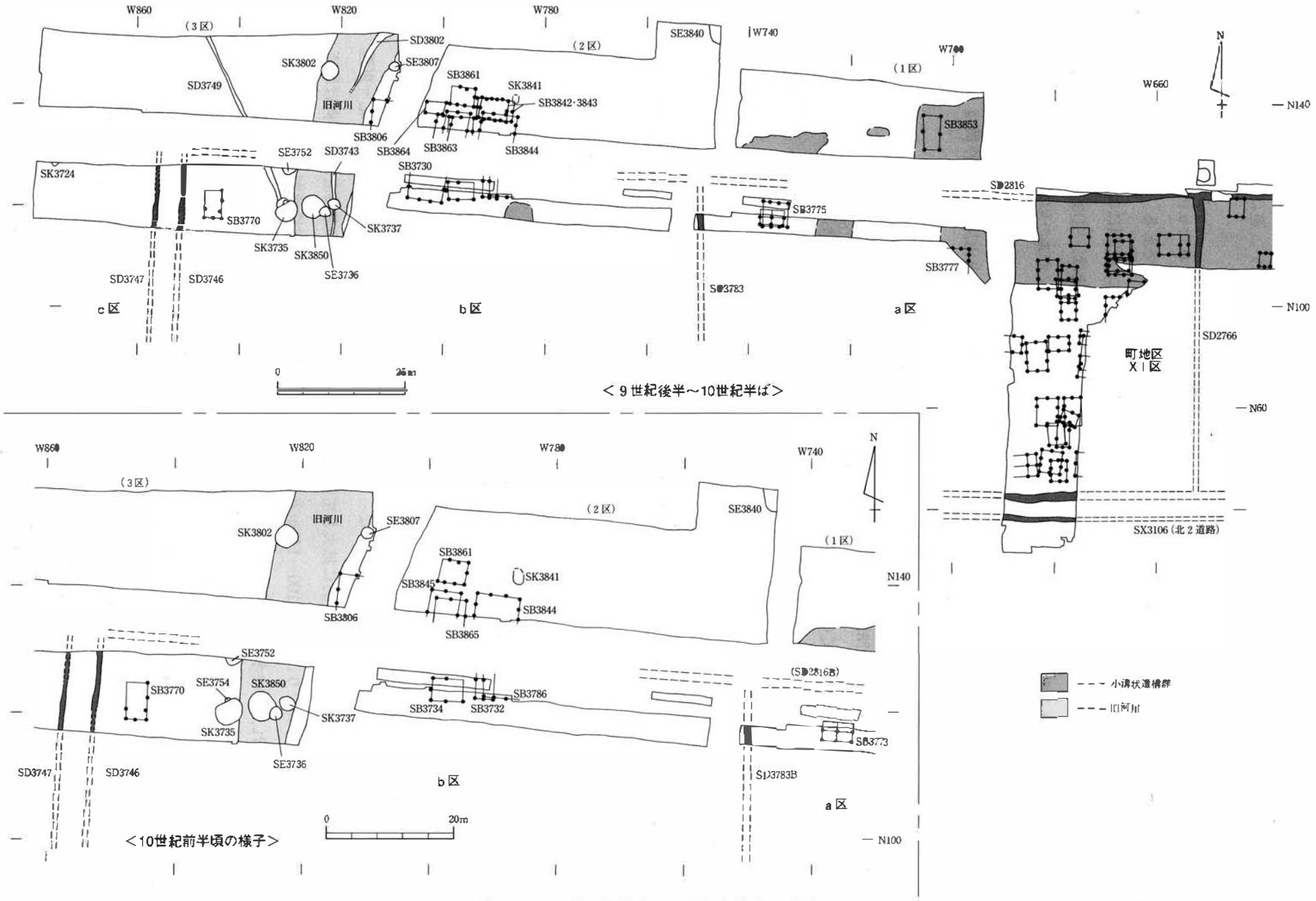
本調査区ａ区のSD3783南北溝の変遷・堆積土・年代の特徴は、町地区XI区の区画溝であるSD2816東西溝、SD2766南北溝と共通している。場所もSD2766南北溝の97.5m西にあり、多賀城下の方格地割の一辺（110～140m）の距離に比較的近い。よって、SD3783はSD2766・2816と一連であり、地区の西を画す区画溝と考えられる。先述したようにａ区の南と北では様子が異なるが、それはSD3783が北側に延びないこともあわせみて、南側が溝等で囲まれた区画になったためとみられる。区画の広さは東西97.5m、南北58mで、中には建物が営まれた。その数は本調査区では少ないが、それは調査区の制約によると思われる。建物の規模や方向は、町地区XI区のあり方と同じであり、方向は区画溝等に規制されていたとみられる。一方、北側は区画外であり、耕作域として主に使われていた。

ｂ区：建物14棟、井戸４基、溝６条、土壙７基がある。建物は２区西側の微高地周辺に密集するが、10世紀前半頃には南側調査区のSD3746溝跡の側にも建てられ（SB3770）、広がりをみせる。規模がわかるものは少ないが、一辺が１～３間程度の小型の建物とみられる。前項でみたように、微高地の建物には建替えや多くの重複があり、北側では５回程度の変遷がある。方向は、ほぼ真北方向のもの（SB3732・3734・3770・3786）と、真北に対して少し東（N－4～8°－E）に傾くもの（SB3730・3806・3842～3845・3861・3863～3865）がある。なお、ほぼ真北方向のものはすべて南側調査区にあり、そのうち３棟は10世紀前半頃の建物である。

建物以外のものは、建物が集中する微高地の西側に多い。なかでも井戸とSK3735・3750・3802などの規模の大きい土壙は、埋没した旧河川の場所に多く造られている。井戸の構造は井戸側を据えたものと素掘りのものがある。溝跡は幅1.0m前後のものが主体を占める。方向は、真北に対して東に傾くもの（SD3803・3821）、ほぼ真北のもの（SD3743・3746・3747）、真北に対して西に傾くもの（SD3749）があり、様々である。SD3743・3803などは旧河川に沿って湾曲している。多様な傾向は特に９世紀後半頃のもの（SD3743・3749・3803）に強くみられる。

こうしたｂ区のあり方をみると、まず建物、井戸、土壙の立地が注目される。建物は微高地、井戸と土壙は西隣の旧河川の場所に集中しており、ともに適所を選んで営まれている。

次に、南側調査区のあり方が注意される。微高地以外に建てられたSB3770は南側にあり、方向がほぼ真北のSB3732・3734・3770・3786もすべて南側にある。そのうちSB3732・3770・3786は10世紀前半頃の建物である。同じ頃、北側にあるSB3844・3845などは微高地のみに集中し、方向も東に傾



第38図　9世紀後半頃～10世紀中葉頃の遺構

く。それはSB3842・3843など9世紀に遡る建物と同じであり、変化がない。逆に、10世紀前半頃の南側調査区には何らかの変化・規制が生じていたと考えられる。

この頃の南側における建物の広がりや方向のあり方は、区画溝等で囲まれたa区南側の様子にむしろ類似する。そこで注目されるのが、b区西端にあるSD3746・3747溝跡である。これらは約5mの間隔で平行し、ほぼ真北にのびる南北溝である。南側調査区で検出され、北側にはのびてない。平行することや間隔からみて同時期であり、道路側溝の可能性もある。年代は、SD3746の堆積土に灰白色火山灰が含まれるので10世紀前半頃とみられる。これらの溝跡はa区でみたSD3783南北溝跡（区画の西辺）から109m西（溝間の中心まで）に位置している。その距離は方格地割の一辺（110～140m）に近く、ほぼ1町である。2時期ではないが、堆積土に灰白色火山灰を含む特徴はB期のSD3783と同じで、方向もほぼ真北である。

SD3746・3747のあり方と上述した南側調査区の変化・規制からみると、道路側溝の可能性も含めてSD3746・3747にはSD3783Bと同じ区画の機能があり、10世紀前半頃の南側調査区は溝・道路側溝等で囲まれた区画となっていた可能性がある。その場合、四辺は東をSD3783B、西をSD3746とし、調査区外になるが、北にはSD2816B東西溝の延長、南にはSX3106東西道路（北2道路）北側溝の存在が推定される。

c区：10世紀前半頃にSD3704溝跡とSK3724土壙があるのみであり、閑散としている。SD3704は南北方向の溝だが、方向は真北に対して大きく東に傾いており、規制は特に認められない。

C：10世紀後半頃

この頃に属すことが確実な遺構はない。10世紀中葉頃以降とみたSE3736に可能性がある程度であり、伊勢地区は10世紀後半頃には使われなくなったとみられる。

3．まとめ　～多賀城下末端の様相について～

本調査で見つかった遺構について、近年の調査成果を踏まえてまとめてみたい。

近年の調査成果：多賀城外の南側には方格地割が存在したことが明らかになっている（第2図）。地割の内部では掘立柱建物跡をはじめ、区画溝跡、井戸跡などが多数検出されており、遺物も中国産陶磁器、国産の施釉陶器といった奢侈品、硯、石帯といった多賀城と関わるものが多いなど、その様相は一般集落とは異なる都市的な空間となっている。方格地割は8世紀末頃の基幹道路（南北・東西大路）の整備にはじまり、段階的に拡大して形成されている。また、それらの基準となる方向は場所や時期によって異なり、間隔も100～140mとばらつきが認められる。そして方格地割の終末は10世紀後半代とみられ、ほぼ多賀城の終末年代と一致している（菅原ほか1996）。

こうした成果のもとに方格地割の西外側にあたる町地区の調査が行われた（村田・八島1998）。その結果、SX3106東西道路跡（北2道路）が検出されたほか、建物跡や区画溝などの遺構の様子や変遷が、地割内部と同じあり方を示すことがわかった。また、伊勢地区の東隣りにあたるXI区では、8世紀後半～9世紀中葉頃は耕作域を主としていたこと、9世紀後半頃のSX3106東西道路建設を画期として道路側溝や溝で囲まれた地区が造られ、その中には方向を概ね北に揃えた小型の建物が多数営まれたこと、10世紀後半代には方格地割の終末に対応して、再び耕作域となったことが捉えられてい

る。以上のことから、町地区では方格地割の範囲が西へ延びることが指摘された。

伊勢地区の調査成果：町地区に続く、今回の調査成果は次のようなものである。

1．8世紀末頃～9世紀前半頃には土壙と小溝状遺構が若干あるのみである。本地区は耕作域として使われていた程度であり、閑散としている。

2．9世紀後半頃～10世紀中葉頃については、町地区XI区でみつかった区画の西辺となるSD3783南北溝跡を1区（a区）南側で検出し、東西が97.5mの区画であることが判明した。内部には建物跡が営まれており、その様子は町地区とほぼ同じである。一方、区画の外側となる北側調査区は前の時代と大きな変化がなく、主に耕作域となっている。

3．上の時期には2区西側と3区東側（b区）でも建物や井戸、溝、土壙が営まれていた。それらは建物が微高地、井戸と土壙が旧河川の場所というように適所を選んで造られている。また、10世紀前半頃の南側調査区は、建物に分布上の広がりや方向の規制が認められ、西側には道路側溝の可能性もあるSD3746・3747南北溝が存在することなどから、東隣（a区）と同じように区画が形成されていた可能性がある。一方、SD3747溝跡から西側（c区）は溝跡と土壙が若干あるにすぎない。溝跡の方向は真北に対して大きく東に傾いており、規制は特に認められない。

4．10世紀後半頃の確実な遺構はみられない。本地区はこの頃には使われなくなったと考えられる。

以上のような成果は、概ね町地区の成果に追従するものといえる。なかでも9世紀後半頃～10世紀中葉頃の時期において、町地区でみつかっていた区画の西辺を検出したこと、10世紀前半頃には西隣りにも区画が造られたとみられること、その西辺には道路側溝の可能性があること、これらの区画の外側（北・西）は一部を除いて耕作域や遺構が少ない場所であることは、多賀城下の街並みの末端を考えるうえで重要と思われる。

現在、城下の方格地割を構成する南北道路のうち最も西にあるのは西9道路である。しかし、町地区での東西道路（北2道路）の検出、町・伊勢地区での区画の存在、区画内と方格地割内との様相の一致などのことは、町地区で指摘されたように方格地割の西への広がりを示唆する。ここで西9道路と両地区の区画の南北溝との間隔をみると、西9道路～SD2766が160～180m、SD2766～SD3783が97.5m、SD3783～SD3746・3747が109mであり、それらは概ね方格地割の間隔（110～140m）に相当する。多少の広狭はあるが、地割の間隔のばらつきや地割2つ分の可能性、町・伊勢地区が城下の末端であることなどを考慮すれば、無理な数値ではない。

だが、以上のことから方格地割の広がりを断じることはできない。現段階では西9道路周辺すら東西ともに未調査部分が多く、実態が捉えられていない。伊勢地区南側も同様である。また、城下の方格地割は南北に比べて東西に長い特徴があるが、そうした拡がり方を方格地割の拡大とする見方にとらわれず、東西大路に沿った街並の延び・展開とする見方も検討する必要があると思われる。いずれにしても、周辺の様子が明らかでない現況でこれ以上のことを論じるのは早急にすぎる。本報告では城下の末端の様相を客観的に捉えるに留めておきたい。

B．近世

1．遺物

遺物には磁器、陶器、瓦質土器、漆器、木製品、金属製品、土製品、石製品がある。出土量は少なく、磁器、陶器の総量は平箱で1箱である。また、ほとんどが破片資料である。

磁器には碗、皿、擂利がある。肥前が主体を占めるが、青磁や八卦文が描かれた角皿など輸入陶磁も少しみられる。陶器には碗、皿、鉢、火鉢、甕、壺、擂鉢、内耳土鍋、土瓶がある。施釉陶器は瀬戸美濃が主体で、ほかに肥前や唐津が若干みられる。碗には天目茶碗もある。無釉陶器の大部分は在地のもので、注目されるものには内耳土鍋がある。内耳土鍋は、戦国大名伊達氏の領内に分布範囲が重なるとされる遺物の1つである（飯村1997、高桑2003）。県内での出土例は少なく、仙台城二の丸跡（東北大学埋蔵文化財センター1997）、富谷町熊谷館跡（大和・佐藤2001）についで本例が3例目となる（註4）。瓦質土器は擂鉢がごく少数出土している。漆器には椀、櫛、杓子がみられ、木製品には下駄、馬形、曲物の蓋板、折敷の底板がある。馬形は木偶状のもので、比較的残りのよい胴部には墨で馬具が描かれており、一部に朱彩も施されている。類例は本遺跡八幡地区にみられ、15・16世紀頃の屋敷跡の土壙から出土している（佐藤ほか1997、千葉・鈴木1997）。このほか金属製品には釘、煙管、銭貨、土製品に猫の土人形、石製品に臼、茶臼、硯がある。

上記の遺物のうち、ある程度の年代がわかるものを整理したのが表2である（註5）。これによると12世紀末頃～19世紀半ば頃のものがあり、近世に限らず中世に遡るものもあることがわかる。例えば、青磁は12世紀末頃～15世紀頃のものである。しかし、これらは共伴した遺物や後述するような遺構の様相からみて、遺構の年代を直接示すものではない。磁器の年代は17～19世紀頃で、特に17世紀前半頃のものが多い。陶器は16～19世紀頃であり、16世紀後半頃～18世紀初頭頃にまとまりが認められる。ほかに年代がわかるものには煙管、銭貨がある。煙管は「河骨形」の雁首で、補強帯・肩付といった特徴から17世紀前半頃と後半頃のものがある（古泉1987）。銭貨には北宋銭の熙寧元宝と明銭の永楽通宝があるが、青磁と同様に遺構の年代は示さない。

以上のことから、年代のわかる遺物は16世紀後半頃～18世紀初め頃のものが主体を占めるといえる。他は散発的な出土にすぎない。ただ、今回の出土遺物には少しではあるが、青磁といった輸入磁器、天目茶碗のような陶器、煙管、茶臼などの奢侈・嗜好的なものがあることは留意しておきたい。

SA3823	2区	陶器・鉢	瀬戸美濃	17世紀末～18世紀初	114	SD3825	2区	陶器・端反皿	瀬戸美濃	16世紀末	126
SA3823	2区	陶器・皿	志野	16世紀末～17世紀初	113	SD3834	2区	磁器・皿	肥前	17世紀第2四半期	127
SB3729	2区	銭貨・熙寧元宝	北宋	1068年初鋳	174	SK3822	2区	陶器・皿	唐津	17世紀後半～18世紀初	104
SX3760	1区	煙管		17世紀後半	176	SK3827	2区	磁器・角皿	中国系	17世紀前期	108
SD3711	2区	陶器・皿	瀬戸美濃	16世紀後半	50	1層	2区	磁器・福呑茶碗		19世紀前半	197
SD3711	2区	瓦質土器・擂鉢		15・16世紀	56	1層	2区	磁器・皿	肥前	17世紀第2四半期	151
SD3711	2区	青磁・皿		15世紀	49	1層	3区	磁器・碗	肥前	17世紀末～18世紀	169
SD3740	3区	磁器・茶碗	肥前	17世紀前葉	201	1層	1区	陶器・土瓶	大堀相馬	19世紀第2・3四半期	86
SD3740	3区	陶器・天目茶碗	瀬戸美濃	17世紀前半以前	61	1層	2区	陶器・碗	肥前	18世紀	159
SD3740	3区	青磁・碗		13世紀	62	1層	3区	陶器・鉢	瀬戸美濃Or肥前	17世紀末～18世紀初	165
SD3740	3区	銭貨・永楽通宝	明	1408年初鋳	207	1層	2区	煙管		17世紀前半	205
SD3742	3区	陶器・擂鉢	志野	16世紀～17世紀初	66	IIc層	2区	陶器・内耳土鍋		16世紀末～17世紀初	137
SD3744	3区	青磁・碗		12世紀末	70	攪乱		磁器・鉢	肥前	17世紀後半	172
SD3759	1区	陶器・擂鉢		17世紀～18世紀初	76						

表2　主要近世遺物一覧表

2．遺構

塀跡１条、柱列跡１条、掘立柱建物跡７棟、井戸跡４基、墓跡１基、溝跡23条、土壙５基がある。これらの遺構のなかでは規模の点で、１区東端や１・２区北側、及び３区にある上幅1.5mを越える溝跡と、２区の長軸6.0mを越えるSK3822土壙が目立つ（第４・10・23・39図）。そこで、まずそれらの重複関係の整理・検討を行い、次に建物跡などの遺構をみることにする。

規模の大きい溝跡と土壙：１区にSD3757南北溝跡、SD3850～3852東西溝跡、２区にSD3834南北溝跡、SD3820・3825・3830東西溝跡、SK3822土壙、３区にSD3702・3740・3745・3801南北溝跡がある。まず、１区のSD3757とSD3852は、前者が少し遅く埋没しているが、基本的には一連の溝跡である。SD3851もSD3852西端の約１m西から延長するようにのびるので、同時期とみられる。また、SD3850・3851は２区にのび、西端が12～18m先のSD3820・3825の東端とほぼ揃うので、SD3850とSD3825、SD3851とSD3820が各々組合うと思われる。

〈 １区 〉　　〈 ２区 〉

SD3757南北溝跡 ＝ SD3851東西溝跡 ＝ SD3852東西溝跡 … SD3820東西溝跡

SD3850東西溝跡 … SD3825東西溝跡

このように１区の溝跡にはSD3757・3851・3852のまとまりと、SD3850とがあり、２区のSD3820、SD3825と各々が対応する。後述するように２区のSD3820・3825にはSD3825→SD3820の関係があるので、１区でもSD3850が古く、SD3757・3851・3852が新しいとみられる。ところで、東に隣接する町地区XI・XII区をみると、SD3396南北溝跡、SD3009南北溝跡をそれぞれ主とするまとまりがある。これらは屋敷地を画する溝跡であり、SD3396のまとまりが新しい。形状や規模の特徴も本調査区の規模の大きい溝跡に類似しており、また、SD3396の北端を北に延ばすと１区のSD3757にほぼ一致するので、１区のSD3757・3851・3852と町地区のSD3396、１区のSD3850と町地区のSD3009がそれぞれ対応すると思われる。

次に、２区の溝跡と土壙について、一連の関連遺構も含めた重複関係は以下のようになる。

SD3834 ⟶ SD3825・3835 ⟶ SD3708・3820 ⟶ SD3818・SK3822

SD3834 ⟶ SD3830

これによると、最も古いSD3834が南北溝跡、続くSD3820・3825・3830が東西溝跡、最後のSK3822が土壙であり、南北溝→東西溝→土壙といった変遷が知られる。３区の溝跡には重複関係がない。方向をみると、最も大きいSD3740南北溝をはじめとして真北に対して29～36°の範囲で東に傾く特徴がある。その方向は、２区のSD3820・3825とほぼ直交する方向である。よって、３区の溝跡SD3820・3825と同じ頃のものと思われる。

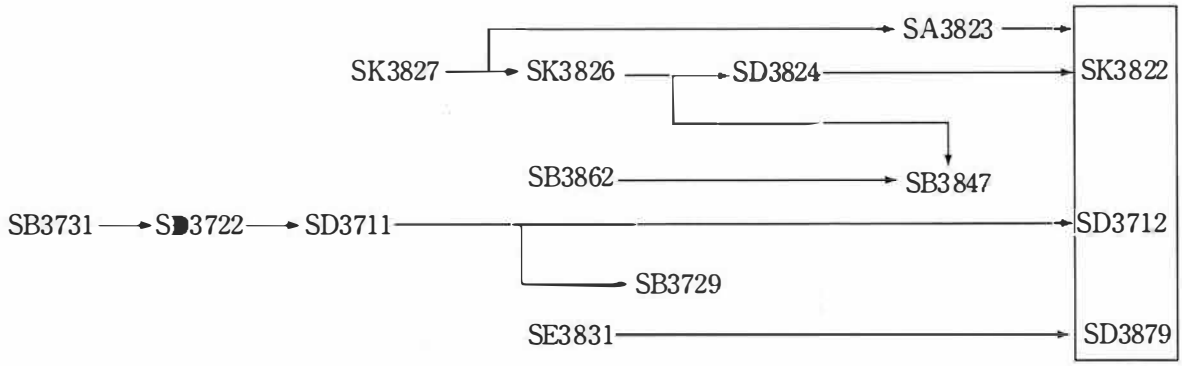
規模の大きい溝跡と土壙について重複関係が最もわかる２区を中心に整理すると、A～C期に大別される。すなわち、２区に南北溝が営まれたA期、１・２区に東西溝、３区に南北溝が営まれたB期、２区にSK3822が営まれたC期であり、B期にはさらに２～３回の変遷がある。

建物・塀・井戸跡など：これらの遺構は、２区西側の微高地から３区東側に大部分が集中する。上

述した2区のSD3820・3825東西溝跡と3区のSD3740南北溝跡に挟まれた場所でもある。建物跡の規模は桁行が4・5間でも梁行は1間程度であり、概して小さい。柱穴もSB3731以外は総じて小さく、平面形も楕円形のものが多い。これらの建物跡にはSB3862→SB3847の重複があり、2回以上の変遷がある。方向は、いずれも北に対して東に傾く。なかでも微高地の建物は15～22°と傾きが大きく、北側のSD3820・3825東西溝跡の方向に近い。

塀・柱列跡は建物跡の北側にあり、建物跡とほぼ同じ方向をとる。井戸跡は素掘りで、建物跡の脇や北側(裏?)に所在する。これらの遺構は建物跡の近くにあり、塀・柱列跡と建物跡の方向も近似することから建物跡に付属する施設とみられ、この場所には小規模な屋敷が営まれていたと考えられる。

ここで建物跡を中心に重複関係を整理すると次のようになる。重複は2区のみにある。



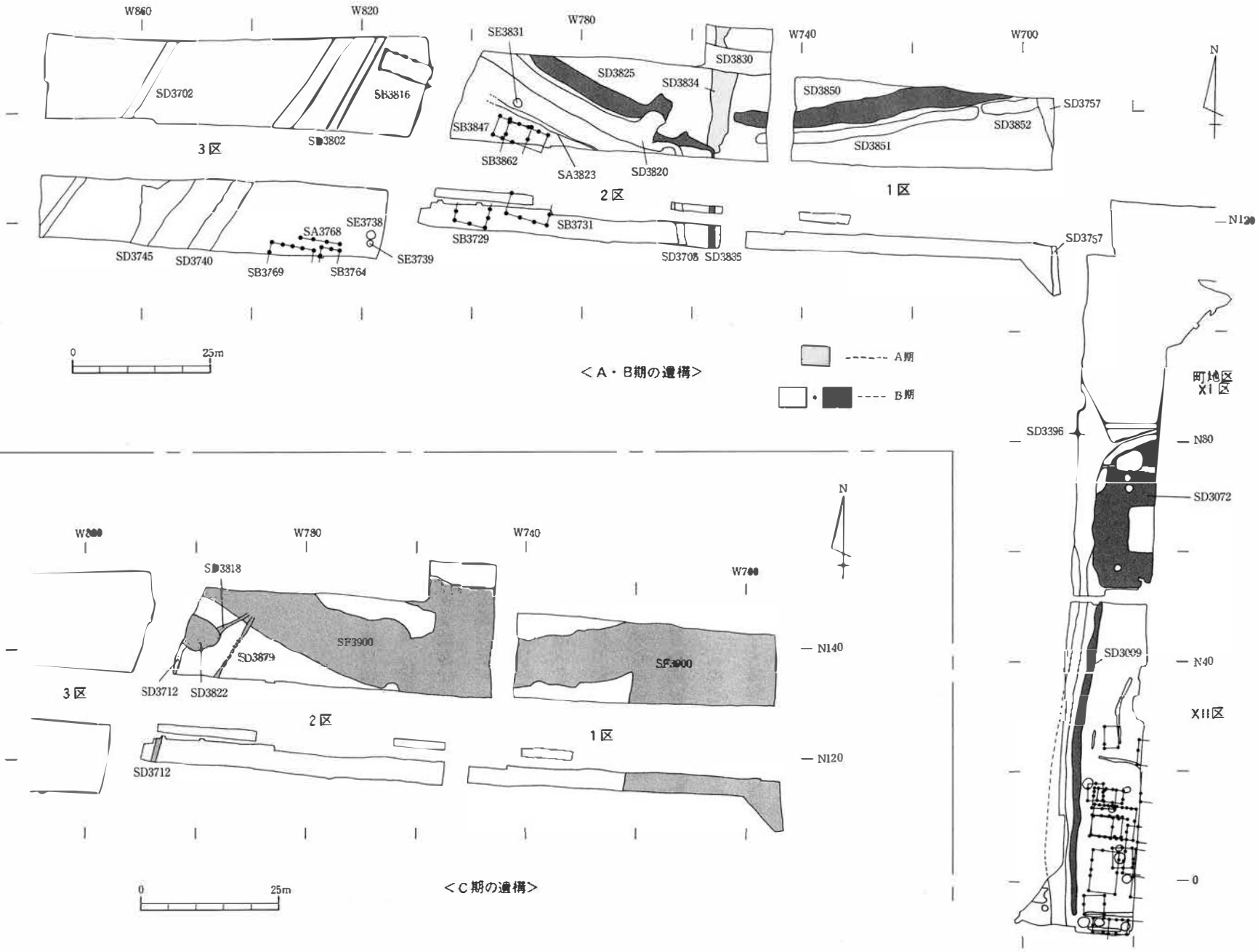
これによると前項でC期としたSK3822土壙と関係がわかる建物・塀跡は、それよりすべて古い。また、建物・塀跡の方向がSD3820・3825東西溝跡に近いことからみて、屋敷はB期に属すと考えられる。

各期の様子と年代（第39図）：これまでの整理・検討から、規模の大きい溝跡、土壙にはA～C期の変遷があり、屋敷はB期に属すことが知られた。以下、各期の様子をみながら年代を検討するが、遺物が少ないため限定は難しい。町地区の成果も含めて概略的に捉えることにする。

A期の遺構はSD3834溝跡とSX3760墓跡のみであり、周囲の状況はよくわからない。溝跡の年代は堆積土出土磁器に17世紀第2四半期頃の肥前の皿があるので、17世紀第2四半期頃以降に埋没したとみられる。その機能は遡っても17世紀初め頃までと思われる。

B期には1区東端と3区で南北方向、1・2区北側で東西方向に規模の大きい溝が造られ、2区西側の微高地を中心とした場所には屋敷が営まれていた。溝は自然堤防や北に張出す微高地の縁辺に沿って造られており、屋敷の北と西を画している。これらの溝には町地区の屋敷を画する溝と一連のものもあり、自然堤防上の屋敷や、集落と北側の低地を仕切る溝と考えられる。微高地の屋敷内には建物や塀、井戸が営まれていた。建物や塀は小規模である。

屋敷の建物や外側の溝には2～3回の変遷がある。年代は、町地区の区画溝によってある程度捉えられており、SD3009が18世紀後半頃、SD3396が19世紀とされている。よって、本調査区の溝のうちSD3009に対応するSD3850・3825が18世紀後半頃、SD3396に対応するSD3757・3851・3852・3820が19世紀と考えられる。2区のSD3830や3区の溝の年代は不明だが、上記の年代と大きな前後差はないと思われる。全体としてB期は18世紀後半から19世紀を中心とした頃とみておきたい。なお、B期


W860
W820
W780
W740
W700
SD3702
SB3816
SB3802
SE3831
SD3825
SD3834
SD3830
SB3847
SB3862
SA3823
SD3820
SD3850
SD3757
SD3852
SD3851
3区
2区
1区
N
SA3768
SE3738
SD3745
SD3740
SB3769
SB3764
SE3739
SB3729
SB3731
SD3705
SD3835
SD3757
N120
0
25m
＜A・B期の遺構＞
A期
B期
町地区
XI区
SD3396
N80
SD3072
SD3009
N40
XII区
0
W800
W780
W740
W700
SD3818
SD3879
SF3900
SD3712
SD3822
N140
N120
＜C期の遺構＞

第39図　近世の遺構

の遺構では表２にあげた年代のわかる遺物も出土しているが、流入とみられ、遺構の年代とは直接関係しないと思われる。

Ｃ期では２区西端にSK3822土壙がある。この土壙には南からSD3712溝跡、北からSD3818溝跡が取付き、SD3818の北はＢ期のSD3820溝跡埋没後の湿地（SF3900：Ⅱc層）へ連なる。また、同じように湿地に連なるSD3879も同時期とみられる。湿地はＢ期の規模の大きい溝跡埋没後の窪みを中心に形成され、１区東側と１・２区北側に大きく広がっている。他にＣ期の遺構はない。周囲は閑散としており、Ｂ期のように屋敷が造られて生活が営まれた形跡はない。年代もＢ期との重複以外に不明であり、19世紀以降であることが知られるのみである。

３．まとめ

遺構はＡ～Ｃ期に大別される。Ａ期は、溝が１条あるのみであり、年代は遡っても17世紀初め頃までとみられる。Ｂ期には１区東端と３区で南北方向、１・２区北側で東西方向に規模の大きい溝が造られ、２区西側の微高地を中心とした場所には小規模な建物や塀、井戸から構成される屋敷が営まれていた。溝は自然堤防や北に張出す微高地の縁辺に沿って造られており、自然堤防上の屋敷や、集落と北側の低地を仕切る溝と考えられる。年代は18世紀後半から19世紀を中心とした頃とみられる。Ｃ期は、２区西端に土壙と溝跡が少しあるのみで、１区東側と１・２区北側には湿地が広がっている。年代は19世紀以降とみられる。

なお、本調査では16世紀後半頃～18世紀初め頃を主体とする遺物が少し出土したが、ほとんどが破片資料であり、遺構に流入したものとみられる。ただ、その中には青磁といった輸入磁器、天目茶碗のような陶器、煙管、茶臼などの奢侈・嗜好的なものがあることは留意される。本調査区の150m北には伊達政宗の叔父、政景の入嗣で隠退した留守顕宗の隠居後の舘とみられている内舘があり、戦国時代末期の本遺跡周辺は顕宗を中心に動いていたと考えられている（多賀城市史編纂委員会1996）。本調査では内舘に関連する遺構は検出されなかったが、奢侈・嗜好的な遺物の存在は、内舘やそうした動きとの関連を示唆する可能性がある。遺物には内耳土鍋のように戦国大名伊達氏との関係が指摘されるものもある（飯村1997、高桑2003）。したがって、本調査区周辺にその頃の遺構があることは十分予想される。今後の調査に期待したい。

【註】

註１　多賀城跡調査研究所では、食膳具のうち酸化炎焼成で内黒手法が施されない素焼きの土器を須恵系土器と呼んでいる。

註２　近年、この年代については灰白色火山灰降下後の10世紀前葉～10世紀中葉頃と修正する見解が示されている（柳澤・白崎1998）。その場合、SK3750・3802土壙出土土器の年代も繰り上りうることを付記しておく。

註３　町地区XI区は本来は伊勢地区に含まれるが、混同をさけるため報告書名の町地区と称することにする。

註４　内耳土鍋については、表２に載せた年代のほか、耳の形状や取付け方が仙台城や米沢城の例に類似すること、耳下部の屈曲の少なさや断面形状が米沢城のものに比較的近いことなどのご教示を山形県埋蔵文化財センターの高桑　登氏からいただいた。

註５　表にのせた年代について、青磁は多賀城市埋蔵文化財センターの千葉孝弥氏、磁器・陶器は東北陶磁文化館の本田泰貴氏にご教示を受けた。

【引用・参考文献】

飯村　均（1997）：「中世食器の地域性　２－東北南部」　国立歴史民俗博物館研究報告第71集

石川俊英（1990）：「市川橋遺跡－平成元年度発掘調査報告－」多賀城市文化財調査報告書第21集

井上克弘・山田一郎（1990）：「東北地方を覆う古代の降長質手テフラ“十和田－大湯浮石”の同定」『第四紀研究』29-2

古泉　弘（1987）：『江戸の考古学』　考古学ライブラリー48

佐藤則之ほか（1997）：『山王遺跡Ⅴ』　宮城県文化財調査報告書第174集

白鳥良一（1980）：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』　宮城県多賀城跡調査研究所

菅原弘樹ほか（1996）：『山王遺跡Ⅳ』　宮城県文化財調査報告書第171集

高桑　登（2003）：「奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について」『研究紀要』創刊号　財団法人山形県埋蔵文化財センター

多賀城市史編纂委員会（1991）：『多賀城市史』第４巻　考古資料

多賀城市史編纂委員会（1997）：『多賀城市史』第１巻　原始・古代・中世

千葉孝弥（1990）：『新田遺跡　（第４・11次調査報告）』　多賀城市文化財調査報告書第23集

千葉孝弥・鈴木孝行（1997）：『山王遺跡Ⅰ　－仙塩道路建設に係る発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第45集

東北大学埋蔵文化財センター（1997）：『東北大学埋蔵文化財調査年報８』

奈良国立文化財研究所（1976）：『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』　奈良国立文化財研究所学報第26冊

古川一明・佐久間光平ほか（2001）：『市川橋遺跡の調査　－県道「泉－塩釜線」関連調査報告書Ⅲ－』宮城県文化財調査報告書第184集

村田晃一・八島伸明ほか（1998）：『山王遺跡町地区の調査　－県道泉塩釜線関連調査報告書Ⅱ－』宮城県文化財調査報告書第175集

柳澤和明・進藤秋輝（1992）：「第61次調査」『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1991

柳澤和明（1993）：「第62次調査」『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1992

柳澤和明・白崎恵介（1998）：「第68次調査」『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1997

山田一郎・庄司貞雄（1980）：「宮城県に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1979

大和幸生・佐藤道子（2001）：『熊谷館跡他発掘調査報告書　－区画整理事業に伴う中世城館跡の調査－』宮城県富谷町文化財調査報告書第３集

遺構属性表

遺構名	区	構造	規模（間）	総長（m）	柱間寸法（m）		柱穴（cm）			方向	重複	備考
						平面形	長軸	短軸	深さ			
SA3768	3	1本柱列	3	7.2	南から2.5・2.4・2.3	隅丸長方形	40～60	30～45	45	E－9°－S	SD3800、SK3735 → SA3768	
SA3782	1	1本柱列	(1)	(1.9)	南から1.9	隅丸長方形	40～50	30～40	40	N－1°－W		
SA3823	2		(2)	(21.2)	掘方：幅30～50cm 断面箱形		抜取：幅30～50cm	断面逆台形	65	E－26°－S	SA3842・3844・3861、SD3833・3880、SK3827・3839・3881→SA3823→SK3822	本文参照（24頁）

塀・柱列跡属性表

遺構名	区	構造	規模（間）	総長（m）	柱間寸法（m）		柱穴（cm）			方向	重複
							平面形	長軸	短軸	深さ			
SB3728	2		3×（1）	5.8×？	西から1.9・2.0・1.9		楕円形	40	30	20	E－8°－S	SB3728→SK3709
SB3729	2		2×（2）	（3.6）×5.7	南から1.8・1.8	東から2.8・2.9	楕円形	25～40	20～35	25	N－18°－E	SD3711・3713・3719→SB3729
SB3730	2		3×（1）	6.8×（2.3）	東から2.2・2.2・2.4	南から2.3	A 不整長方形	60～85	40～50	50	E－6°－S	SB3730→SB3734、SD3711・3712
							B 楕円形	40～55	30～40			
SB3731	2		3×（2）	7.9×（3.6）	東から2.6・2.6・2.7	3.6（2間分）	隅丸長方形	40～70	30～65	45	E－18°－S	SB3786、SF3714→SB3731→SD3722、SK3726
SB3732	2		2×（1・2）	3.0×（3.0）	東から1.5・1.5	南から3.0	隅丸長方形	40～70	30～60	55	E－9°－S	SB3786→SB3732→SD3715・3716
SB3734	2	東西棟	2×2	5.1×3.5	東から2.7・2.4	北から1.8・1.7	隅丸長方形	25～50	20～35	40	E－9°－S	SB3730→SB3734
SB3764	3		2×（1）	3.5×（1.7）	東から1.7・1.8	北から1.7	隅丸長方形	50	40～50	40	E－9°－S	SD3800→SB3764
SB3769	3		4×（1）	7.9×（2.1）	西から2.0・1.9・2.0・2.0	北から2.1	隅丸長方形	25～35	20～30	15	E－8°－S	
SB3770	3	南北棟	3×2	5.6×3.2	南から1.6・1.6・2.0	東から1.7・1.5	隅丸長方形	50	40	25	N－3°－E	SB3770→SD3740・3741
SB3771	3		（1）×（1）	（2.1）×（1.3）	南から2.1	東から1.3		25	20	5	N－2°－W	SB3771→SD3744
SB3772	1		3×（1）	6.3×（1.6）	東から2.0・4.3（2間分）	南から1.6	隅丸長方形	30～40	20～35	30	E－3°－N	SB3775→SB3773
SB3773	1	（総柱建物）	2×（2）	4.7×（3.2）	東から2.4・2.3	南から1.6	隅丸長方形	60～80	40～50	25	E－6°－S	SB3775→SB3773
SB3775	1	東西棟	3×1・2	5.0×4.9	東から1.6・1.7・1.7	南から4.9	隅丸長方形	40～80	30～70	30	E－5°－S	SB3775→SB3773
SB3776	1		（1）×1・2	（1.8）×4.1	南から1.8	東から4.1	長方形	25～50	20～45	20	N－8°－E	
SB3777	1		（2）×（2）	（3.2）×（2.4）	東から1.8・1.4	北から1.4・1.0	隅丸長方形	50～60	50	30	E－5°－S	SF3792→SB3777→SK3779
SB3786	2		（2）×（1）	（3.8）×（2.7）	西から2.0・1.8	南から2.7	隅丸長方形	80	60～60	45	E－2°－S	SB3786→SB3731・3732、SD3715・3716
SB3795	1		2×（1）	3.8×（1.9）	東から1.9・1.9	北から1.9	楕円形	35～50	30～45	25	E－3°－S	
SB3806	3		（2）×（1）	（4.6）×（2.6）	北から2.4・2.2	西から2.6	隅丸長方形	65～70	50～65	25	N－6°－E	SD3800→SB3806
SB3816	3	東西棟	（5）×1	（9.6）×3.6	西から2.0・1.9・1.8・2.0・1.9	南から3.6	楕円形	20～35	15～30	15	E－19°－S	SD3800、SK3804→SB3816
SB3842	2	東西棟	3×2	（6.7）×3.9	東から2.2・2.3・2.2	南から1.8・2.1	不整な隅丸長方形	65～100	60～90	30	E－8°－S	SB3842→SA3823、SB3843・3847・3862・3865、SE3831、SD3824、SK3841・3881
SB3843	2	東西棟	3×2	6.6×4.3	東から2.3・2.2・2.1	南から2.2・2.1	不整な隅丸長方形	65～100	40～70	30	E－6°－S	SB3842、SB3839→SB3843→SB3865、SE3831、SD3824、SK3841
SB3844	2		3×2	6.8×（3.7）	東から2.3・2.2・2.3	北から1.9・1.8	隅丸長方形	70～90	50～75	50	E－6°－S	SB3844→SA3823、SB3847・3862
SB3845	2		2×1	4.8×（3.6）	東から2.3・2.5	北から3.6	隅丸長方形	45～70	40～50	40	E－8°－S	SB3845→SD3821・3824
SB3846	2		（2）×（1）	（4.9）×（1.7）	北から2.3・2.6	東から1.7	楕円形	45	40	20	N－4°－E	SB3863、SD3821→SB3846→SD3712、SK3822
SB3847	2	東西棟	5×1	9.6×3.6	東から1.9・1.9・1.8・2.0・1.9	北から3.6	楕円形	25～40	20～35	40	E－22°－S	SB3842・3844・3861・3862、SK3826→SB3847
SB3848	2		2×（1）	4.5×（3.4）	西から2.2・2.3	南から3.4	楕円形	30～60	30～40	40	N－29°－E	SB3848→SB3849、SD3818・3820・3821
SB3849	2		2×（1）	4.4×（2.6）	東から2.2・2.2	南から2.6	隅丸楕円形	35～70	30～55	20	E－15°－S	SB3848→SB3849→SD3818・3820・3821、SK3822
SB3853	1	南北棟	2×1	6.8×3.4	北から3.5・3.3	東から3.4	隅丸長方形	30～55	25～50	40	N－1°－W	SF3858A→SB3853
SB3861	2	東西棟	3×2	4.5×3.5	東から1.7・1.5・1.3	北から1.7・1.8	隅丸長方形	25～50	20～40	40	E－6°－S	SB3861→SA3823、SB3847、SD3818・3821、SK3822・3826
SB3862	2		2×（1）	4.2×（2.3）	西から2.1・2.1	北から2.3	楕円形	25～50	25～45	15	E－16°－S	SB3843・3844→SB3862→SB3847
SB3863	2		2×1	3.2×（1.5）	東から1.6・1.6	北から1.5	楕円形	20～40	20～30	25	E－13°－S	SB3863→SB3846・3865、SD3821
SB3864	2	東西棟	1×1	3.7×2.5	東から3.7	北から2.5	隅丸長方形	40～70	30～60	45	E－8°－S	SB3864→SD3712・3821、SK3829
SB3865	2		2×（1）	4.9×（2.5）	東から2.5・2.4	北から2.5	隅丸長方形	60～80	45～55	30	E－5°－S	SB3842・3843・3863→SB3865→SD3821・3879

掘立柱建物跡属性表

遺構名	区	平面形	断面形	規模（長軸×短軸：m）	深さ（cm）	構造	重複	堆積土などの特徴
SE3701	4	楕円形	下が狭い円筒形	1.9×1.6	90	素掘り		スクモを含む黒・オリーブ黒色粘土（自然）
SE3736	3	楕円形	漏斗状	2.2×2.1	80	素掘り	SD3787・3800、SK3750・3767→SE3736、SD3744	砂を互層に含む黒・黒褐色砂質シルト（自然）
SE3738	3	楕円形	漏斗状	1.8×1.7	80	素掘り	SD3800、SK3767→SE3738	砂を互層に含む黒褐色シルトや黒色粘土シルト（自然）
SE3739	3	楕円形	漏斗状	1.1×1.0	80	素掘り	SD3800→SE3739	砂を互層に含む黒褐色シルト・粘土質シルト（自然）
SE3752	3	楕円形	漏斗状	2.4×（1.2）	95	素掘り	SE3752→SD3742	地山砂を含むオリーブ黒・灰色粘土質シルト（自然）
SE3753	3	楕円形	下が狭い円筒形	1.8×（0.9）	105	素掘り	SD3800→SE3753	地山砂を含む黒褐・オリーブ黒色粘土質シルト（自然）
SE3754	3	楕円形	下が狭い円筒形	1.0×（0.9）	70	刳抜井戸側	SK3748→SE3754→SD3744、SK3735	本文参照　（36頁）
SE3807	3	楕円形	漏斗状	1.9×1.8	125	素掘り	SD3800→SE3807	黒褐・黒色シルトや砂を互層に含む黒褐色粘土（自然）
SE3831	2	楕円形	円筒形	1.6×1.4	105	素掘り	SB3842・3843→SE3831→SD3879	地山ブロックを含む灰黄褐色シルトや黒褐色シルト質粘土
SE3840	2	楕円形	漏斗状	（3.5）×（1.5）	130	井戸側？	SE3840→SD3872	上層：炭を含む暗褐・灰オリーブ・オリーブ黒色粘土。6層に灰白色火山灰が互層に堆積<自然> 下層：砂を含むオリーブ灰色シルト
SE3868	3	隅丸長方形	筒状	0.8×0.6	30（120）		SD3800→SE3868→SD3869、SK3802	1層：暗緑灰色粗砂（自然）　2層：黒色粘土ブロックを含む暗緑灰色シルト質砂

井戸属性表

遺構名	区	平面形	断面形	規模（長軸×短軸：cm）	深さ（cm）	方向	重複	堆積土などの特徴
SX3760	1	不整長方形	皿状	240×85	7	N－21°－W	SF3792→SX3760	地山ブロックを多く含む黒褐色粘土<人為>

墓跡属性表

遺構名	区	検出長（m）	上幅（cm）	下幅（cm）	深さ（cm）	断面形	方向	重複	堆積土などの特徴
SD3702	3	南13.5 北17.0（44.0）	110～170	40～70	55	逆台形	N－32°－E	SD3703→SD3702	酸化鉄や砂を少し含む黒褐・黒・オリーブ黒色粘土〈自然〉
SD3703	3	南10.5 北8.3（30.4）	40～130	20～100	35	逆台形	N－20°－E	SD3703→SD3702	炭・地山砂粒を含む褐灰色シルトや粘土質シルト〈自然〉
SD3704	4	（13.6）	210～250	30～40	55	逆凸形	N－35°－E		本文参照　（37頁）
SD3708	2	南5.5 北6.7（23.4）	120～150	60～90	40	U字形	N－2°－W、E－3°－N	SD3710・3820・3835→SD3708・3820	地山砂を含む黒色粘土質シルトや黒褐色シルト質粘土〈自然〉
SD3710	2	（13.8）	40～90	（30）	60	逆台形	E－2°－N	SD3710→SD3708	砂を互層に含む黒褐色粘土やシルト〈自然〉
SD3711	2	（36.0）	40～210	30～70	70	逆台形	E－8°－S	SB3730、SD3713・3717・3721・3722、SK3725、SF3714→SD3711→SB3729、SD3712	地山土を含む黒褐色シルト〈自然〉
SD3712	2	南5.2 北6.9（23.5）	70～110	20～100	30	U字形・皿状	N－14°－E	SB3730、SD3846・3864、SD3711、SK3829→SD3712、SK3822	炭を少し含む灰色砂質シルトやオリーブ黒色シルト質砂〈自然〉
SD3713	2	南7.0 北2.0（18.6）	40～50	15～35	15	逆台形	N－12°－E	SD3719→SD3713→SD3711	
SD3715	2	（13.9）	15～100	10～30	20	U字形	E－12°－S	SB3732・3786、SD3721・3722、SF3714→SD3715→SD3716、SK3726	地山ブロックを含む黒褐色シルト〈自然〉
SD3716	2	（7.1）	25～45	20～25	5	U字形	E－20°－S	SB3731・3732・3786、SD3715・3721→SD3716	
SD3717	2	（2.0）	40～（60）	25～30	15	U字形	E－18°－S	SD3717→SD3711	
SD3719	2	（6.3）	20～40	15～35	15	U字形	E－14°－S	SD3719→SD3712・3713	
SD3721	2	（4.0）	60～90	20～70	40	U字形	N－23°－E	SD3721→SD3711・3715・3716	地山ブロックを含む黒色シルト〈人為〉
SD3722	2	（7.1）	80～120	40～100	20	U字形	E－10°－N	SB3731→SD3722→SD3711・3715、SK3725	炭・焼土・地山を含む黒褐色シルト〈人為〉
SD3740	3	南6.9 北22.0（48.6）	240～370	50～100	80	U字形	N－14°－E	SD3746、SK3788→SD3740	砂を含む褐灰色シルトや黒・黒褐色粘土質シルト〈自然〉
SD3741	3	南10.3 北21.0（47.7）	30～60	20～30	20	U字形	N－32°－E	SB3770、SK3788→SD3741→SD2744	地山砂を含む黒褐色シルトや灰黄色砂質シルト〈自然〉
SD3742	3	（15.2）	35～45	15～20	20	U字形	N－31°－E	SE3752、SD3744・3749→SD3742	地山土を少し含む黒褐色シルト〈自然〉
SD3743	3	（12.5）	40～90	30～30	15	U字形	N－1°－E	SD3800、SF3796→SD3743→SK3737・SD3767	砂を含む黄灰色シルト〈自然〉
SD3744	3	（24.9）	110～160	40～95	15	皿状	E-22°－S	SB3771、SE3736、SD3741・3742・3749・3751・3800、SK3735・3750・3767・3789→SD3744→SE3738	地山ブロックを少し含む黒褐色シルト
SD3745	3	（16.0）	310～450	150～220	65	逆台形	N－34°－E	SD3747→SD3745	本文参照　（47頁）
SD3746	3	（9.7）	60～80	35～45	20	U字形	N－2°－E	SD3746→SD3740	灰白色火山灰小ブロックを含む黒褐色シルト〈自然〉
SD3747	3	（8.4）	45～70	25～45	25	逆台形	N－4°－E	SD3747→SD3745	地山砂を含む灰黄褐・黄灰色砂質シルト〈自然〉
SD3749	3	南7.3 北17.5（35.2）	30～120	20～55	35	逆台形	N－24°－W	SD3749→SD3742・3744・3870・3871、SK3748・3789	炭を含む黄灰・灰色粘土質シルトや地山砂を含む黄灰色砂質シルト〈自然〉
SD3751	3	（2.9）	60～100	45～65	30	逆台形	N－14°－E	SD3751→SD3744	黒褐色シルトや灰黄色シルト質砂〈自然〉
SD3757	1	南9.2 北10.1（36.2）	100～（280）	－	（50）	皿状の逆台形	南：真北　北：N－18°－W	SD3852・3857、SK3763、SF3762→SD3757	黒褐色・黒色・オリーブ黒色粘土〈自然〉
SD3759	1	南3.4 北8.0（24.5）	70～150	30～60	55	逆台形	南：N－2°－W　北：N－1°－E	SF3885→SD3759	地山土を少し含む黒褐・黒・オリーブ黒色粘土。〈自然〉
SD3765A	1	南3.3 北3.9（18.4）	50～100	25～80	20	U字形	南：N－5°－W　北：N－22°－W	SF3793・3867A・3886A・B、SK3785→SD3765A→SD3765B・3850、SK3785	
SD3765B	1	南3.4 北19.4（44.0）	35～70	15～35	15	U字形	南：N－17°－W　北：N－21°－W	SK3785、SF3884・3886A・B、SD3765A→SD3765B→SD3850・3851	
SD3766	1	南4.1 北18.3（35.5）	60～120	20～70	60	U字形	N－21°－W	SF3867B、3886A・B→SD3766→SD3850・3851	炭を含む黒・黒褐色シルトや地山砂を含むオリーブ黒色シルト質粘土〈自然〉
SD3783A	1	（2.7）	－	50	45	段付逆台形	N－9°－E		黄灰・黒褐色シルト
SD3783B	1	（2.9）	100～150	60	50	逆台形	N-3°－W		黄灰色シルトや褐灰色粘土質シルト　3層：灰白色火山灰（2次）〈自然〉
SD3787	3	（18.6）	30～60	15～30	20	U字形	N-3°－W	SD3787→SE3736、SK3767、SF3796	
SD3790	3	（11.0）	40～100	30～80	5	皿状	N－1°－E	SD3800→SD3790→SK3750	黒褐色砂質シルト
SD3791	3	（5.6）	50～100	20～70	10	U字形	真北	SD3800→SD3791→SK3750	暗灰黄色シルト
SD3800	3	南13.2 北17.5（42.3）	1000～1200	580～830	（120）	皿状	N－17°－E	SD3800→SA3768、SB3764・3806・3816、SD3743・3744・3787・3790・3791・3801・3803・3805・3814・3815・3875、SK3735・3737・3750・3767・3802・3804・3873・3877・3876、SE3736・3738・3739・3753・3807・3868、SF3796	褐・暗灰黄・暗青灰色砂（自然）
SD3801	3	（20.3）	130～170	45～80	70	逆台形	N－29°－E	SE3868、SD3800・3805・3814、SK3802・3874→SD3801	砂を含む黒褐色シルトやオリーブ黒色粘土〈自然〉
SD3803	3	（11.9）	35～160	25～120	10	皿状	N－23°－E	SD3800、SK3876→SD3803→SK3804	灰白色火山灰を互層に少し含む暗褐色砂シルト〈自然〉
SD3805	3	（9.6）	70～150	40～130	10	逆台形	E－15°－S、N－3°－E	SD3800・3814→SD3805→SD3801	砂を含む褐灰色粘土質シルト〈自然〉
SD3813	3	（3.8）	70～125	50～100	10	U字形	E－14°－S、N－5°－W		
SD3814	3	（14.8）	20～35	20～30	10	U字形	N－12°－E	SD3800→SD3814→SD3801・3805・3815・3875	地山ブロックを含む暗褐色粘土質シルト
SD3815	3	（2.7）	55～80	15～20	10	皿状	E－7°－S、N－7°－E	SD3800・3814→SD3815	
SD3818	2	（5.1）	50～105	20～30	15	U字形	E－27°－N	SB3848・3849・3861、SD3820→SK3822、SD3818	黒褐色砂質シルト
SD3820	2	（39.0）	300～420	120～340	80	逆台形	E－28°－S、N－20°－E	SB3848・3849、SD3821・3833・3880→SD3708・3820・3835→SD3818・3879	炭・地山砂を含む黒褐・暗褐・暗緑灰色粘土質シルト〈自然〉
SD3821	2	（13.5）	210～270	100～180	35	皿状	N－18°－E	SB3845・3848・3849・3861・3863・3864・3865→SD3821→SD3820・3824・3846、SK3822	暗褐・黒褐色シルト〈自然〉
SD3824	2	（13.2）	35～75	15～30	5	皿状	E－21°－S	SB3842・3843・3845、SD3821、SK3826→SD3824→SD3879	炭・地山砂を含む黒色シルト〈自然〉
SD3825	2	（28.5）	310～480	100～170	60	皿状	E－27°－S	SD3825→SD3820	黒褐色粘土質シルトや炭を含む暗褐色粘土〈自然〉
SD3830	2	（12.7）	420～480	170～230	90	段付U字形	E－8°－S	SD3834、3837→SD3830	砂を互層に含むオリーブ黒色粘土〈自然〉
SD3833	2	（5.3）	50～80	15～20	10	皿状	N－2°－E	SD3880→SD3833→SA3823、SD3820	
SD3834	2	（23.5）	150～470	140～320	45	逆台形（底面凹凸）	N－8°－E	SD3836→SD3834→SD3830・3835	炭・地山土を含む黒褐色シルトや黄灰色粘土質シルト〈自然〉
SD3835	2	南5.5 北13.0（29.7）	20～195	15～80	60	逆台形	E－12°－S、N－2°－E	SD3834→SD3820・3835→SD3708・3820	地山ブロックを含む黒・オリーブ黒色シルト質粘土〈自然〉
SD3836	2	（4.8）	20～80	15～20	25	逆台形	E－31°－N、E－2°－N	SD3836→SD3834、SK3838	
SD3837	2	（14.3）	40～190	30～150	40	逆台形	N－2°－W	SD3837→SD3830・3872	地山砂・炭を少し含むオリーブ黒・灰色粘土〈自然〉
SD3850	1	1区40.0　2区5.5（51.7）	180～450	120～255	65	逆台形	E－7°－N	SD3765B・3766→SD3850	地山小ブロック・炭を少し含むオリーブ黒・灰色粘土〈自然〉
SD3851	1	1区35.0　2区2.0（41.7）	145～225	75～120	55	U字形	E－8°－N	SD3766・3882→SD3851	地山土を含むオリーブ黒・灰色粘土〈自然〉
SD3852	1	（10.7）	170～（235）	110～120	65	逆台形	E－7°－N	SF3858A・B→SD3852→SD3757	地山土を含むオリーブ黒・灰色粘土〈自然〉
SD3857	1	南2.0 北6.0（22.0）	25～50	15～30	40	U字形	N－1°－W	SF3859B・SF3860→SD3857→SD3757	地山砂を含むオリーブ黒色粘土・砂質シルト
SD3869	2	（4.7）	－	－	－	－	E－20°－S、E－4°－N		
SD3870	3	（17.3）	35～95	20～55	10	U字形	N－25°－E、N－29°－E	SD3749→SD3870	
SD3871	3	（3.9）	60～100	35～55	10	U字形	S－13°－W、E－16°－S	SD3749→SD3871	
SD3872	2	（3.2）	（120）	（100）	15	－	E－35°－S	SE3840、SD3837→SD3872	炭・酸化鉄を含む黄褐・灰黄褐色シルトや酸化鉄を含む黒褐色粘土質シルト
SD3875	3	（3.2）	30～35	15～20	10	U字形	E－30°－S	SD3801・3814→SD3875→SK3802	
SD3878	3	（13.2）	40～55	20～30	10	U字形	N－11°－E	SD3878→SK3810	
SD3879	2	11.8	40～55	10～30	10	U字形	N－34°－E	SB3865、SD3820・3824、SE3831→SD3879	
SD3880	2	3.8	40～50	20～25	15	皿状	N－32°－E	SD3880→SA3823、SD3820・3833	
SD3882	1	（5.3）	35～45	20～25	10	皿状	N－6°－W	SD3882→SD3851	
SD3883	2	（5.5）	－	－	－	－	N－13°－E、W-7°－S	SD3883→(SB3732・3786)	
SD3887	2	（5.0）	40～65	10～15	10	皿状	N-42°-E		
SD3888	3	（1.0）	45～70	15～40	10	皿状	N－29°－E		

溝跡属性表

遺構名	区	平面形	断面形	規模（長軸×短軸：cm）	深さ（cm）	方向	重複	堆積土などの特徴
SK3707	2	不整楕円形	皿状	67●×2●0	15	E－4°－S	SK3707→SB3728	炭・焼土・地山ブロックを多く含む黒褐色粘土〈人為〉
SK3709	2	楕円形	皿状	(120) ×140	40	N－12°－W	SB3728→SK3709	黒褐色ｼﾙﾄ・粘土〈自然〉
SK3724	3	円形	逆台形	怪●0	40	－		黄灰・灰色粘土質シルト　2層：灰白色火山灰（1次）　〈自然〉
SK3725	2	（不整楕円形）	逆台形	(260) ×（●0）	70	E－28°－S	SK3725→SD3711・3712	地山土を含む黒褐色シルト
SK3726	2	不整長方形	皿状	150×●●●	●0	N－14°－W	SD3715・3722、SB3731→SK3726	炭を少し含む暗褐色シルト
SK3727	2	（不整長方形）	皿状	80×（50）	20	N－31°-W		地山ブロックを含む黒褐色シルト
SK3735	3	楕円形	逆台形	440×350	●00	E－36°－N	SE3754、SD3800、SK3748→SK3735→SA3768、SD3744	黒色シルトやオリーブ黒色粘土〈自然〉
SK3737	3	楕円形	逆台形	260×220	70	E－20°－S	SD3743・3800、SK3767→SK3737	黒褐・オリーブ黒色砂質シルトや黒色粘土質シルト、暗緑灰色シルト質砂〈自然〉
SK3748	3	楕円形	逆台形	250×（●80）	90	E－45°－N	SD3749・3789→SK3748→SE3754、SK3735	本文参照　（40頁）
SK3750	3	楕円形	皿状	450×440	75	N－36°－E	SD3790・3791・3800、SK3767→SK3750→SE3736、SD3744	砂を含む黒褐色粘土質シルト、オリーブ黒色砂質シルト、灰黄・暗緑灰色シルト質砂〈自然〉
SK3755	1	不整楕円形	皿状	●20×75	●5	N－20°-W		炭を含む黒色シルト質粘土や地山ブロックを多く含む黒褐色粘土
SK3763	1	楕円形	逆台形	95×60	30	N－13°－E	SF3792→SK3763→SD3757	黒褐色シルト・粘土
SK3767	3	（不整長方形）	逆台形	(340) ×（●●0）	25	E－15°－S	SD3743・3787・3800→SK3767→SE3736・3738、SK3750・3737・SD3744	地山ブロックを少し含む黒褐色粘土質シルト〈自然〉
SK3774	1	楕円形	皿状	60×20	20	E－9°－N		
SK3779	1	不整楕円形	皿状	●55×（75）	●0	N－4°－E	SB3777、SF3792→SK3779→SK3780	地山ブロックを多く含む黒褐色粘土
SK3780	1	楕円形	皿状	●30×65	20	N－17°－E	SK3779、SF3792→SK3780	炭・地山ブロックを含む黒・黒褐色粘土
SK3785	1	不整楕円形	皿状	150×●0	30	E－14°－S	SK3785→SD3765A・B	炭・地山土を含む黒褐色シルト・褐灰色粘土質シルト・浅黄色シルト砂〈自然〉
SK3788	3	（長方形）	皿状	(●20) ×70	20	E－22°－N	SK3788→SD3740・3741	
SK3789	3	（長方形）	皿状	●00×●0	●5	N－7°－W	SD3749、SK3748→SK3789→SD3744	
SK3802	3	楕円形	皿状	3●0×330	60	N－29°－E	SE3868、SD3800・3875→SK3802→SD3801	黒色粘土質シルトや暗褐色粘土と暗オリーブ色砂との互層〈自然〉
SK3804	3	楕円形	皿状	200×●40	25	N－22°－E	SD3800・3803→SK3804→SB3816	砂を含む灰褐色シルトや黒褐色粘土質シルト〈自然〉
SK3808	3	楕円形	逆台形	●05×85	30	E－25°－N	SK3809→SK3808	地山砂を含む灰黄褐・褐灰色シルト〈自然〉
SK3809	3	（楕円形）	逆台形	70×65	40	N－28°－N	SK3809→SK3808	灰黄褐色砂質シルト〈自然〉
SK3810	3	楕円形	逆台形	265×（●85）	40	E－24°－S	SD3878、SK3811→SK3810	黒褐・褐灰色粘土〈自然〉
SK3811	3	長楕円形	逆台形	(●00) ×（80）	3●	W－15°－N	SK3811→SK3810	地山砂を含む褐灰色粘土や暗灰黄色シルト質砂〈自然〉
SK3812	3	長楕円形	逆台形	30●×●40	50	E－21°－N		
SK3822	2	楕円形	皿状	(620) ×580	85	E－20°－S	SA3823、SB3846・3849・3861、SD3821→SK3822、SD3712・3818	本文参照　（30頁）
SK3826	2	不整長方形	皿状	280×（●80）	30	E－24°－S	SB3861、SK3827→SK3826→SB3847、SD3824	炭・地山砂を含む黒色シルト
SK3827	2	楕円形	皿状	350×（●20）	30	E－25°－S	SK3827→SA3823、SK3822・3826	地山砂を多く含む黄灰・黒色シルト
SK3829	2	楕円形	皿状	(200) ×●90	●0	E－37°－S	SB3864→SK3829→SD3712	炭・焼土ブロック・地山土を含む黒褐色シルト
SK3838	2	楕円形	逆台形	(●20) ×●20	35	N－●0°－E	SD3836→SK3838	汚れた地山砂を多く含む暗灰黄シルト質砂や地山ブロックを多く含む黒褐色砂質シルト〈人為〉
SK3839	2	楕円形	皿状	2●0×（●0）	●0	E－35°-S	SK3839→SA3723、SB3843	
SK3841	2	楕円形	皿状	(250) ×●70	3●	N－6°－E	SB3842・3843→SK3841	にぶい黄褐色砂質シルトや灰白色火山灰・炭を含む褐灰色シルト
SK3854	1	楕円形	皿状	●●0×●00	●5	E－30°－N		地山砂を少し含む黒・黒褐色シルト〈自然〉
SK3855	1	楕円形	皿状	(●●0) ×●0	●0	E－●9°－S	SF3859B→SK3855	地山砂を含む黒褐色シルト〈自然〉
SK3866	2	（隅丸長方形）	皿状	●05×（●0）	●0	E－6°－S		
SK3873	3	楕円形	逆台形	●●0×85	20	E－35°－N	SD3800→SK3873	灰白色火山灰を含む褐灰色シルト
SK3874	3	溝状	逆台形	(●20) ×45	●0	N－27°－W	SK3874→SD3801	
SK3876	3	隅丸長方形	皿状	●●0×6●	●0	N－28°－E	SK3876→SD3803	地山砂ブロックを層状に含む暗褐色砂質シルト
SK3877	3	楕円形	皿状	90×55	5	E－●0°－S	SD3800→SK3877	地山砂ブロック・炭を含む黒褐色シルト
SK3881	2	楕円形	皿状	●70×（70）	●5	E－●6°－S	SB3842→SK3881→SA3823	

土壙属性表

番号	区	条数	傾斜	断面形	長さ（m）	上幅（cm）	下幅（cm）	深さ（cm）	方向	重複	堆積土などの特徴
SF3714	2	4	●.5	U字形	2.6	20～50	●5～30	15	N－24°－E	SF3714→SB3731、SD3711・3715・3716	地山ブロックを含む黒褐色シルト
SF3762	1	2	●.8	U字形	(3.7)	●5～3●	●0～20	●0	E－9°－S	SF3792→SF3762→SD3757	
SF3792	1	7	●.1～●.4	U字形	(7.2)	●5～35	●0～●5	2●	N－1°－E	SF3792→SB3777・3778、SX3760、SK3763・3779・3780、SF3762	
SF3793	1	4	●.7～●.8	U字形	(3.0)	●0～20	5～●0	●0	N－7°－E	SF3793→SF3794・SD3765A	
SF3794	1	2	●.5	U字形	●.2	●5～20	●0～●5	3	E－●7°－S	SF3793→SF3794	
SF3796	3	6	南●.1　北●.5	U字形	3.2	2●～40	●0～3●	●5	E-9°－S	SD3787・3800→SF3796→SD3743	地山砂を含む黒褐色シルト
SF3858A	1	6	●.8	U字形	(●0.4)	●5～30	●0～20	●0	N-2°－E	SF3859A・B、SF3860→SF3858A→SB3853、SD3852	地山土・灰白色火山灰小ブロックを含む黒褐色シルト質粘土
SF3858B	1	2	●.9	U字形	(4.0)	●5～30	●0～20	●0	N－●°－W	SF3859A→SF3858B→SD3852	地山土・灰白色火山灰小ブロックを含む黒褐色シルト質粘土
SF3859A	1	3	●.6～●.9	U字形	(6.9)	20～40	●5～30	●0	E－20°－S	SF3859A→SK3855、SF3858A・B	地山小ブロックを含む黒褐色シルト質粘土
SF3859B	1	3	2.7	U字形	(4.4)	●5～40	●0～30	●0	E－●8°－S	SF3860→SF3859B→SD3857、SK3855	地山小ブロックを含む黒褐色シルト質粘土
SF3860	1	5	●.6～●.9	U字形	(5.8)	●5～40	●0～30	●0	E－0～4°－S	SF3860→SF3858A・SF3859B、SD3857	地山小ブロックを多く含む黒褐色シルト質粘土
SF3867A	1	7	0.9	U字形	(2.6)	●5～25	●0～2●	5	N－●°－E	SF3867A→SD3765A、SF3884・3886A・B	地山小ブロックを少し含む黒褐色シルト質粘土
SF3867B	1	3	●.3～●.5	U字形	(3.2)	●5～25	●0～20	5	N－3°－W	SF3867B→SD3766、SF3886A・B	地山小ブロックを少し含む黒褐色シルト質粘土
SF3884	1	5	●.5～2.●	U字形	(3.4)	●5～30	●0～20	●0	N－2°－W～N－7°－E	SF3886A・B・3867A→SF3884→SD3765B	地山土・灰白色火山灰小ブロックを含む黒褐色シルト質粘土
SF3885	1	2	●.5	U字形	4.2	20～3●	●0～25	5	E－●°－S	SF3885→SD3759	地山小ブロックを多く含む黒褐色シルト質粘土
SF3886A	1	3	0.9～●.2	U字形	8.2	●5～35	●0～25	●0	E－3°－S	SF3867A・B→SF3886A→SD3765A・B・3766・3886B、SF3884	地山小ブロックを多く含む黒褐色シルト質粘土
SF3886B	1	3	●.1	U字形	6.2	20～30	●0～20	●0	E－●0°－S	SF3867A・B→SF3886A→SD3765A・B・3766・3886B、SF3884	地山小ブロックを含む黒褐色シルト質粘土

小溝状遺構属性表

多賀城市山王遺跡出土木製品･漆器の樹種同定

吉川純子　古代の森研究舎

1．樹種同定結果

山王遺跡より出土した木製品33試料の同定をおこなった。漆器の種類は皿、椀、杓子、不明破片である。木製品は曲げ物、曲物蓋板、挽物高台皿、馬形、柄、下駄、付け木で、建築材は井戸側、柱、礎盤、部材である。なお、挽物高台皿、馬形についてはパリノサーヴェイ株式会社が同定を行った。木製品からはステンレスの剃刀にて横断面、放射断面、接線断面の薄片を切り出し、封入剤ガムクロラールにてプレパラートを作成し、生物顕微鏡で細胞の配列や構造等を観察し、樹種を同定した。椀については腐敗が激しく、横断面しか作成できなかった試料がある。同定結果を表1に示す。

木製品：曲げ物には細かい細工や薄手にしてもこわれにくいヒノキを用い、蓋や底板にはヒノキ、モミ属のほか、サクラ属、カバノキ属を用いている。山王遺跡では５～８世紀頃には容器にほとんどヒノキが使われていなかったが、９世紀の木製品樹種には多くのヒノキが使用されている（松葉ほか、1996)。したがってこの頃から他地域との木材の流通が頻繁に行われるようになっていったと考えられる。また、蓋や底には側板ほどの加工しやすさが要求されないため、周囲に分布する材を用いていたようである。サクラ属は細工物に用いられるが、モミ属、カバノキ属は質はそれほどよくない。挽物高台皿、折敷にはケヤキが用いられている。柄と思われる木製品はコナラ属であった。下駄にはハリギリ、イヌガヤの丸木から刳りぬいてつくられていた。下駄は通常クリやケヤキなどが利用されることが多いが、ハリギリは東北に多い高木でケヤキに構造が非常に似ているためケヤキのかわりに使われたと思われる。

祭祀具として用いられる馬型は、山王遺跡八幡地区と同様モクレン属であった。現在の東北地方でも、火除けの為に作られる飾りにはミズキかヤナギを用いるなど、樹種を選択している傾向がある。今後同定される試料数が増えないとなんともいえないが、単に周囲にある樹を利用するのではなく、モクレン属を意識して選択していた可能性が考えられる。

漆器：漆の食器にはすべてブナが使われていた。また、不明の漆器片については、漆塗面以外はすべて炭化していたため横断面の一部のみ確認することが可能で、針葉樹であった。椀のうち１試料はウルシの皮膜のみの残存であったため、同定不能であった。山王遺跡。で指摘されるように、ブナ材は質が悪いが当時の東北にはいたるところにブナが生育していたと考えられ、日常使用の容器材として頻繁に利用されていたと考えられる（松葉ほか、1997)。

建築材：井戸側はモミ属とケヤキで、刳り抜き材はモミ属が使われていた。柱材と礎盤はクリであった。建築材や土木材は神社仏閣などの特殊建築を除いては、その地域内で資材を調達すると推測され、周囲には建築材に適するモミ属やクリ、ケヤキなどが多く分布していたと考えられる。

2．出土した樹種の木材解剖学的記載

イヌガヤ（*Cephalotaxus harringtonia* K.Koch f. *drupacea* Kitamura）

表1　山王遺跡出土木製品樹種同定結果

年　代	遺　構	No.	種　類	樹　種	縦×横 ないし径（mm）	厚さ (mm)
9-10世紀	SB3776	15	柱材	クリ	φ120	
9-10世紀	SB3775	16	礎盤	クリ	400×130	32
9-10世紀	SE3868井戸跡底面	24	曲げ物	ヒノキ	φ4●●	5.5
10世紀半ば頃	SK3750下層	13	曲物底板	モミ属	φ115	8
10世紀半ば頃	SK3750下層	14	柄?	コナラ節	168×38	23
10世紀前半頃	SE3754底面	5	挽物高台皿	ケヤキ	200×27	
10世紀前半頃	SE3754	6	曲物蓋板	ヒノキ	φ190	1●
10世紀前半頃	SE3754	7	井戸側	モミ属	760×400	60
10世紀前半頃	SE3754	8	井戸側	ケヤキ	410×200	30
10世紀前半頃	SE3754	9	井戸側	モミ属	470×125	22
10世紀頃	SD3710	1	曲物底板	ヒノキ	φ100	5
10世紀半ば頃	SK3735底面直上	10	不明	モミ属	387×60	7
10世紀半ば頃	SK3735下層	11	不明	サワグルミ	−	−
10世紀半ば頃	SK3802土坑	21	付け木	アカマツ	64×15	8
10世紀頃	SB3853建物跡N2E2	22	柱材	クリ	232×200	54
10世紀頃	SB3853建物跡N2E2	23	礎板	クリ	360×123	32
16世紀後半以降	SD3711	2	折敷底板	ケヤキ	165×80	5
17世紀以降	SE3739上層	12	馬形（木偶状）	モクレン属	116×42	129
17世紀以降	SD3801溝	18	部材	スギ	100×52	37
19世紀	SD3820溝底面	2●	下駄	イヌガヤ	160×94	48
19世紀	SD3820溝	漆7	椀	ブナ	−	−
18-19世紀	SA3823	漆8	椀	ブナ	−	−
19世紀以降	SD3818溝	19	曲げ物蓋板	サクラ属	φ90	9
19世紀以降	SK3822土坑	漆9	杓子	ブナ	φ100	26
18-19世紀	SD3740	漆1	椀	ブナ	φ110	35
18-19世紀	SD3801溝	漆5	不明	針葉樹	4●×34	11
18-19世紀	SD3801溝	漆6	皿	ブナ	φ64	1●
19世紀	SD3757	4	不明	クリ	85×53	15
18-19世紀	SD3745	3	曲物底板	カバノキ属	φ32	15
近世	A1区	17	下駄	ハリギリ	6●×6●	20
不明	P3720	漆2	椀	ブナ	−	−
不明	表土直下	漆3	椀	漆皮膜のみ	−	−
不明	表土	漆4	椀	ブナ	φ120	30

年輪が不明瞭で、早材と晩材の差がなくきわめて均質な材である。早材部にも樹脂細胞が多い材であるが、この試料では比較的少なかった。仮道管の内壁にはらせん肥厚が多数確認できる。分野壁孔はトウヒ型で1分野に2個程度分布する。イヌガヤは現在の北限が岩手県であり、直径は20〜30cm程度まで成長する。材は緻密でろくろ細工などにも用いられる。

モミ属（*Abies*）早材から晩材への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅が狭い。放射柔細胞の壁は厚く、じゅず状末端壁を有する。本遺跡の試料では分野壁孔は腐敗してほとんど観察が不可能なほど溶けてしまっていた。

アカマツ（*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.）

横断面では比較的大型の垂直樹脂道が見られ、接線断面でも水平樹脂道が見られる。分野壁孔は窓状で放射仮道管の内壁が鋸歯状に突出している。

スギ（*Cryptomeria japonica* D.Don）

早材から晩材への移行はやや急で年輪界は明瞭である。分野壁孔はスギ型で1分野に1から3個分

布している。

ヒノキ（*Chamaecyparis obtuse* Endl.）

早材から晩材への移行はゆるやかで晩材部がきわめて狭く比較的均質な材である。晩材部には樹脂細胞が接線方向に散在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型で、１分野に２個程度分布する。

サワグルミ（*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.）オニグルミに良く似た散孔材で道管はやや細く、配列ははっきりしない。オニグルミとの相違点は放射細胞がほとんど２列で紡錘形がほそいことである。

カバノキ属（*Betula*）比較的大きい小道管が均一に配列する散孔材である。放射細胞はほぼ同性、道管内には階段状穿孔がある。

サクラ属（*Prunus*）

道管がほぼ平等に配列する散孔材であるが、晩材で道管数が急減するので年輪は比較的わかりやすい。道管は単穿孔で側壁には交互壁孔とらせん肥厚がある。放射組織は１～３列程度で、サクラ属の中には放射細胞の形の違いがわかりにくいものが多いがこの試料は平伏細胞と方形細胞がはっきりしており、異性であることが明瞭にわかる。

ケヤキ（*Zelkova serrata* Makino）大きい導管が年輪界付近に１列並び、その後小道管が集まって配列する環孔材。小道管は多角形で多数が円形または接線状の集団管孔を形成している。放射組織は異性で、縁辺は方形細胞からなり、しばしば大型のしゅう酸石灰の結晶を含んでいる。

ハリギリ（*Kalopanax pictus* Nakai）大きい導管が年輪界付近に１列並び、その後小道管が集まって配列するケヤキに似る環孔材。道管は単穿孔。放射組織の輪郭がケヤキよりも丸味を帯び、結晶細胞はない。また道管と放射組織の間の壁孔がケヤキよりも大きい。

引用文献

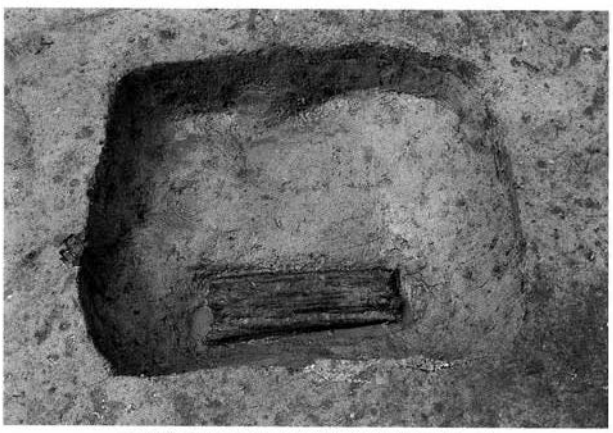
松葉礼子・鈴木三男．1997．多賀城市山王遺跡八幡地区出土木質遺物の樹種同定．「山王遺跡。」多賀城市教育委員会、建設省東北地方建設局．180-191．

松葉礼子・鈴木三男．1996．宮城県多賀城市山王遺跡多賀前地区出土木材の樹種．宮城県文化財調査報告書第170集「山王遺跡」－仙塩道路建設完形遺跡発掘調査報告書多賀前地区遺物編－．宮城県教育委員会、建設省東北地方建設局．239-283．

1区北側調査区全景（E→）

1区南側調査区全景（E→）

1区南側SB3773・3775建物跡（S→）

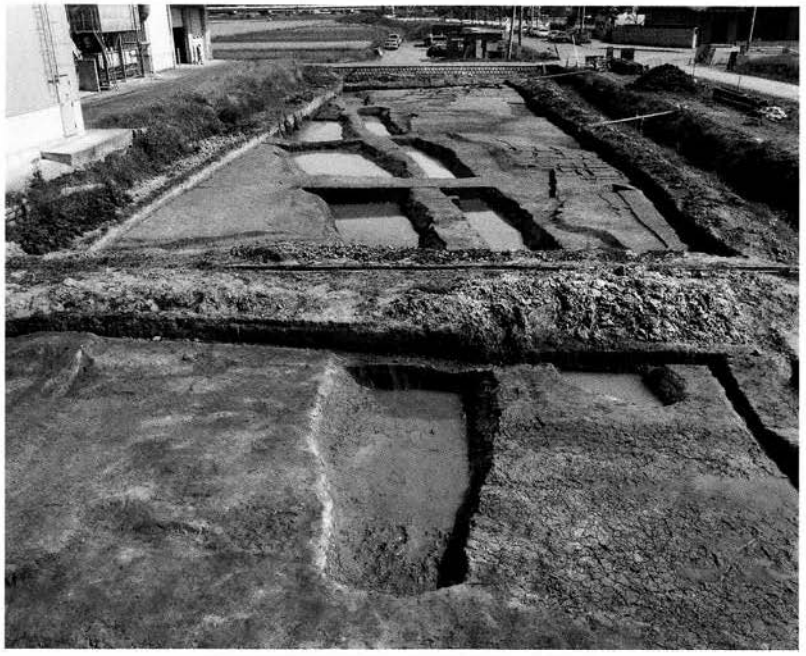


1区南側SB3775建物跡礎板（S→）

図版 1

1区北側SB3853建物跡柱穴断面（W→）

1区北側SB3853建物跡柱穴断面（E→）



1区北側SD3850・3851溝跡（W→）

1区北側SD3850溝跡断面（W→）

1区北側SD3852溝跡断面（W→）

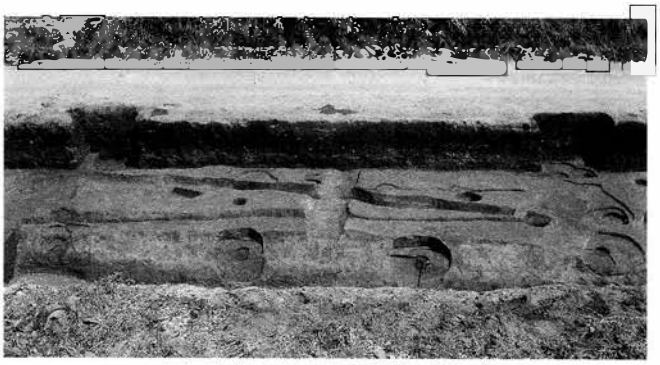
1区北側東端小溝状遺構群（E→）

1区北側西部小溝状遺構群（E→）

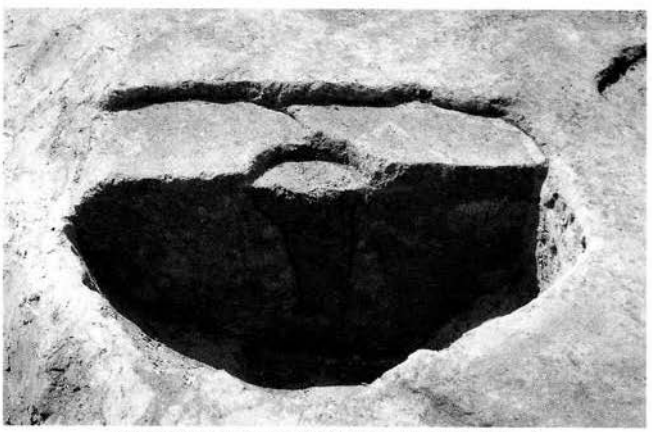
図版2

2区北側調査区全景（W→）

2区南側調査区全景（W→）



2区南側SB3730建物跡（S→）



2区南側SB3730建物跡柱穴断面（E→）

図版3

2区北側建物跡群（E→）

2区北側SE3831井戸跡（E→）

2区北側SE3840井戸跡断面（W→）

2区南側SD3711・3722溝跡断面（E→）

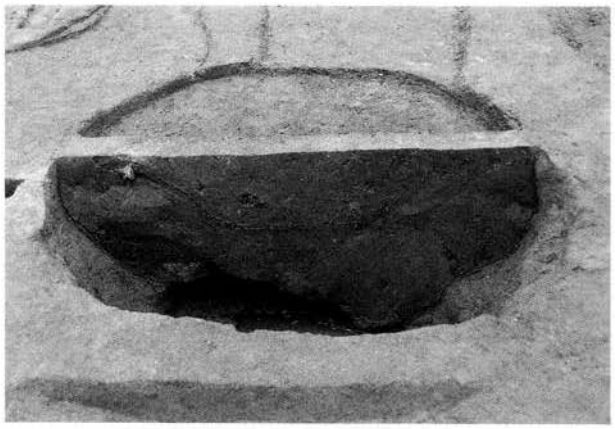
3・4区北側調査区全景（E→）

図版4

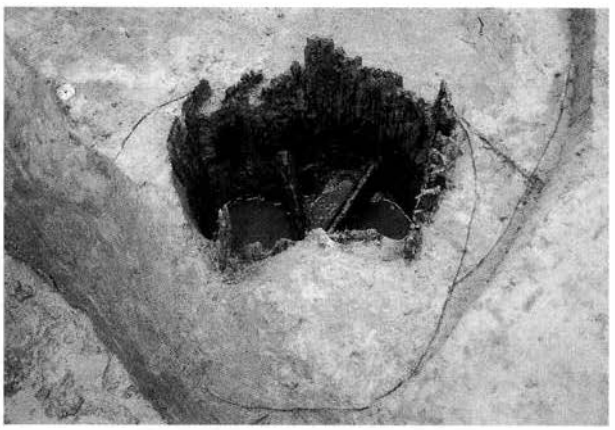
3・4区南側調査区全景（E→）

3区北側SB3806建物跡（W→）

3区北側SB3806建物跡柱穴断面（S→）

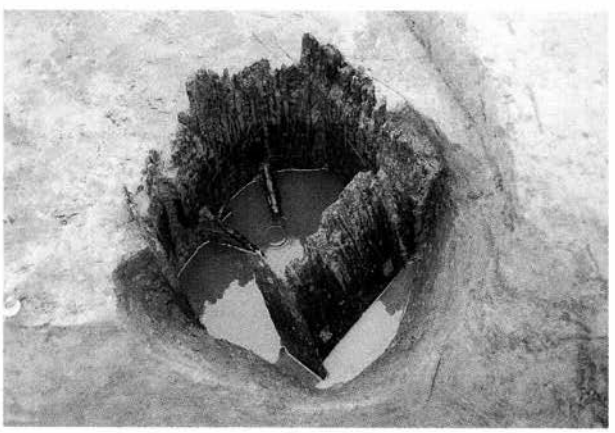


3区南側SE3738井戸跡断面（E→）



3区南側SE3754井戸跡（E→）

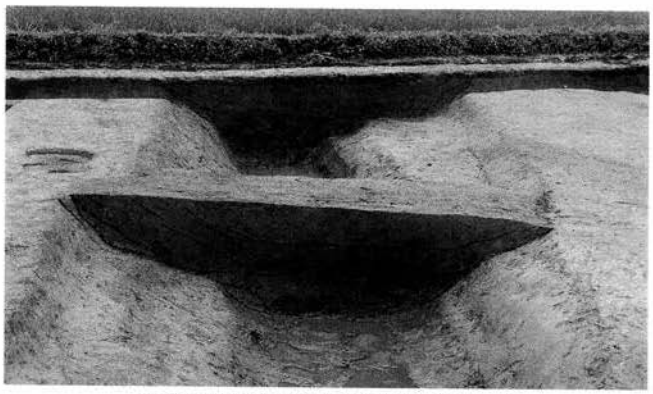
3区北側SE3807井戸跡（S→）



3区南側SE3754井戸跡井戸側（SE→）

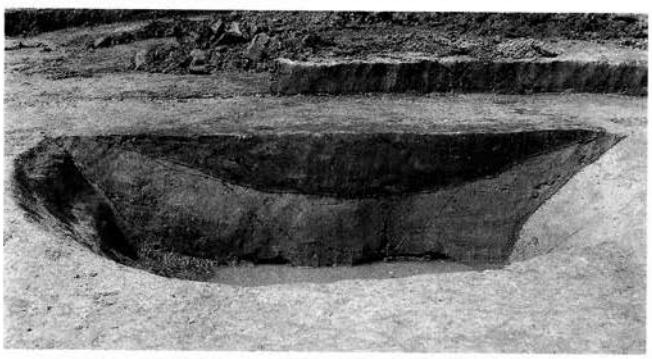
図版5

3区南側SD3740・3745・3746・3747溝跡（NE→）



3区南側SD3740溝跡断面（NE→）

3区南側SD3800河川跡断面（N→）



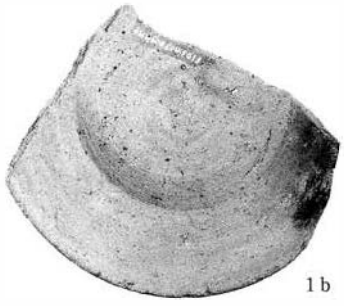
3区南側SK3735土壙断面（S→）

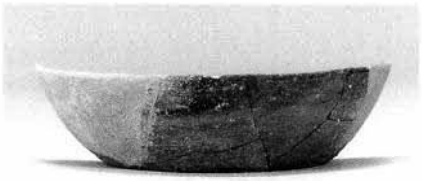
3区南側SK3750土壙断面（W→）

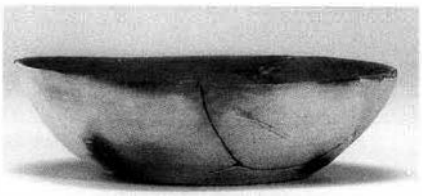
3区北側SD3801溝跡、SK3802土壙断面（SW→）

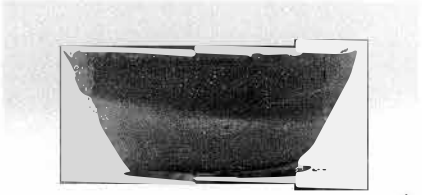
3区北側SD3801溝跡、SK3802土壙（SW→）

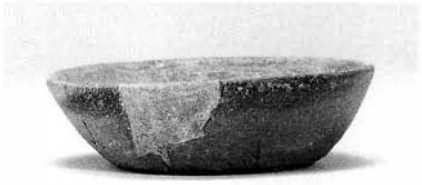
図版6


1b


2

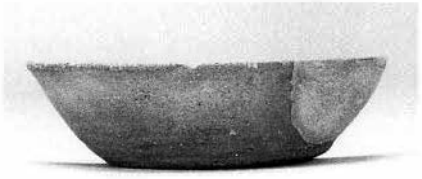

3

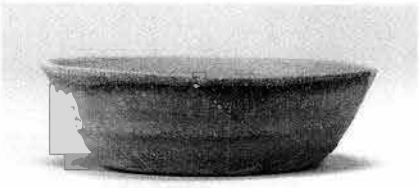

4


5

1a

7a

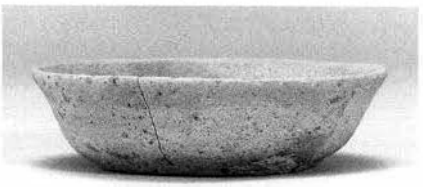

8a


6

7b(拡大)

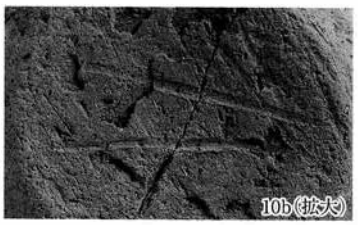
8b

9a

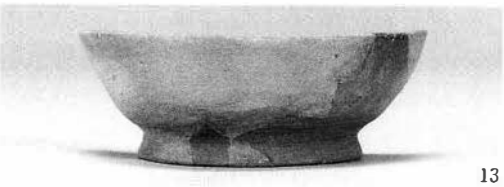

10a

11

9b

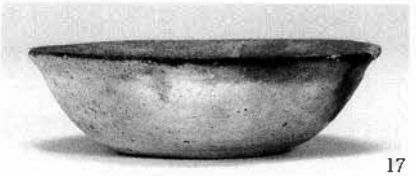

10b(拡大)

12


13

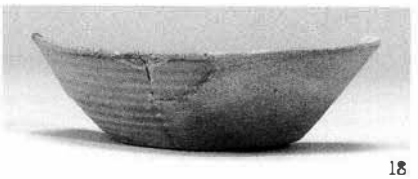
15b

16


17

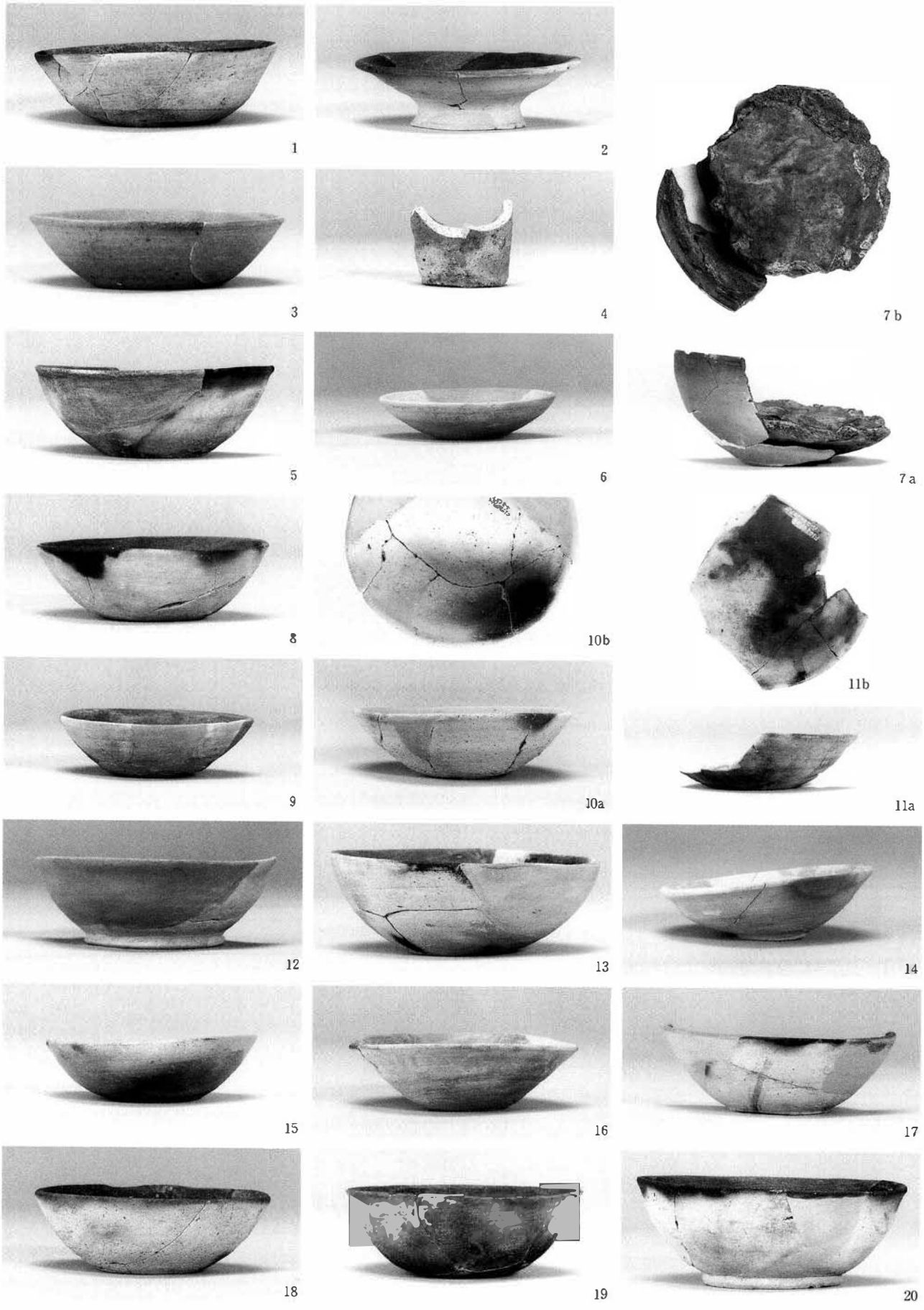
14

15a


18

1：6－1（挿図－番号）　2：11－1　3：15－1　4：15－3　5：15－6　6：15－7　7：15－5　8：15－8
9：15－10　10：15－11　11：15－12　12：15－14　13：15－16　14：20－3　15：26－2　16：26－3　17：28－1　18：28－3
（縮尺1/3）

図版7

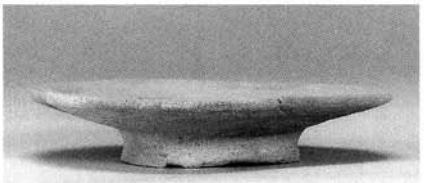


1：28－4（挿図－番号）　2：28－5　3：28－6　4：28－7　5：30－1　6：30－2　7：30－5　8：30－3　9：30－6
10：30－8　11：30－7　12：30－9　13：30－10　14：30－11　15：30－12　16：30－13　17：31－1　18：31－2　19：31－3
20：31－4

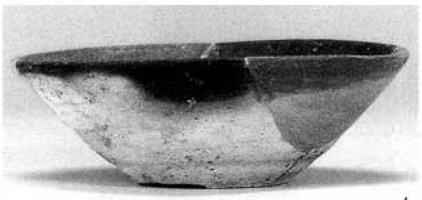
（縮尺1/3）

図版 8

1

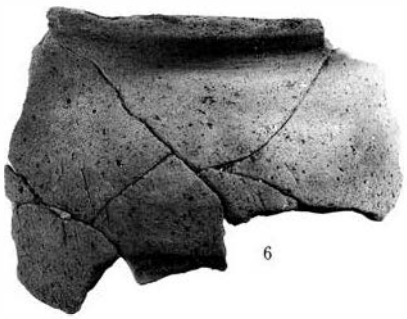

2

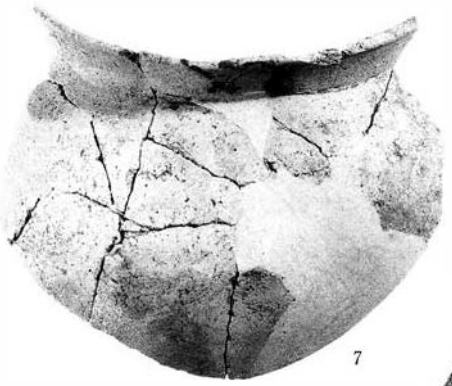
3


4

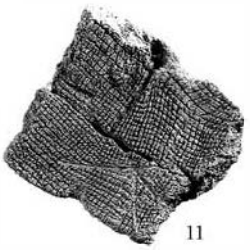
5

8


6

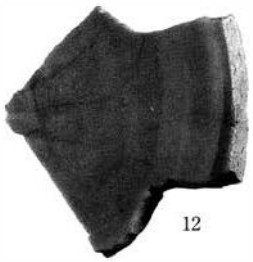

7

9


11

10

10拡大

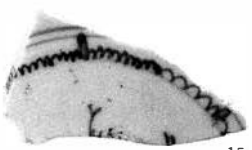

12

13

14

17

18

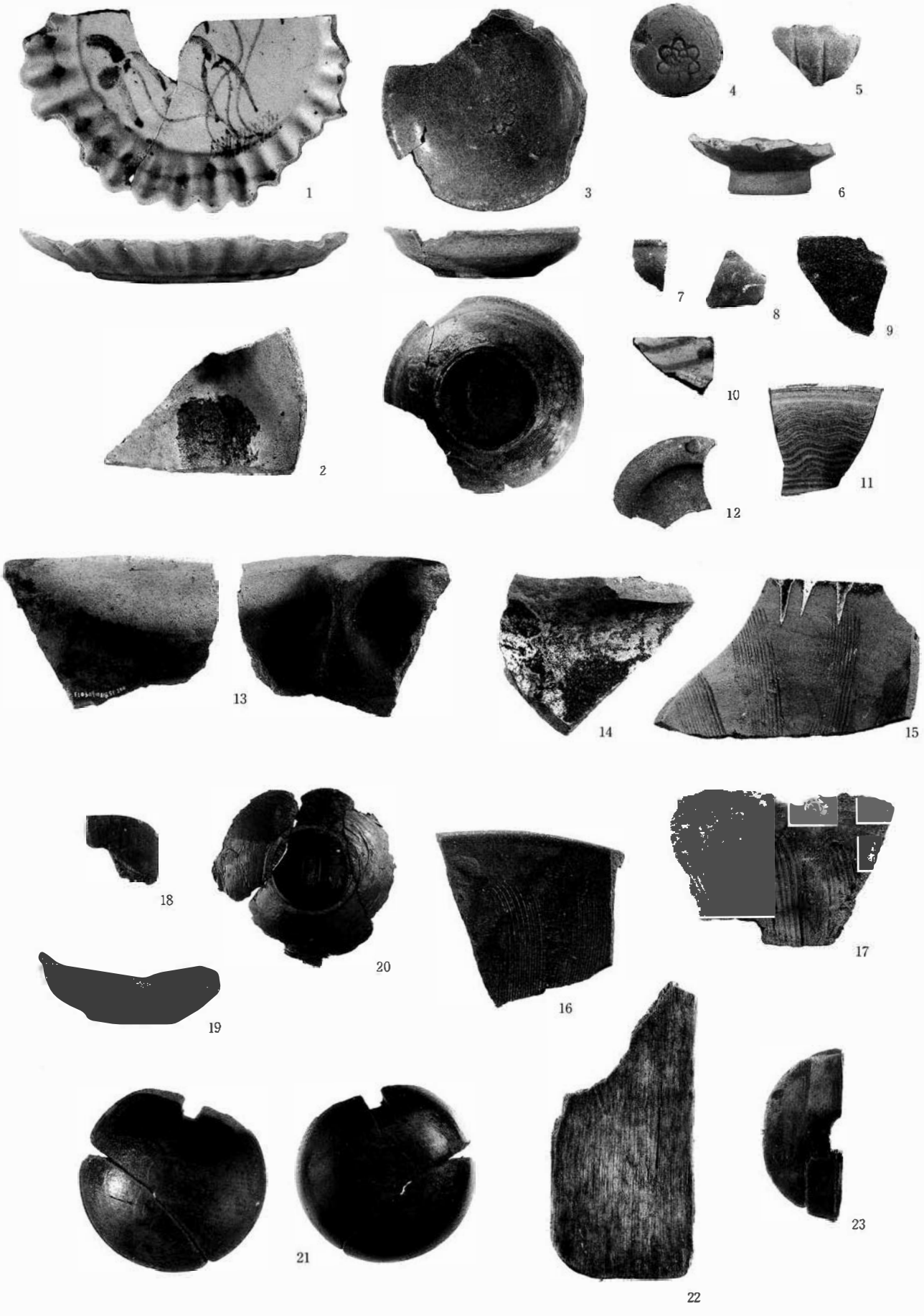

15

16

19

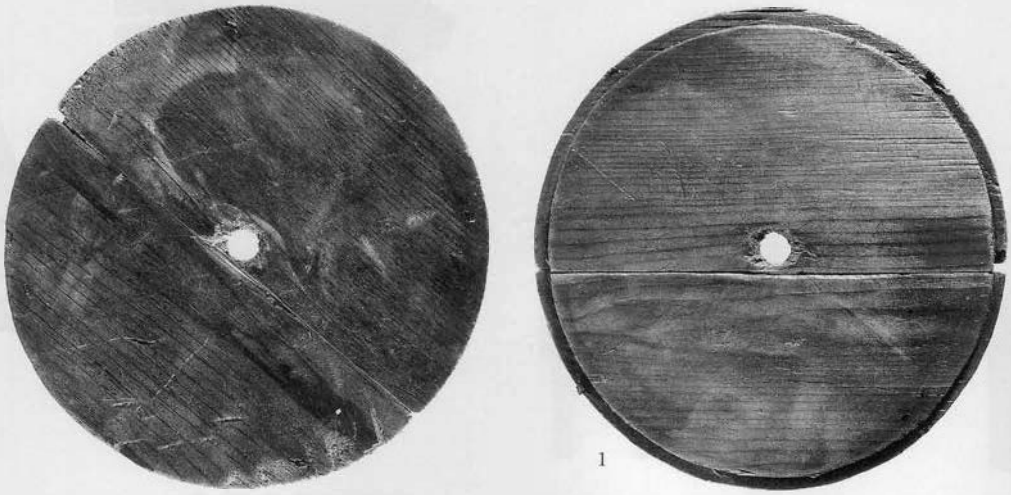
1：31－7（挿図－番号、または出土遺構）　2：31－8　3：31－9　4：35－1　5：35－2　6：30－14　7：35－5
8：26－1　9：35－6　10：35－7　11：pit4　12：20－1　13：SD3740　14：SD3744　15：20－6　16：SK3827　17：34－1
18：36－2　19：36－1　　（縮尺1～7、9、15～19：1/3　8、12～14：1/2　10・11：1/4）

図版9

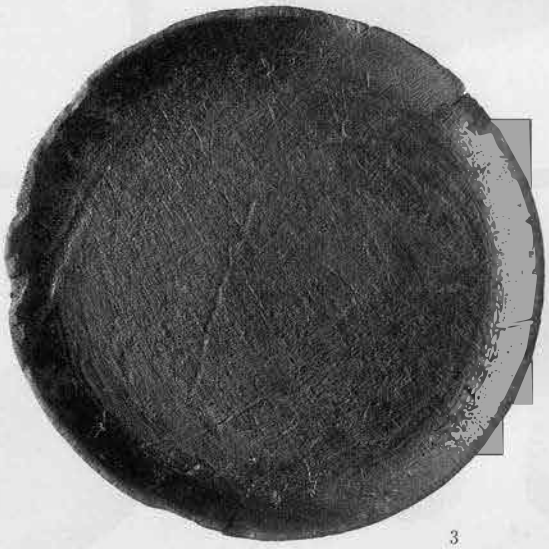


1：17－1（挿図－番号、または出土遺構）　2：17－2　3：20－5　4：20－2　5：SD3742　6：36－3　7：Ⅱc層
8：Ⅰ層　9：SD3740　10：SK3822　11：Ⅰ層　12：Ⅰ層　13：36－5　14：36－4　15：SD3759　16：Ⅰ層　17：SD3711
18：34－4　19：34－2　20：36－6　21：22－1　22：21－1　23：21－2　（縮尺1/3）

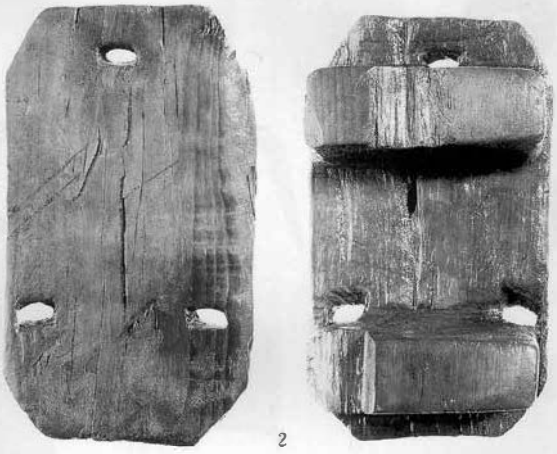
図版10



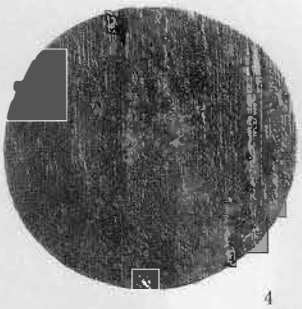
1



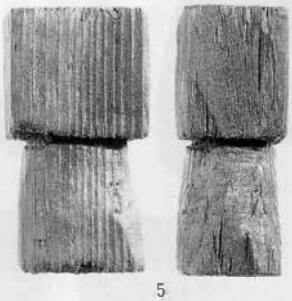
3



2

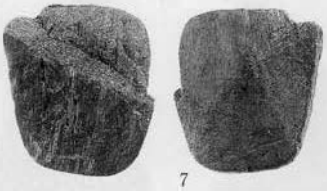


4



5

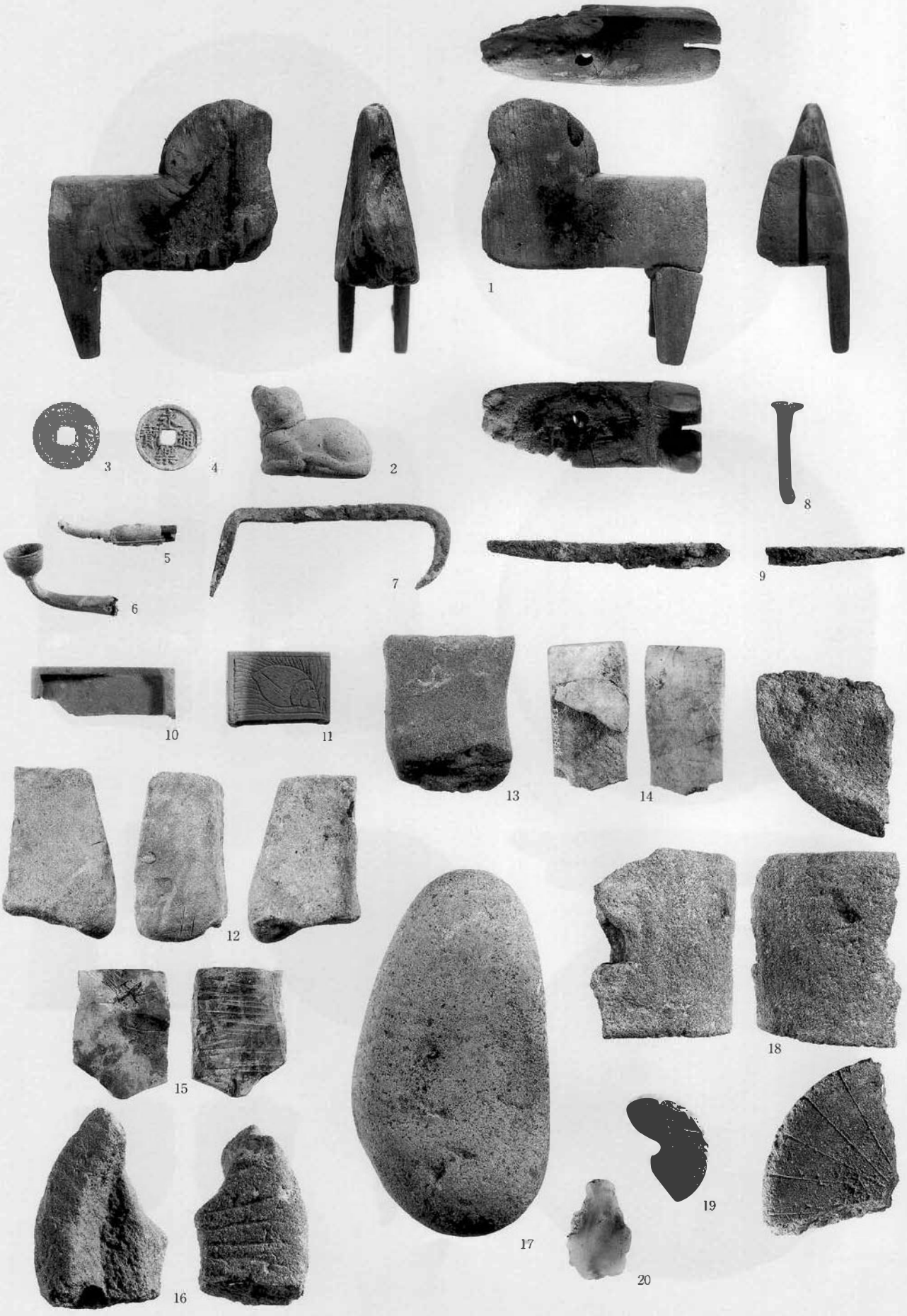
6



7

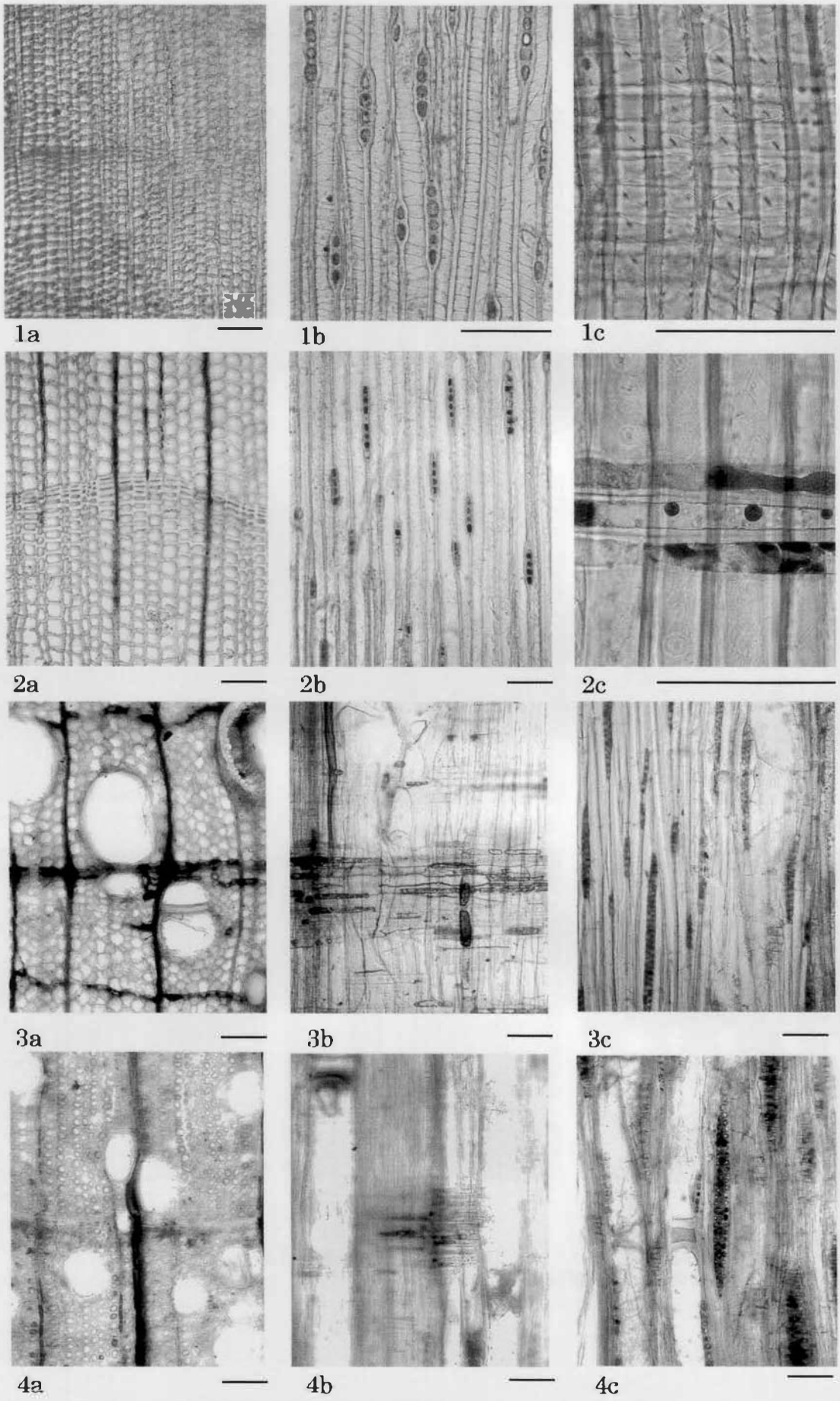
1：26－4（挿図－番号）　2：21－3　3：26－5　4：30－16　5：34－5　6：31－10　7：36－7　　（縮尺1/3）

図版11



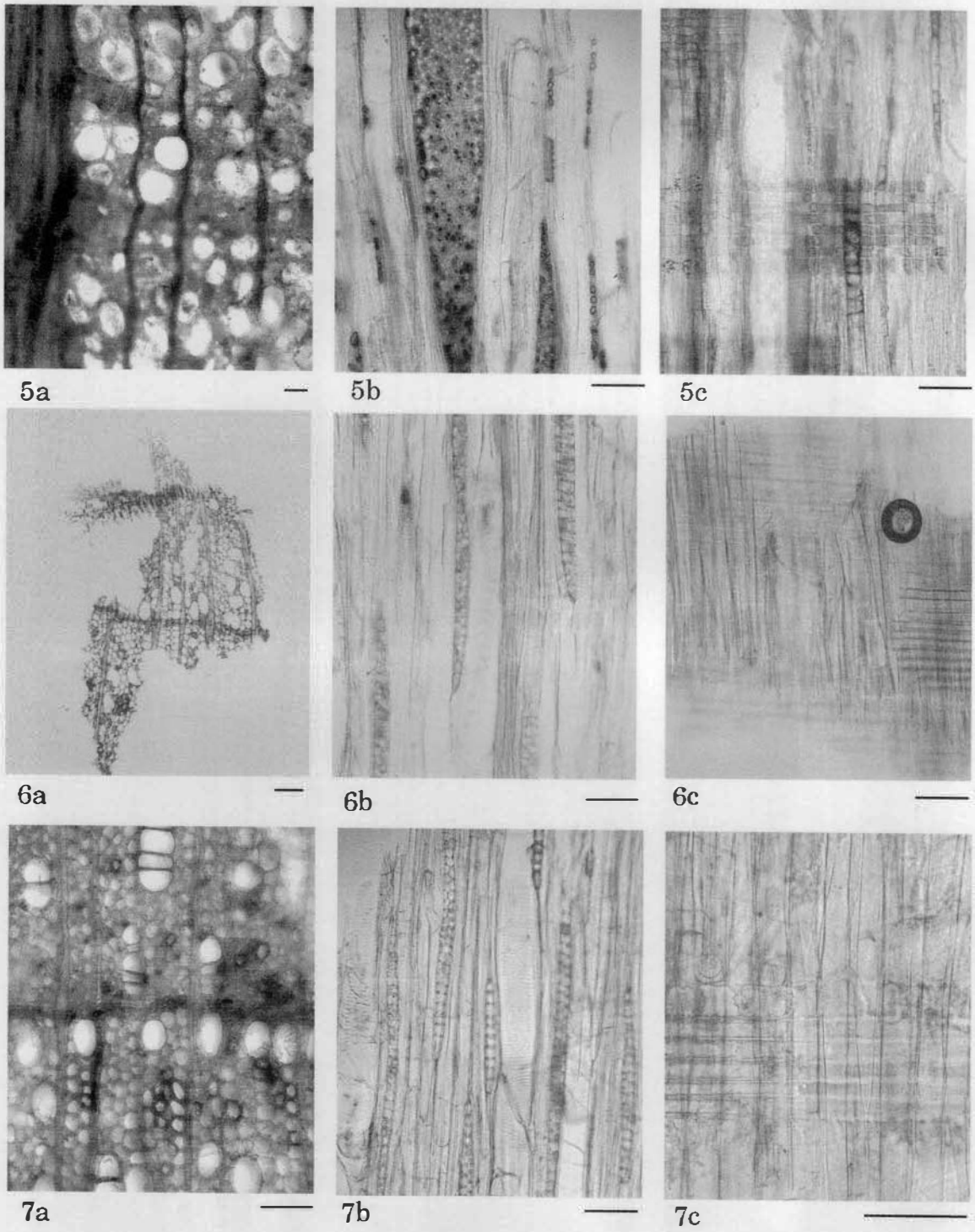
1：33－1（挿図－番号、または出土遺構）　2：37－1　3：17－4　4：34－8　5：37－2　6：8－1　7：35－5
8：17－3　9：37－4　10：34－3　11：20－4　12：26－6　13：34－6　14：36－8　15：36－10　16：21－5　17：36－11
18：36－12　19：31－11　20：SD3801
（縮尺1、10～15、17：1/3　2～9・19・20：1/2　16・18：1/4）

図版12



山王遺跡より出土した木製品の顕微鏡写真（1）
1．イヌガヤ（No20、下駄）　2．ヒノキ（No24、曲物）　3．サワグルミ（No11、不明）
4．カバノキ属（No 3、曲物底板）
（a：横断面、b：接線断面：c：放射断面、スケールは0.1mm）

図版13



山王遺跡出土木製品の顕微鏡写真（2）
5．ブナ（No.漆9、杓子）　6．モクレン属（No.12、馬形）、7．サクラ属（No.19、曲物蓋板）
（a：横断面、b：接線断面：c：放射断面、スケールは0.1mm）

図版14

報告書抄録

ふりがな	さんのういせきいせちくのちょうさ
書名	山王遺跡伊勢地区の調査
副書名	県道『泉－塩釜線』関連遺跡調査報告書V
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	第198集
編著者名	吉野　武
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980-8423　宮城県仙台市青葉区本町３－８－１　TEL 022－211－3684
発行年月日	西暦2004年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
山王遺跡	宮城県多賀城市南宮字伊勢	042099	18013	38度17分58秒	140度58分36秒	20000410～20000418 20020507～20020725 20030804～20031106	5,900	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山王遺跡	都市	平安	掘立柱建物跡 区画溝跡 井戸跡 溝跡 土壙 小溝状遺構	土師器、須恵器 赤焼土器 硯・瓦 石製品（砥石） 木製品（挽物） 金属製品（刀子） 漆紙	多賀城南面の街並みの末端部を検出した。街並みは西９道路よりさらに西に広がることが明らかになった。
	屋敷跡	近世	掘立柱建物跡 塀跡 区画溝跡 墓跡 溝跡 井戸跡 土壙	陶磁器、瓦質土器 漆器（椀・櫛） 土製品（土人形） 木製品（馬形・下駄など） 金属製品（煙管） 石製品（硯・茶■・石臼）	自然堤防から北に舌状に張出す微高地で掘立柱建物跡や井戸跡などで構成された屋敷地を検出した。屋敷地のある微高地の縁辺には溝が掘られている。

宮城県文化財調査報告書第198集

山王遺跡伊勢地区の調査

—県道『泉—塩釜線』関連調査報告書Ⅴ—

平成16年３月25日印刷
平成16年３月30日発行

発行　宮城県教育委員会
仙台市青葉区本町三丁目８番１号
印刷　株式会社　東北プリント
仙台市青葉区立町24－24